三重県埋蔵文化財調査報告　146－2

中の坊遺跡

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

中の坊遺跡　ＳＨ66

例　　言

1　本書は、三重県松阪市目田町字中の坊に所在する、中の坊遺跡(なかのぼういせき)の発掘調査報告書である。

2　本書は、平成８年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第２分冊である。

3　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元松阪市が負担した。

4　調査および整理の体制は以下の通りである。

調査主体	三重県教育委員会			
調査担当	三重県埋蔵文化財センター	調査第一課	主事	伊藤裕之
			臨時技術補助員	石淵誠人
		管理指導課	研修員	林　義巳
整理担当	三重県埋蔵文化財センター	調査第一課・管理指導課		

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口愛、楠純子、倉田由起子、小林桂代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いずみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子

5　調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、松阪市教育委員会、漕代土地改良区、松阪市漕代地区市民センターおよび地元の方々からご協力を頂いた。

6　遺構の実測は、調査担当者の他、三重県埋蔵文化財センター調査第一課の前川嘉宏、木野本和之、日栄智子、高田恵理子が行った。

7　本書の執筆は伊藤、石淵が分担して行い、目次に明記した。全体の編集、写真撮影は伊藤が行った。

8　本書の方位は、真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏６度20分（平成３年、国土地理院）である。

9　本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

ＳＨ＝竪穴住居　　ＳＥ＝井戸　　ＳＫ＝土坑　　ＳＤ＝溝　　ＳＡ＝土塁

10　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　題字は、鈴木恵理子氏の揮毫による。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

＜本文目次＞

Ⅰ　前　　言 ……（伊藤裕之）…1

Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（伊藤裕之）…2

Ⅲ　調査の成果　～層位と遺構～ ……5

1　調査の方法……（伊藤裕之）…5
2　Ａ地区 ……（伊藤裕之）…7
3　Ｂ地区 ……（伊藤裕之）…14
4　Ｃ地区 ……（伊藤裕之）…20
5　Ｄ・Ｅ地区 ……（石淵誠人）…22

Ⅳ　調査の成果　～出土遺物～ ……26

1　Ａ地区 ……（伊藤裕之）…26
2　Ｂ地区 ……（伊藤裕之）…29
3　Ｃ地区 ……（伊藤裕之）…32
4　Ｄ・Ｅ地区 ……（石淵誠人）…33

Ⅴ　結　　語 ……（伊藤裕之）…35

＜図版目次＞

図版１　Ａ地区全景……56
　　ＳＨ15遺物出土状況（Ａ地区）……56
図版２　Ｄ７ Pit１遺物出土状況（Ａ地区）……57
　　ＳＤ７（Ａ地区）……57
図版３　ＳＤ18（Ａ地区）……58
　　Ｂ地区全景……58
図版４　ＳＨ66遺物出土状況（Ｂ地区）……59
　　ＳＨ66遺物出土状況（Ｂ地区）……59
図版５　ＳＨ66遺物出土状況（Ｂ地区）……60
　　ＳＨ66遺物出土状況（Ｂ地区）……60
図版６　ＳＤ56（Ｂ地区）……61
　　Ｃ地区全景……61
図版７　ＳＫ81（Ｃ地区）……62
　　ＳＫ87（Ｃ地区）……62
図版８　Ｅ地区全景……63
　　ＳＫ68遺物出土状況（Ｅ地区）……63
図版９　作業風景（Ａ地区）……64
　　漕代幼稚園園児見学風景……64
図版10　出土遺物……65
図版11　出土遺物……66
図版12　出土遺物……67
図版13　出土遺物……68
図版14　出土遺物……69
図版15　出土遺物……70
図版16　出土遺物……71
図版17　出土遺物……72
図版18　出土遺物……73
図版19　出土遺物……74
図版20　出土遺物……75

＜挿図目次＞

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡地形図……5
第３図　調査区位置図……6
第４図　Ａ地区遺構平面図……7
第５図　ＳＨ15土層断面図・遺物出土状況図
　　（Ａ地区）……8
第６図　Ｄ７ Pit１遺物出土状況図（Ａ地区）…9
第７図　ＳＫ14遺物出土状況図（Ａ地区）……9
第８図　中の坊遺跡出土の中世土師器皿……10
第９図　ＳＤ７土層断面図（Ａ地区）……11
第10図　ＳＤ18土層断面図（Ａ地区）……11
第11図　ＳＤ18遺物出土状況図（Ａ地区）……12
第12図　Ｂ地区遺構平面図……13
第13図　Ｂ地区土層図（北壁・南壁）……13
第14図　ＳＨ66実測図（Ｂ地区）……14
第15図　ＳＨ66遺物出土状況図（Ｂ地区）…15・16
第16図　ＳＨ66遺物出土状況図（Ｂ地区）……17
第17図　ＳＤ56土層断面図（Ｂ地区）……17
第18図　Ｃ地区遺構平面図……21
第19図　Ｃ地区南壁土層図……21
第20図　Ｄ地区遺構平面図……23
第21図　Ｄ地区北壁平面図……23
第22図　Ｅ地区遺構平面図……24
第23図　Ｅ地区東壁土層図……25
第24図　ＳＫ68遺物出土状況図（Ｅ地区）……25
第25図　中の坊遺跡出土の古式土師器高杯……30
第26図　ＳＡ51出土遺物（Ｂ地区）……31
第27図　和鏡構図概念図……32
第28図　遺物実測図……47
第29図　遺物実測図……48
第30図　遺物実測図……49
第31図　遺物実測図……50
第32図　遺物実測図……51
第33図　遺物実測図……52
第34図　遺物実測図……53
第35図　遺物実測図……54
第36図　遺物実測図……55

＜表　目　次＞

第１表　遺物観察表……38
第２表　遺物観察表……39
第３表　遺物観察表……40
第４表　遺物観察表……41
第５表　遺物観察表……42
第６表　遺物観察表……43
第７表　遺物観察表……44
第８表　遺物観察表……45
第９表　遺物観察表……46

Ⅰ　前　　言

1．調査の契機

中の坊遺跡は，松阪市目田町字中の坊に所在する遺跡である。平成８年度県営ほ場整備事業（漕代地区）に伴う試掘調査を、平成８年３月７日、７月18日に行った結果、事業地内の21,800㎡にわたり、古墳時代および中世の遺跡が広がっていることが確認された（第３図）。そこで松阪農林事務所との協議の結果、工事によって破壊される部分(1,300㎡）について本調査を行うことになった。

2．調査の経緯

(1)　調査経過概要

調査範囲は、Ａ地区～Ｅ地区の５地区に分かれる。調査期間は、平成８年８月19日から同年11月22日までである。

調査に参加して頂いたのは、松阪市漕代地区在住の方々である。ここに御名前を記し、お礼申し上げたい。

岡田茂男、奥井久雄、阪井正、田所輝男、西田昌之、青木キヨ、奥田松代、久保田ハナ、田所きぬ子、中井志づ、中井俊子、中西美奈子、中村せい子、中村みちよ、前田きみ子、脇田房子

(2)　調査日誌（抄）

８月７日　現地協議

８月９日　Ａ地区、柿の木の伐採。

８月19日　Ａ地区、伐根・表土除去。猛暑。

８月20日　Ａ地区、表土除去。検出面がはっきりせず、西側にトレンチを入れる。中央部から台付甕出土。再度、下げる。レベル移動。

８月21日　Ａ地区、表土除去終了。

８月22日　作業員初日。淡黄褐色粘質土が検出面。

８月26日　溝数条確認。緑釉陶器・ロクロ土師器が出土。

９月２日　久々に作業実施。ＳＤ７より中世土器。

９月３日　西側トレンチより台付甕が出土。

９月４日　漕代幼稚園が現場見学。

９月５日　ＳＨ15から焼土・灰とともに小型丸底壷がほぼ完存で５個体出土する。

９月10日　連日の大雨で、調査区は完全に水没。水中ポンプをフル稼働。

９月11日　ＳＤ７の石組は残存度が芳しくなく除去。

９月18日　Ｄ・Ｅ地区の表土除去。

９月19日　Ｄ・Ｅ地区の表土除去終了。Ａ地区の北端より、大量の土師器皿・鍋出土。

９月20日　Ａ地区全景写真。台風への防備固める。

９月24日　Ｄ地区、遺構・遺物、ほとんどなし。

９月25日　Ｄ・Ｅ地区コーナーより、大量の古式土師器。焼土も混じるが、かなり下がる見込み。

９月27日　Ａ地区の遺構実測を並行して実施。

10月１日　Ｅ地区、ＳＤ７より、ロクロ土師器。

10月４日　Ａ地区遺構実測終了。Ｅ地区コーナー部分、焼土と灰との互層状態が深く続く。排土搬出が困難になる。

10月７日　Ｂ地区の表土除去。明赤褐色粘質土が南北に走る。北部分に土器が集中して見つかる。コンテナ２箱。

10月８日　Ｂ地区、表土除去終了。排水溝掘削中に軒平瓦出土。

10月９日　Ｂ地区のＳＤ51は、壁面観察より土塁状の高まりであることを確認。ＳＡに変更。

10月15日　大雨で全地区水没。復旧には数日要す。

10月17日　ＳＤ56から大量の土師器皿・鍋出土。Ａ地区のＳＤ７と同規模の溝か。

10月21日　Ｂ地区にベルコン設置。

10月22日　Ｂ地区、ＳＫ66から、土師器高杯が次々と出土。一方、Ｅ地区の掘削まだ続く。大溝の一部分か。

10月23日　Ｂ地区、土師器の丸底壷や高杯が連なっ

て出土。古墳の周溝？しかし、埴輪もなく古墳の可能性は低い。

10月24日　E地区、土師器の台付甕と高杯が土坑内から出土。

10月28日　連日の雨で、作業中止が続く。D地区の土層図を実測。

10月29日　全地区水没。B地区の土器が心配される。

10月30日　天候が不安定のため、B地区のSK66の遺物出土状況の写真撮影を実施。

10月31日　E地区、遺構実測。

11月1日　C地区、表土除去。

11月7日　D・E地区、遺構実測終了。

11月9日　土曜日ではあるが、天候が不順なために実施。SK66の土器取り上げ。C地区では、常滑焼の壺とともに、宋銭出土。

11月12日　連日の雨により、またも水没。水の量は過去最高か。

11月13日　B地区の全景写真。

11月14日　C地区の全景写真。

11月15日　地元向けに、現地説明会を実施。
作業員最終日。B・C地区ダメ押し。

11月16日　B・C地区、遺構実測開始。

11月19日　B・C地区、遺構実測終了。

11月21日　漕代幼稚園で、「遺跡のお話」をする。

11月22日　松阪農林事務所に引渡。

3月12日　松阪市漕代地区市民センターで、中の坊遺跡説明会・遺物展示会を実施。

(3)　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法第57条ノ3①（文化庁長官あて）
平成8年8月12日付け教文第1558号（県知事通知）

・法第98条ノ2①（文化庁長官あて）
平成8年7月13日付け教文第1584号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察所長あて）
平成8年12月5日付け教文第18-73号（県教育長通知）

II　位置と歴史的環境

1．位　置

中の坊遺跡（1）は、行政上は三重県松阪市目田町字中の坊に所在する。付近一帯は、松阪市東部の豊かな穀倉地帯になっている。三重県と奈良県との境にある台高山脈の高見山(1,248m)、国見山(1,419m)の奥深くに源を発した櫛田川は、流域に河岸段丘を発達させ、幾多の蛇行を繰り返して、伊勢湾に向けてほぼ東流し、JR紀勢本線の櫛田川橋梁あたりで祓川を分流する。中の坊遺跡は、その分岐点から、北東に約2kmにあり、沖積平野の標高11m前後の自然堤防上に位置する。

現在、櫛田川の分流となっている祓川は、旧河道や自然堤防の発達が著しく、かつては櫛田川本流であったと考えられている。櫛田川は、現河道と祓川との間で、たびたびの乱流を繰り返すが、永保2年(1082)の地震と大洪水によって、現河道になった[①]と伝えられる。かつての乱流の痕跡は、自然堤防や畦畔に見られるが、中の坊遺跡の西側を流れていた用水路も、旧河道のひとつであると考えられる。

中の坊遺跡付近には、「中の坊」をはじめとして「薬師寺」「塔田」「門」など寺にまつわると思われる小字がある。明治19年の伊勢国飯野郡目田村全図によれば、今回調査したA地区の東に神社が見られる。地元にはいくつかの伝承が残っているが、寺に関するものでは、織田信長の焼き討ちに合うまでは、中の坊遺跡あたりには大きな寺院があったというものがある。また、目田の集落は、かつては中の坊にあったが、大洪水に流されたため、西寄りの現在地に移ったともいわれている。さらには、「飢饉となり、目田の集落が3軒までに減ったならば、金の鳥居を掘り起こして、再興すべし」という「金の鳥居」伝説がある。いずれも、伝承の域を越えないものではあるが、中の坊遺跡周辺が地元の人々にとって特別な場所とされていたことは興味深い。

2．歴史的環境

⑴　旧石器時代～縄文時代

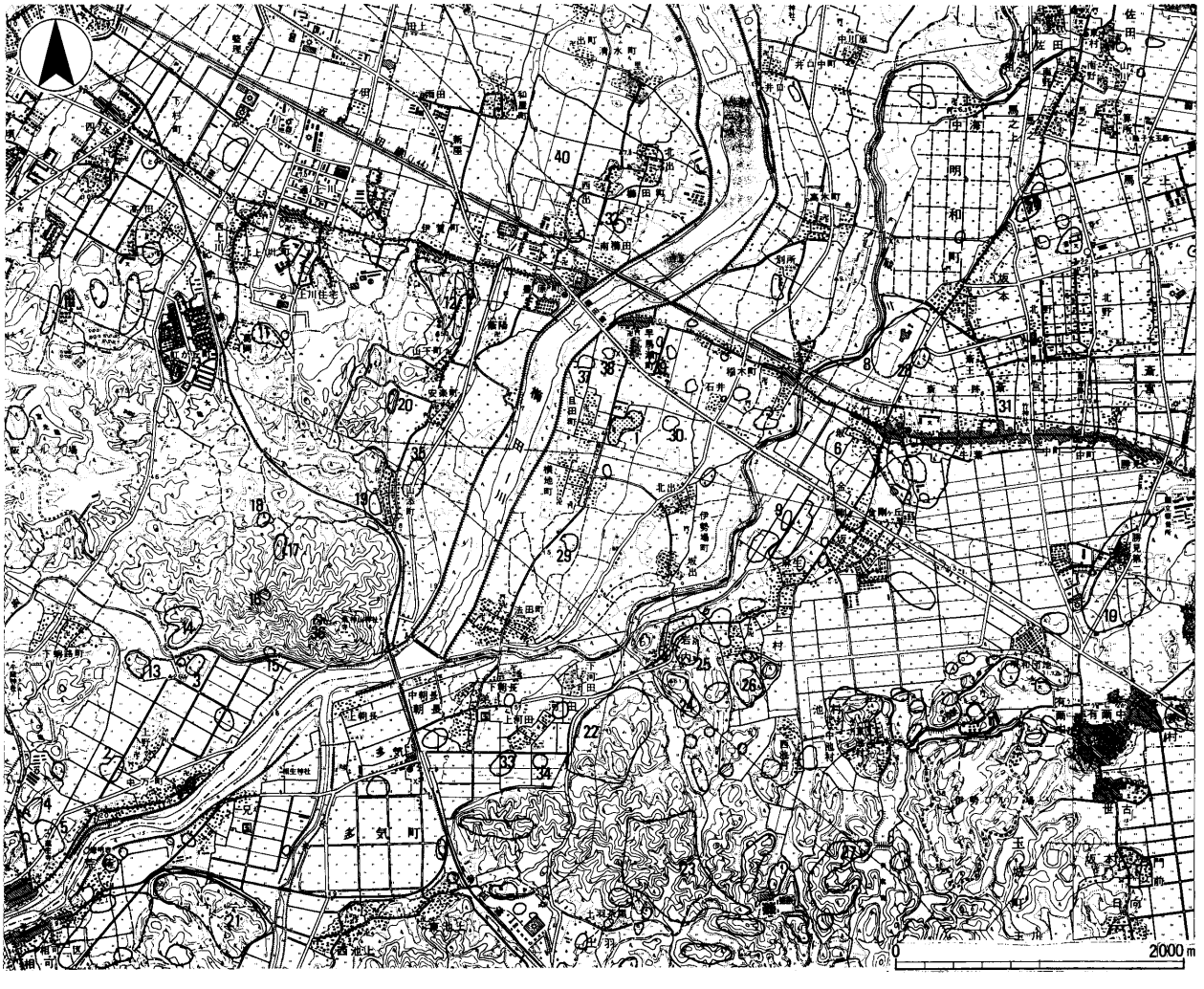
櫛田川流域には数多くの遺跡がある[2]。その歴史は旧石器時代まで遡ることができる。上寺遺跡（2）でナイフ形石器が出土しているが、当時の人々の生活の中心はもっぱら櫛田川の上・中流であったようである。縄文早期になると、射和付近に射原垣内遺跡（3）、上寺遺跡[3]（2）、鴻ノ木遺跡（4）、朱中遺跡[4]（5）等がある。後期・晩期になると、活動域は下流域にも拡大し、明野台地西端の金剛坂遺跡[5]（6）や粟垣内遺跡（7）等がみられる。

⑵　弥生時代

射和付近では、上寺遺跡（2）、鴻ノ木遺跡（4）、櫛田川右岸では金剛坂遺跡（6）、粟垣内遺跡（7）、古里遺跡（8）、寺垣内遺跡（9）、銅鐸型土製品が出土した北野遺跡（10）、櫛田川左岸では浅堀木遺跡（11）、天王山遺跡（12）などがある。とりわけ、金剛坂遺跡は、弥生時代全般にわたって大規模なムラを形成していたと考えられる。櫛田川に臨む台地の縁辺部には、弥生時代の人々が連綿と生活していたことがわかる。

⑶　古墳時代

中の坊遺跡の西方および南方の丘陵には数多くの古墳が造営されている。櫛田川左岸では、尾だけ古墳群（13）、中万大谷古墳群（14）、弁天窟古墳（15）、長谷古墳群（16）、やつで古墳群（17）、



第１図　遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院「松阪」「明野」1:25,000より）

中山田古墳群（18）、山添古墳群（19）、西谷古墳群(20)等がある。一方、櫛田川右岸には、大規模な古墳群が連なる。黒田山古墳群（21）、河田古墳群[8]（22）、上村池古墳群（23）、大塚山古墳群（24）、神前山古墳群（25）、天王山古墳群（26）、斎宮池古墳群（27）、塚山古墳群（28）等がある。戦中・戦後の開墾や開発で消滅したものも考え合わせると、かなりの数にのぼるはずである。

しかしながら、このように数多くの古墳の築造を支えた集落跡は、はっきりしない。櫛田川左岸の上寺遺跡、射原垣内遺跡、鴻ノ木遺跡が知られている程度である。中の坊遺跡の北方にある横地高畑遺跡（29）では、古墳時代の須恵器片、土師器片が多く分布している。中の坊遺跡の東方300mにある古川遺跡[9]（30）ではS字状口縁台付甕をはじめとする古墳時代の遺物も多数出土したが、集落の確認までは至らなかった。漕代地区付近にも、古墳時代の集落の存在が推定されるが、詳細は不明である。

(4) 古代

この時代を語るうえで、切り離せないのが、斎宮跡（31）である。御杖代として未婚の皇女（斎王）が神宮に奉仕する斎王制度は、7世紀後半の天武朝には確立し、南北朝まで続く。明和町斎宮・竹川に斎宮寮が置かれた。また、祓川は飯野・多気郡の郡境であり、神の近境でもあった。

奈良時代の寺院跡としては、櫛田川左岸の大雷寺廃寺（32）があり、大量の瓦が出土したが、寺域ははっきりとしていない。

平安時代になると、飯野・多気両郡の諸地域が東寺領として寄進される。延暦22年(803）に川合荘、弘仁12年(821）に大国荘が成立した。カウジデン遺跡[10]（33）、東浦遺跡（34）がこの頃の遺跡である。しかし、これらの荘園も神三郡（度会・多気・飯野）の中の寺領であるため、神宮の強い圧迫を受けたり、度重なる櫛田川の氾濫によって、12世紀には崩壊する。

(5) 中世

この時代になると、櫛田川と祓川との間には、多くの遺物分布地が見られるが、発掘調査例は少なく、集落跡については不明な点も多い。櫛田川左岸の山添遺跡[11]（35）は、北畠氏の家臣・山副氏館跡の可能性もある。また、背後の神山城跡（36）は、興国3年(1342)に落城するまで、南朝方の重要な戦略拠点であった。

目田村は、中世末には北畠氏の所領となり、その被官沢氏により支配されていた[12]と考えられている。また、天文15年(1546)書写の神服部内戸納帳には「目田　寶泉寺」の記載がある。

中の坊遺跡の東方300mにある古川遺跡は4基の石組井戸を伴う鎌倉時代の集落跡が確認されている。横地高畑遺跡、古轡通りA遺跡（37）、古轡通りB遺跡（38）、崩れ通り遺跡（39）は、自然堤防上に発達した一連のつながりをもった集落跡とも考えられる。

その他には、金剛坂遺跡、寺垣内遺跡、カウジデン遺跡等、中世の遺跡はたくさん見られる。また、櫛田川左岸の櫛田地区においても、櫛田地区内遺跡群[13](40)として、多くの中世から近世にかけての遺跡が見られる。

① 「西黒部意非多神社由緒記」永保2年7月10日、13日に「櫛田川流域ヲ変ジ」とある。（『松阪市史』（第一巻）資料編　自然　松阪市史編纂委員会、1977年）

② 遺跡についての記述で特に註記なきは、主に下記の文献を参考とした。

『松阪市史』（第二巻）資料編　考古（松阪市史編纂委員会、1977年）

『日本の古代遺跡　52　三重』　（伊藤久嗣編著、1996年）

③ 奥義次・下村登良男　「上寺遺跡発掘調査報告」（松阪市教育委員会、1981年）

④ 小浜学ほか　「朱中遺跡・朱中古墳群」（『一般国道42号線松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター、1996年）

⑤ 谷本鋭次ほか　「金剛坂遺跡発掘調査報告」（明和町教育委員会、1971年）

⑥ 山沢義貴・谷本鋭次　「金剛坂遺跡発掘調査報告」（明和町郷土文化を守る会、1971年）

田村陽一　「金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1985年）

⑦ 竹田憲治　「北野遺跡（第5次）発掘調査概報」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

田村陽一　「多気郡明和町蓑村　北野遺跡」（『平成2年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告　第2分冊』三重県埋蔵文化財センター、1990年）

⑧ 吉水康夫　「河田古墳群Ⅰ」（多気町教育委員会、1974年）

下村登良男　「河田古墳群Ⅲ」（多気町教育委員会、1986年）

田阪仁ほか　「河田古墳群Ⅳ」（多気町教育委員会、1983年）

⑨ 伊藤裕之　「古川遺跡」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

⑩ 「カウジテン遺跡」（『三重県埋蔵文化財年報10』三重県教育委員会、1980年）

⑪ 新田洋「山添遺跡発掘調査報告」（三重県教育委員会、1979年）

⑫ 「澤氏古文書　四－22」に「就目田龍頭庵闕所之儀　委細承候先規至無引懸紛者　任前ゝ筋目可被闕所候　萬一申族有之者　重而不審可申候也」とある。（『松阪市史』（第三巻）資料篇　古代・中世　松阪市史編纂委員会、1980年）

⑬ 宇河雅之・袖岡直樹　「瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

III　調査の成果 ～層位と遺構～

1．調査の方法

今回の調査では、調査区が５つに分かれるため、Ａ～Ｅの大地区を設定した。北側の果樹園をＡ地区、南側の畑地をＢ地区、南端の水路掘削予定部分をＣ地区、北端及び東側の水路掘削予定部分をそれぞれＤ、Ｅ地区とした。小地区については、北西端をＡ１としたが、Ｄ、Ｅ地区については、その接点である北西隅をＡ１とした。

第２図　遺跡地形図（1:5,000）

第3図　調査区位置図（1:2,000）■は試掘坑

2．A地区

(1) 層位

自然堤防上に位置しており、シルト系の安定した土壌であり、礫等はほとんど見られない。当地区の基本的な層序は、上より第1層：耕作土、第2層：暗灰褐色粘質土、第3層：暗灰色粘質土、第4層：暗黄褐色粘質土、第5層：黄褐色粘質土となっている。第4層から第5層への土質の変化は、全体的に漸次的である。第4層が遺物包含層である。第5層は、古墳時代の地山と考えられる。検出面は、第4層上面である。なお、A地区では、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構を確認したが、検出面はほぼ同じであった。

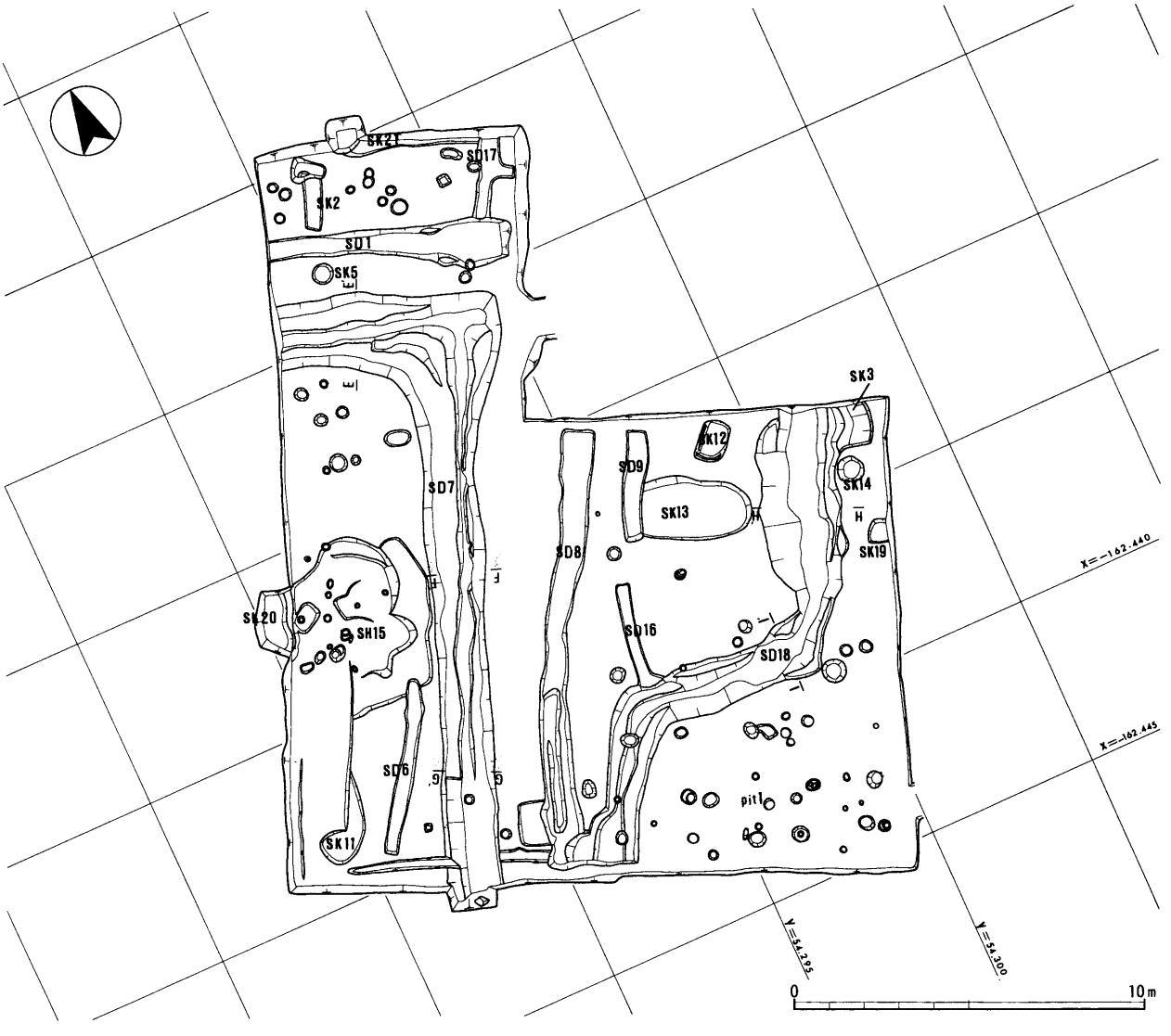
(2) 遺構

(a) 古墳時代の遺構

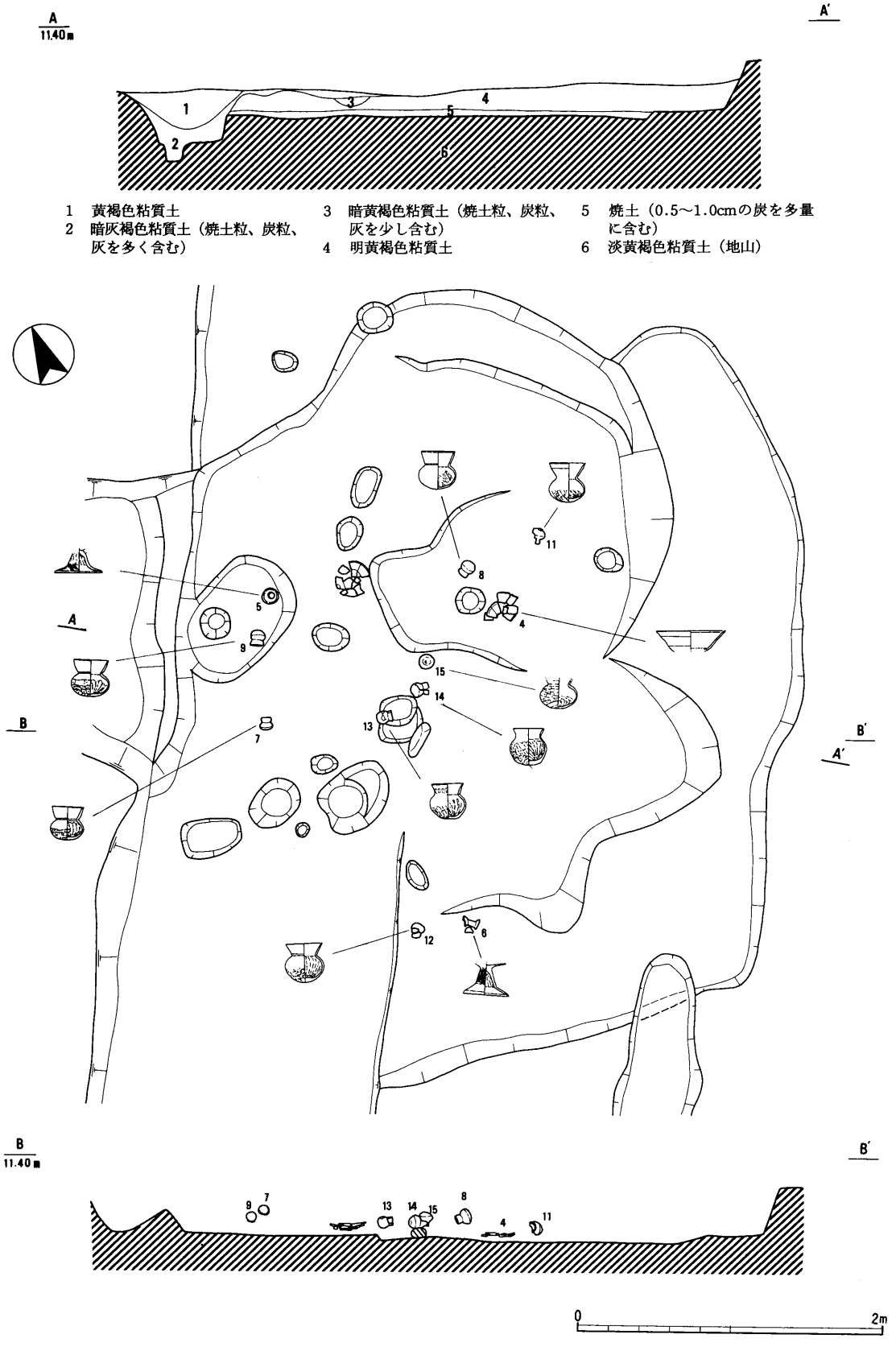
竪穴住居1基、土坑2基、ピットを検出した。遺構埋土は暗黄褐色系の粘質土であるが、地山も黄褐色粘質土のため、検出は炭粒や焼土粒、土器片の有無を確認しながら行った。

（ア）竪穴住居

ＳＨ15（第5図）　A地区中央部西端で検出した。遺構埋土がはっきりしないため、暗黄褐色粘質土下の焼土を追いかける形で検出をした。そのため、切り合い関係が確認できないままの検出となった。お



第4図　A地区遺構平面図（1:200）



1　黄褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土（焼土粒、炭粒、灰を多く含む）
3　暗黄褐色粘質土（焼土粒、炭粒、灰を少し含む）
4　明黄褐色粘質土
5　焼土（0.5～1.0cmの炭を多量に含む）
6　淡黄褐色粘質土（地山）

第５図　ＳＨ15土層断面図・遺物出土状況図（1:40）

そらく、2・3棟の竪穴住居が重なっていたのであろう。そうであれば、柱穴間2.4m、一辺3.6m級と一辺4.5m級の方形のものと考えられる。ＳＨ15内の焼土内に置かれた細長い石は、炉石であろう。また、西端の長径0.9m、短径0.6m、深さ0.4mの土坑は、貯蔵穴であった可能性がある。いずれの柱穴や土坑にも焼土粒・炭粒・灰が多量に混じった暗灰褐色粘質土が入っていた。灰は、茅・藁等を燃やしたような細かなもので、材木等が燃えたような痕跡を見つけることはできなかった。

（イ）土坑

ＳＫ11　Ａ地区西部分のトレンチ掘削後に検出した底部1.0mの円形の土坑である。遺物は、若干の須恵器片と土師器片が明灰色粘質土の埋土の中から検出された。

ＳＫ13　Ａ地区の北東付近で検出された長軸3.3m、短軸1.8mの楕円状の土坑で、深さは0.3mである。西端は、ＳＤ９（中世）に切られる。淡灰褐色粘質土、黄褐色粘質土の埋土である。須恵器杯蓋(1)、須恵器甕の破片が出土した。上層の埋土には、奈良・平安時代の土師器片も混じる。

（ウ）ピット

Pit 1（第６図）　Ａ地区南東部分の中世のピットが集中する地区から検出された径0.28m、深さ0.33mのピットである。底部から小型の二重口縁壺（16）が横向きの状態で完存で検出された。

このピットは、付近に古墳時代の掘建柱建物の柱穴が見当たらないことから、柱穴というよりも、土器を埋納するための遺構である可能性[13]が高い。出土遺物が小型の二重口縁壺という極めて特殊なものであることを考え合わせると、供献などの行為に用いられたのではないかと考えられる。

(b)　奈良・平安時代の遺構

包含層全般からは、奈良・平安時代と思われる土師器片が検出されているが、遺構として確認できたのは、土坑３基である。埋土的には、古墳時代同様の暗黄褐色系であるため、地山との区別がつきにくい。

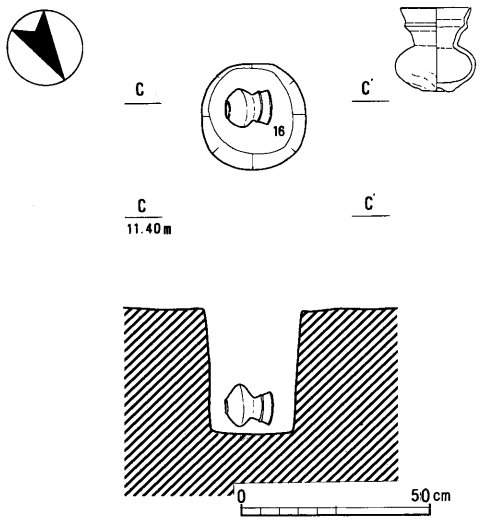
（ア）土坑

ＳＫ２　Ａ地区北端で検出された長径0.5m、短径0.3m、深さ0.3mの楕円状の土坑である。土坑の南側には、長さ0.7m、幅0.25m、深さ0.1mの溝がつく。出土遺物は、奈良・平安時代頃の土師器片と土錘(17)である。

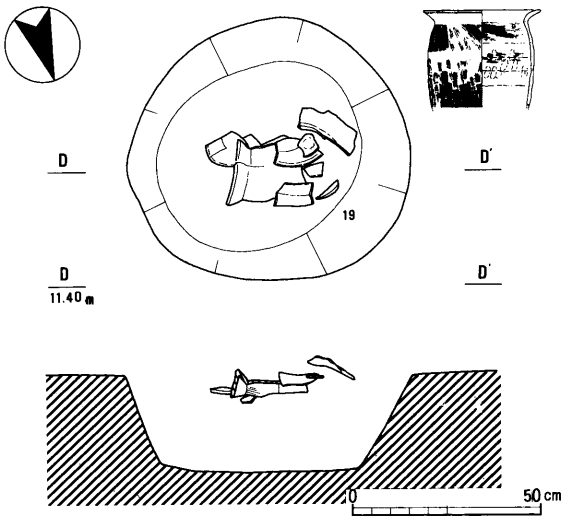
ＳＫ５　ＳＫ２から３m南にある径0.6m、深さ0.3mの円形の土坑である。土坑内からは、緑釉陶器椀の高台部分(18)や土師器片が出土した。

ＳＫ14（第７図）　調査区北東部分で検出された径0.8m、深さ0.26mの円形の土坑である。奈良時代頃の土師器長胴甕の上部(19)が押しつぶされた形で検出された。

(c)　中世の遺構



第６図　Pit 1　出土状況図（1:20）



第７図　ＳＫ14　出土状況図（1:20）

土坑５基、溝６条を検出した。淡褐色系の埋土が多く、比較的検出は容易である。

（ア）土坑

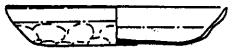
ＳＫ３　Ａ地区中央部北東隅で検出した東西0.7m、南北0.5m、深さ0.3mの土坑であり，ＳＤ18を切っている。ＳＤ18が廃棄された後に、廃棄土坑として掘られたと考えられる。多量の土師器皿が出土した。土師器皿は、径８cm前後、器高１cm前後の土師器小皿（23～27）と1.6cm前後の土師器皿Ｂ（28～33）に分けられる。それらに混じって、小型の土師器鍋、山茶椀、青磁片、砥石(36)が出土した。

ＳＫ12　Ａ地区中央部北端付近で検出した1.2m×0.8m、深さ0.3mのほぼ方形の土坑である。底部に穿孔のある土師器皿(86)が１枚、上向きの状態で出土した。

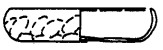
ＳＫ19　Ａ地区中央部東端で検出した0.7m×0.5m、深さ0.2mの土坑であるが、調査区の東側にさらに伸びる。遺物は、土師器片が少々である。

ＳＫ22　Ａ地区北端の排水路掘削の際に見つかった。調査区北端に並行しており、東西に走る溝の可能性もある。土師器皿(97)や煤のついた土師器鍋(98～100)が出土した。とくに、ＳＫ22西端部分からは、多量の鍋が重なるように出土した。

土師器小皿
径８cm前後、器高１cm前後のもの



土師器皿Ａ
径11cm前後、器高２cm前後のもの



土師器皿Ｂ
径８cm前後、器高1.6～2cm前後のもの

第８図　中の坊遺跡出土の中世土師器皿

（イ）溝

ＳＤ１　Ａ地区の北端を東西に走る幅0.6m、深さ0.2mの溝である。東のほうが深くなっている。淡褐色粘質土・暗褐色粘質土の埋土である。土師器鍋(22)が倒立した状態で完形で出土した。土師器鍋(21)や常滑窯産の陶器大甕の口縁部小片などが出土した。

ＳＤ４　Ａ地区の北端部分を南北に走る幅0.4m、深さ0.3mの小溝であるが、中央部分で東側に枝分かれしている。また、南端部分は、ＳＤ１に切られている。土師器の細片が出土した。

ＳＤ６　Ａ地区の南西部分に南北に走る幅0.4m、深さ0.3mの小溝である。南端部分は、土地境界のコンクリート基礎で撹乱されている。土師器皿や小型の鍋(37)、茶釜形の鍋、山茶椀(38)が出土した。

ＳＤ７（第９図）　Ａ地区の西部分を南北に走り、北部分で西方に直曲する大溝である。南北部分の主軸は約18°東偏している。旧飯野郡における条里制は、南北線がＮ15°東偏している[13]ことが知られている。したがって、ＳＤ７もこの条理制に沿ったものと考えられる。

南端部分の幅1.5～1.8m、深さ0.7m、東西部分の幅2.1m、深さ1.0mである。ただし、屈曲部分ではやや東に膨れ、深さも1.1mある。南から北に向かって流れていたと考えられる。底部中央部はＵ字状に窪み、両側がテラス状となる。底部中央部は、鉄分が沈着して固く締まった状態にある。東西部分の底部には、暗灰褐色粘土が堆積し、ドブ臭い匂いがした。検出面付近から深さ0.5m前後のところにかけて30～50cmの石が多量に出た。また屈曲部分の内側には、溝に並行する形で同じ大きさの石が存在した。いずれも崩落が著しいが、両側に石組みがなされていた可能性がある。南端部分の中央部では、底部に鉄分が沈着した柱穴がみつかった。

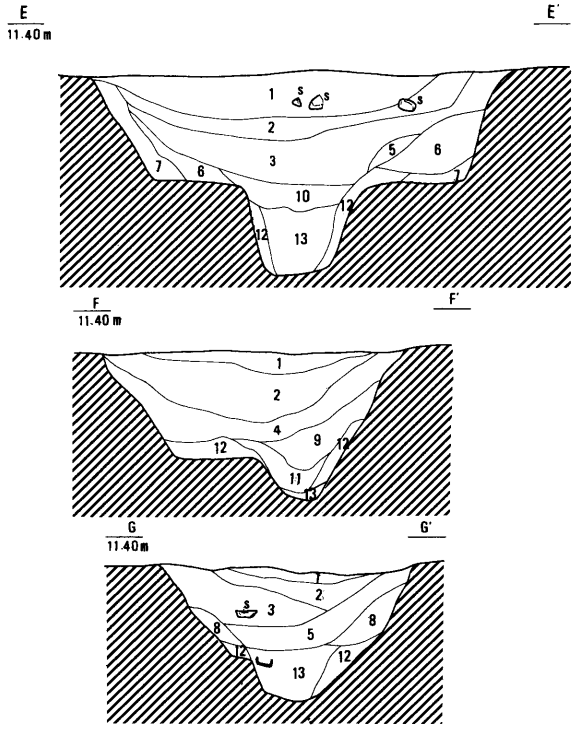
遺物は、室町時代のものを中心に多種多様にわたる。土師器皿は径８cm前後、器高１cm前後の小皿（39～45）、径11cm前後・器高２cm前後の土師器皿Ａ（60～69）、径８cm前後・器高２cm前後の土師器皿Ｂ（46～59）が多量に出土した。土師器鍋も小型のもの（71～73）、中型のもの（74～77）、茶釜形（78）、羽釜など多量に出土した。他には、卸

皿(79)、古瀬戸の壷、天目茶椀、青磁片（80・81）、瓦質土器の花瓶（82・83）・火鉢（84・85）、釘などが出土した。ＳＤ７は両壁に石組みを備え、深さ１ｍ前後の規模を持つことから、かなり規模の大きな屋敷等が存在することが推定される。また、その位置は、南北に走るＳＤ７が西側に屈曲することから、ＳＤ７の西側にあったと考えられそうである。

ＳＤ８　Ａ地区中央部を南北に走る幅0.8m、深さ0.27mの小溝である。ＳＤ６と同様な暗褐色粘質土の埋土である。鎌倉時代頃の平瓦、常滑窯産の大甕の口縁部などが出土した。

ＳＤ９　Ａ地区中央部を南北に走る幅0.6m、深さ0.3mの小溝である。南端部はＳＫ13を切る。暗褐色粘質土の埋土である。ＳＫ13からの流れ込みと考えられる須恵器片と中世の土師器片が含まれる。

ＳＤ16　Ａ地区中央部を南北に走り、ＳＤ18を切っている。幅0.4m、深さ0.25mの小溝で、淡灰色粘質土の埋土である。当初は方向から、北にあるＳＤ

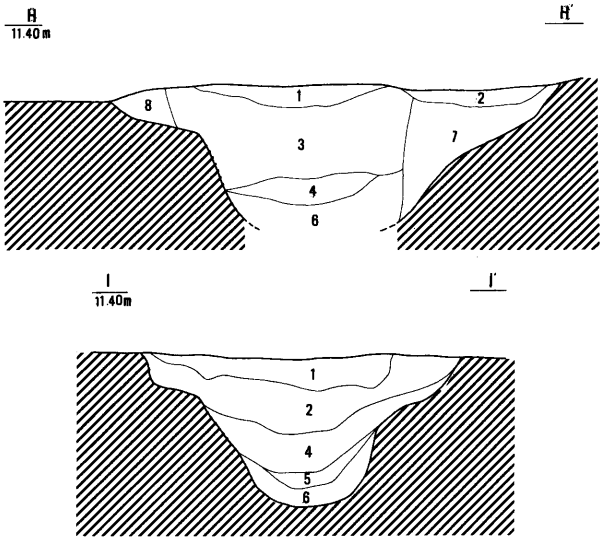


Ｅ－Ｅ′
1　明褐色粘質土
2　淡灰褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
5　灰褐色砂質土
6　黄褐色粘質土
7　暗黄褐色砂質土
10　灰褐色粘質土（炭粒・土器片を少し含む、３に似る）
12　淡黄褐色粘質土
13　暗灰褐色粘土

Ｆ－Ｆ′
4　淡黄灰色粘質土（炭粒を少量含む）
9　淡黄灰色粘質土（多量の炭粒と少量の土器片を含む、２に似る）
11　黄灰色粘質土

Ｇ－Ｇ′
8　暗灰褐色粘質土

第９図　ＳＤ７土層断面図（1:40）

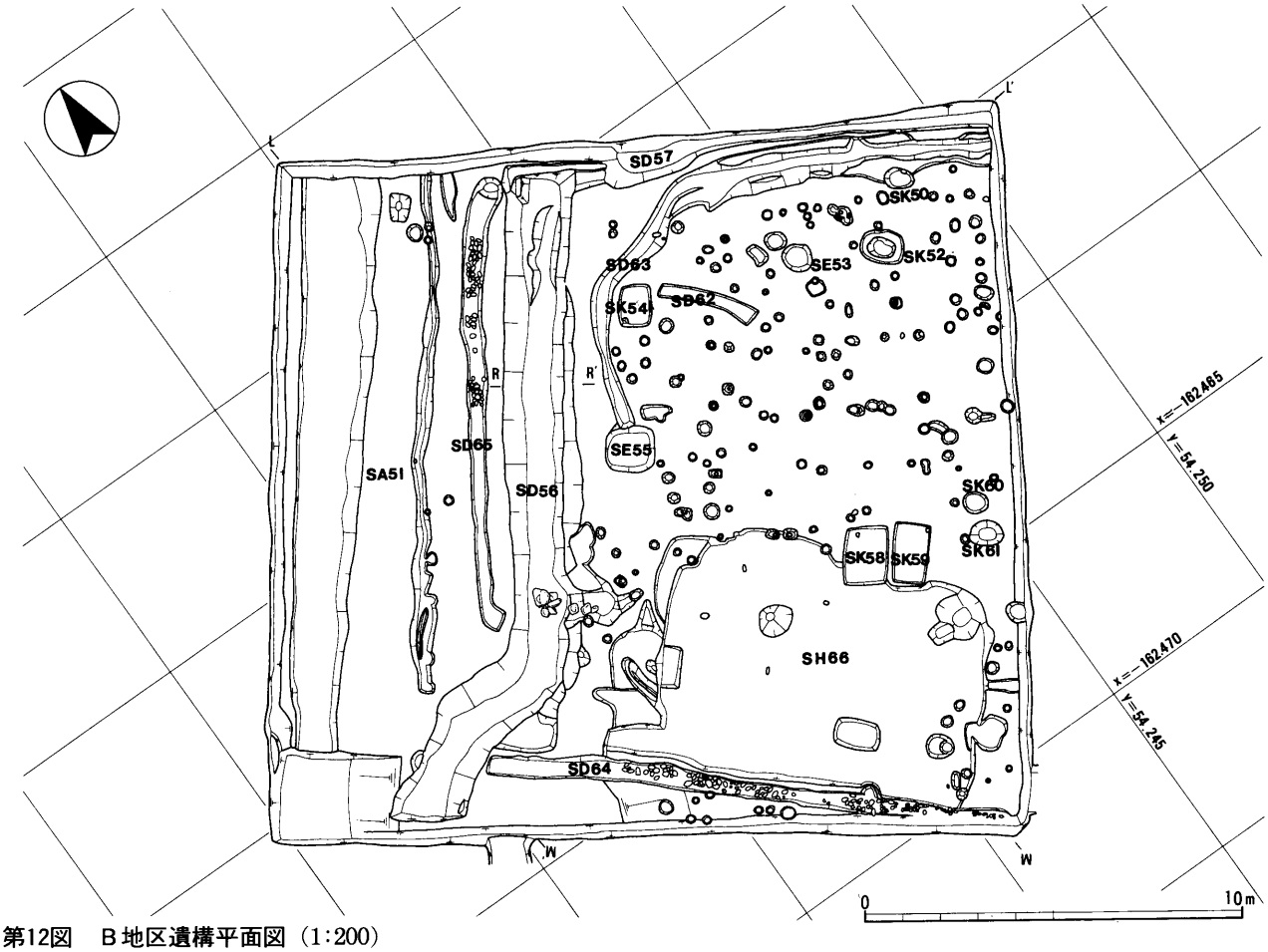


Ｈ－Ｈ′
1　淡褐色粘質土（土器を含む）
2　明褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　褐色粘質土（炭粒・土器片含む）
6　暗黄褐色粘質土
7　褐色粘質土（灰色粘土が混じる）
8　明黄褐色粘質土

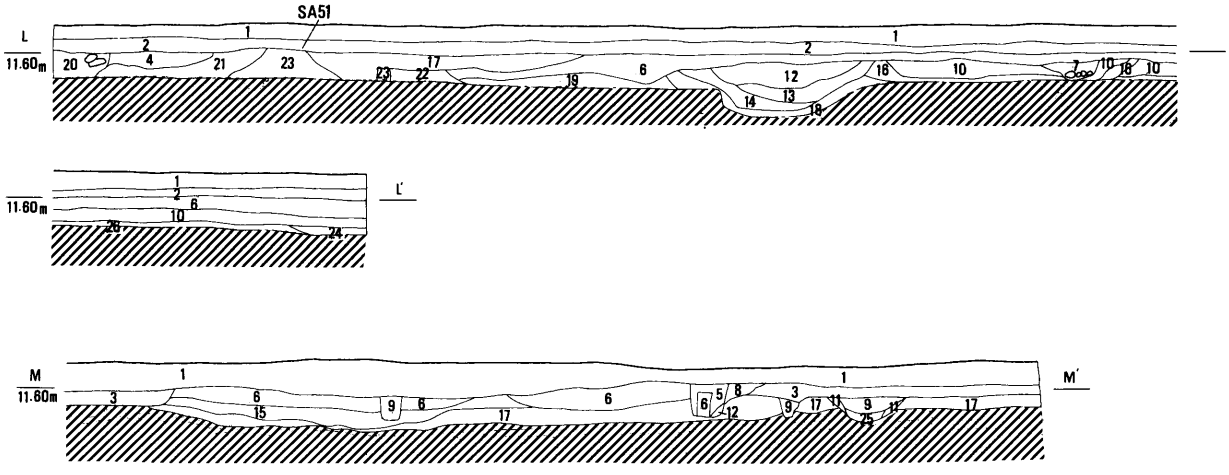
Ｉ－Ｉ′
5　淡灰褐色粘質土

第10図　ＳＤ18土層断面図（1:40）

第11図　ＳＤ18遺物出土状況図（1:20）



第12図　B地区遺構平面図（1:200）



1　耕作土
2　暗灰褐色土
3　暗灰褐色土（褐色粘質土がブロック状に混ざる、2に似る）
4　明灰色粘質土
5　黄褐色土（明灰色粘質土が混じる）
6　暗褐色土（土器片を多く含む）
7　暗灰褐色土（土器片・炭多く混じる）
8　褐色粘質土（灰褐色土混じる）
9　暗褐色粘質土（土器片を含む）
10　暗褐色土（土器片・炭混ざる）
11　明黄褐色粘質土
12　明黄褐色粘質土（やや砂混じる）
13　暗黄褐色土（炭含む）
14　灰褐色砂質土
15　褐色粘質土
16　褐色土（土器片・炭含む）
17　黄褐色粘質土
18　暗灰褐色砂質土
19　暗褐色土
20　暗灰色粘質土（田の耕作土）
21　淡灰色粘質土
22　黄褐色土
23　明赤褐色粘質土（SA51の盛土）
24　黄灰色粘質土
25　明灰褐色粘質土（土器細片を含む）
26　暗黄褐色粘質土

第13図　B地区土層断面図（北壁・南壁）（1:100）

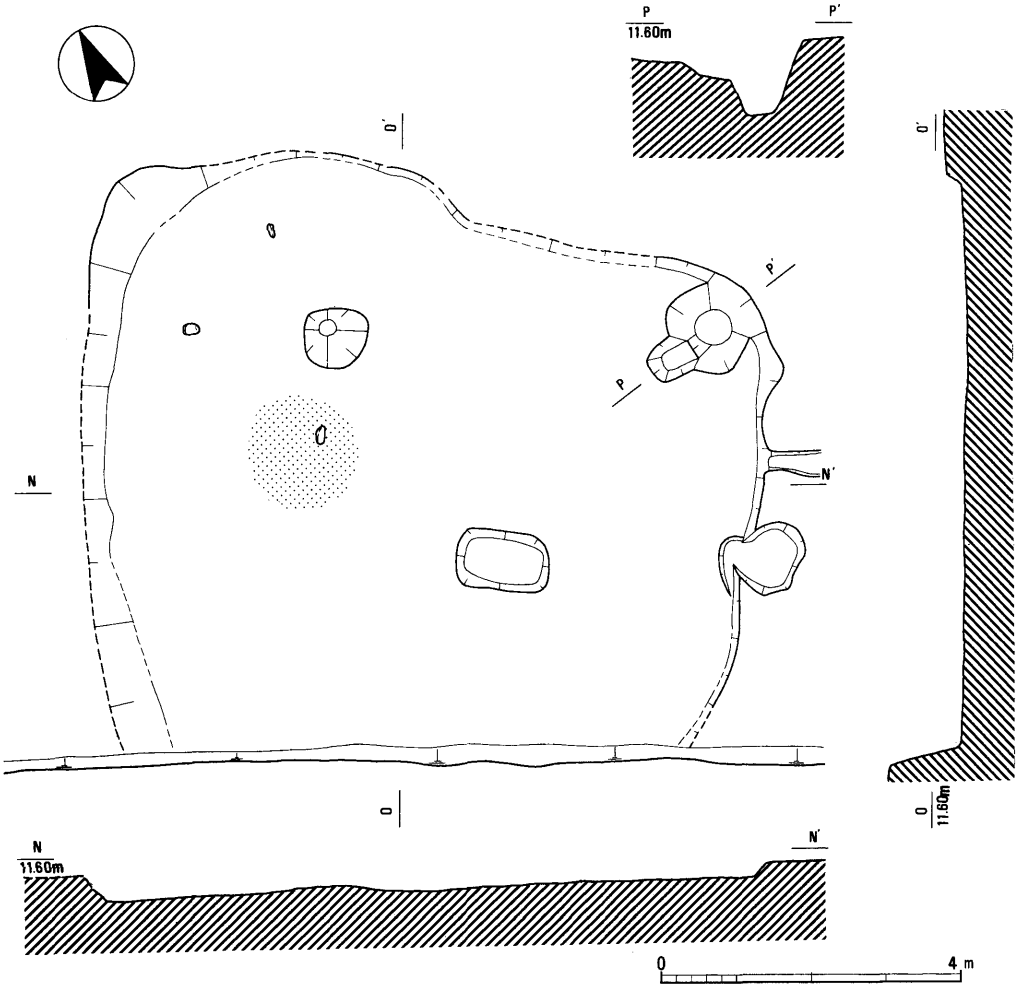
９とつながるものと考えていたが、埋土の違い、北端部の不明瞭さを考え合わせると、ＳＤ９との連続性はなさそうである。遺物は、磨滅の進んだ須恵器片や奈良・平安時代の土師器片とともに、蓮弁紋がある青磁椀片が出土した。

ＳＤ18（第10・11図） Ａ地区中央部北端から、南端中央部にかけてクランク状に屈曲する。幅1.2m～2.0m、深さは南端部分で0.6m、中央部分で0.6m、北端部分で大きく膨らみ、深さも増す。断面は、上部が緩やかに開いたＵ字状である。ＳＤ７の遺物と比較すると、ＳＤ18は鎌倉時代頃のものが多く、ＳＤ７よりも古いと考えられる。北端部分近くでは握りこぶし大の石が約1.0m×2.0mの範囲にあり、その下からは土師器皿・鍋（87～95）が多数出土した（第11図）。それ以外の部分からの遺物は小片に限られ、極めて少ないが、中央部では渥美窯産の山茶椀（96）が完形で出土した。

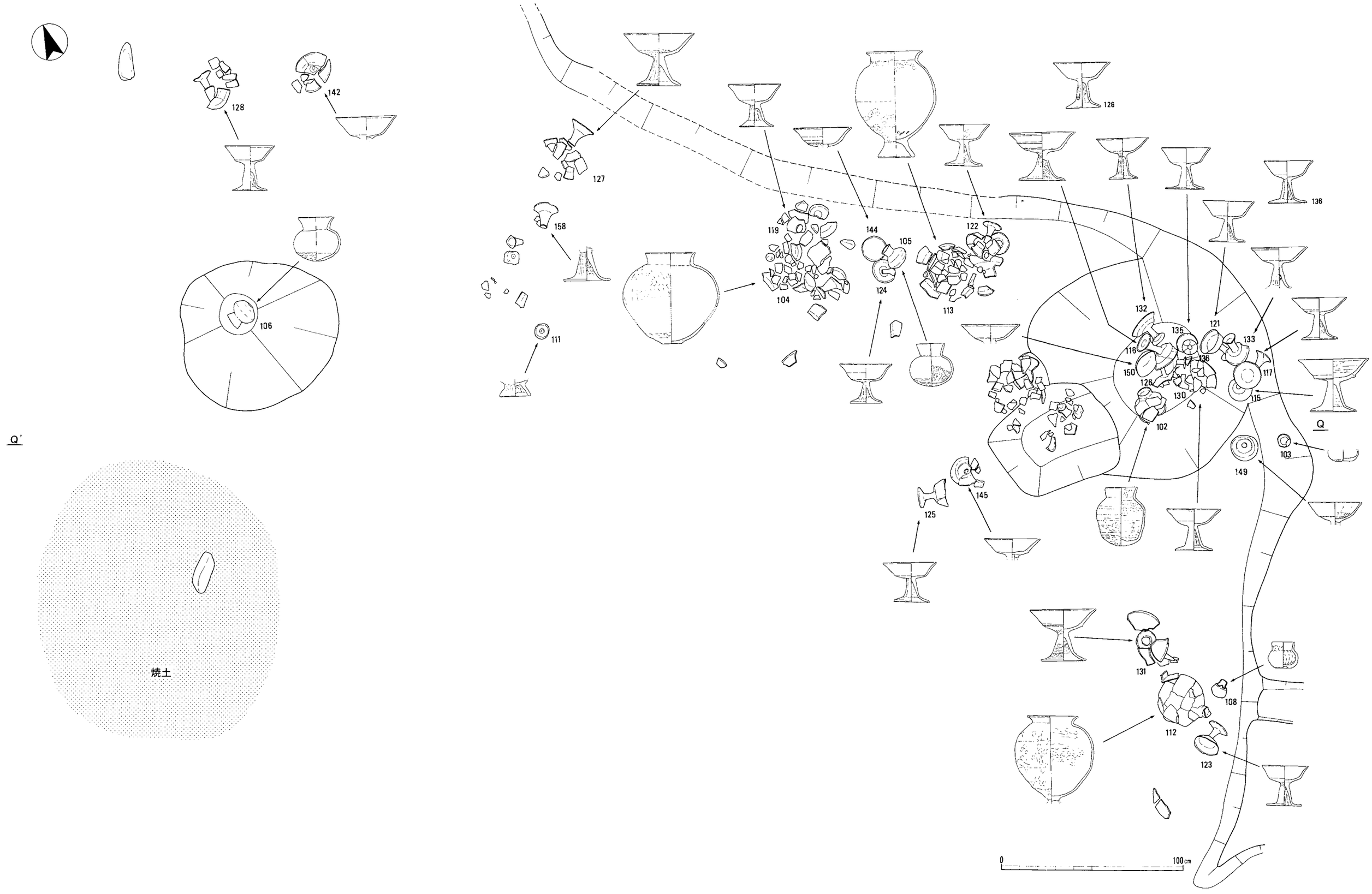
３．Ｂ地区

(1) 層位

Ａ地区同様、シルト系の安定した土壌であり、礫等はほとんど見られない。当地区の基本的な層序は、上より第１層：耕作土、第２層：暗灰褐色土、第３層：黄褐色粘質土、第４層：黄褐色砂質土となっている。第３層からの土質の変化は漸次的となっている。第３層を検出面とした。調査区西端は田の耕作土となっており、上面は大きく削平を受けている。Ｂ地区からは、古墳時代、中世の遺構を確認したが、検出面はほぼ同じである。中世の遺構の埋土は、暗褐色土である。古墳時代の遺構の埋土は、褐色系粘



第14図　ＳＨ66遺構実測図（1:100）



第15図　ＳＨ66遺物出土状況図（1:20）

質土である。

(2) 遺構

(a) 古墳時代の遺構

竪穴住居１棟を検出した。

（ア）竪穴住居

ＳＨ66（第14～16図）　Ｂ地区南東部分で検出した。遺構埋土は、地山と良く似た暗黄褐色粘質土である。当初は、方形土坑として掘削していたが、事後の検討の結果、竪穴住居と判断した。

南端部分が調査区外、西部分は伐根による攪乱、東部分は室町時代のＳＫ58、ＳＫ59等に切られているため、正確な規模はわからないが、一辺8.5m前後の方形の竪穴住居と想定できる。遺構検出面から約0.3mで床面に達する。主柱穴は確認できなかったが、丸底壷(106)が横向きの状態で検出した窪みを、主柱穴のひとつと考えると、柱間は４m前後と考えられる。

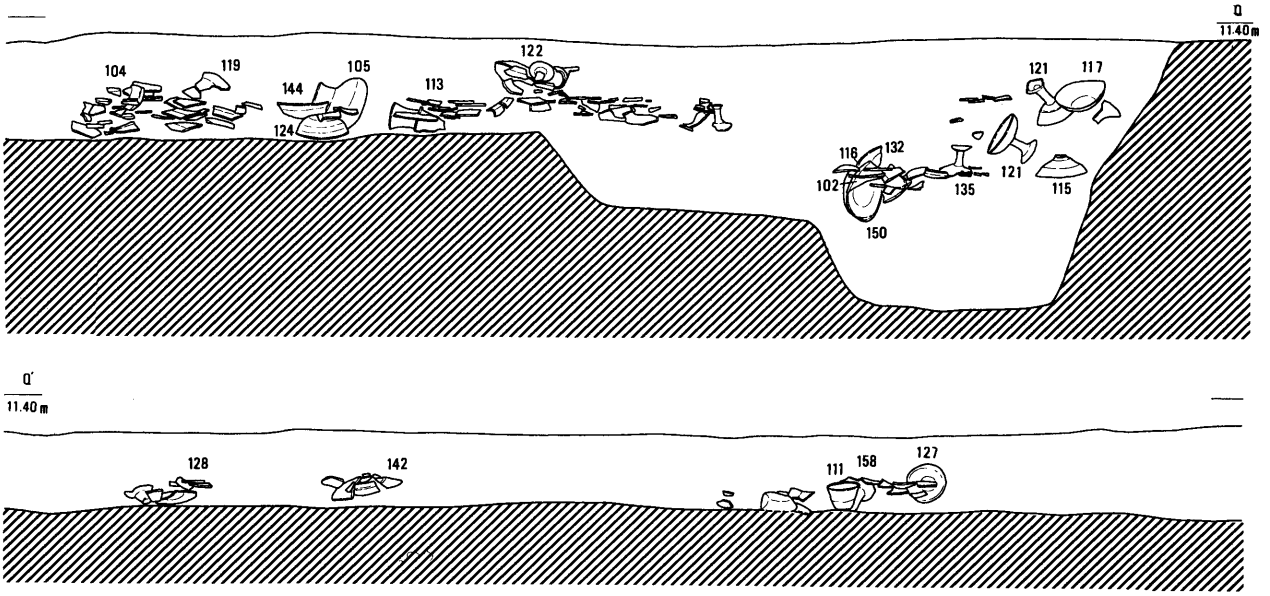
同時期の竪穴住居の規模としては、極めて大型の部類に属すると言える。

中央部西寄りに、炉と想定される場所がある。径1.3m程の範囲に焼土が確認できた。焼土層は１cmほどである。また、炉石と考えられる長さ30cm程の細長い石が焼土上にあった。

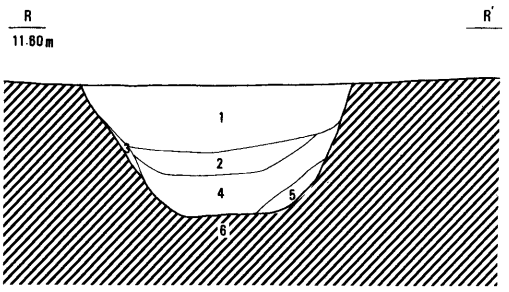
北東隅には、貯蔵穴と思われる土坑がある。径1.2m、床面からの深さ0.7mで，建物中央に向かって、幅0.5mのゆるやかな落ち込みが張り出す。

中心部からやや外れたところに、1.2m×0.8m、深さ0.2mの方形土坑がある。遺物は、若干の土師器片だけである。

北東隅を中心に東壁際・北壁際には、土師器の壷(102～104)、丸底壷(105・106)、小型平底壷(107～110)、台付甕(111～114)、高杯(115～161)がいずれも良好な形で検出された(第15・16図)。精製のものが多数出土している。南壁面は、調査区外のため検出



第16図　ＳＨ66遺物出土状況図（1:20）



1　淡灰褐色粘質土（土器を含む）
2　淡灰色粘質土（土器を含む）
3　明灰褐色粘質土
4　明灰褐色粘質土（褐色文混じる）
5　灰色粘質土
6　淡灰色砂質土

第17図　ＳＤ56土層断面実測図（1:40）

できなかったが、南壁付近になると遺物が増加する傾向がある。出土遺物において注目されるのは、高杯の個体数が極めて多いことである。ＳＨ66全体で50点を上回る。西壁際にも高杯が集中するが、東壁・北壁付近で出土したものと比べると残存度は芳しくなく、つくりも粗製なものが目立つ。西壁付近出土の高杯は、杯底部より内湾して立ち上がる口縁のものが多く、東壁・北壁のものよりも時期的には新しくなる。ＳＨ66の埋土全体から遺物は採集されたが、壁付近以外は破片がほとんどである。なお、須恵器は埋土上層から甕の破片が数点出土しただけである。

(b) 中世の遺構

土塁、大溝の他に、井戸２基、土坑７基、溝５条、多数のピットが検出された。いずれも室町時代の遺構と考えられる。根石をもつピットもいくつか検出されたが、間隔が３ｍもあり、掘建柱建物の確認までは至らなかったが、Ｂ地区の東方に建物群があったと考えられる。

（ア）土塁

ＳＡ51　調査区の西側をほぼ南北に走る。上部が削平されているため、高さは不明であるが、遺構検出面から約0.5m残存している（第13図）。幅は約２ｍである。調査区南付近で、土塁構築土はほとんどなくなり、南壁にはその痕跡は認められない。南端付近で土塁が切れていることからすると、この部分が入口であった可能性が考えられる。明赤褐色粘質土の単層で築造されている。土塁の東側には幅0.4mの溝が付帯する。

北壁付近からは、弥生時代から室町時代にかけての多量の土器が一括投棄された箇所がある。土器の種類は多様に及び、残存度も良好なものが多数含まれる。土塁築造時に付近で採集されたものが何らかの理由で埋め込まれたと考えられる。

ＳＡ51の主軸は、約30°東偏する。建物との位置関係は、ピットが東側に多数分布することから、ＳＡ51は屋敷の西側に築造されたと考えられる。土塁の東側には大溝のＳＤ56がＳＡ51とほぼ並行に走るが、その関係については、ＳＤ56の項で述べる。

（イ）井戸

井戸が２基検出されたが、連日の雨で地盤が緩くなっており、崩落の危険性が高いので、いずれも完掘していない。

ＳＥ53　Ｂ地区北東部分で検出した素掘りの井戸である。径0.7mの小型の井戸である。深さ1.2mまで掘り下げた。砂質土系の埋土である。遺物は、あまり多くはないが、中世の土師器皿片に混じって、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、鉄釘、炭が出土した。

ＳＥ55　Ｂ地区中央付近で検出した素掘りの井戸である。平面形は、一辺1.2mの方形である。井桁もほぼ同規模であったと考えられる。深さ1.5mまで掘り下げた時点で大雨が続き、これ以上の掘削は危険と判断し、掘削を中止した。埋土は、細かな炭粒を含む砂質土である。出土遺物は、土師器皿片のみである。ＳＥ55の北側から伸び、東向きに緩やかに曲がるＳＤ63は、ＳＥ55の付帯施設と考えられる。

（ウ）土坑

ＳＫ50　Ｂ地区北東隅で検出した径0.8m、深さ0.2mの円形の土坑である。常滑窯産の甕片が出土している。北側に、拳大の石があった。

ＳＫ52　Ｂ地区北東部分で検出した0.9m×1.1mの方形の土坑である。テラス状になっており、中央部が0.6m×0.7m、深さ0.16m、テラス分の深さが0.10mである。中世の土師器皿片に混じって、砥石(173)、平安時代頃と思われる土師器壷や緑釉陶器細片が出土した。

ＳＫ54　Ｂ地区北部分で検出した1.2m×1.1m、深さ0.14mの方形の土坑である。土師器片を若干含む程度である。

ＳＫ58　Ｂ地区東部分で検出した1.2m×1.5m、深さ0.4mの方形の土坑である。遺構埋土は、炭が混じった黄褐色粘質土、暗褐色土と続き、最下層が青灰粘質土である。ＳＫ59と並ぶようにあるが、遺物は土師器皿片が少々出土した程度である。

ＳＫ59　ＳＫ58の東側に接するように位置する。1.0m×1.7m、深さ0.4mの方形の土坑である。遺構埋土は、灰色粘質土、黄褐色粘質土、黄褐砂質土、暗黄褐色粘質土の順である。第３層の黄褐砂質土は、多量の遺物を含む。南東隅には、完存の土師器皿(188)が多数出土した。土師器小皿は器高１cm未満と２cm前後のものが中心である。他には、土師器

鍋、青磁片、常滑窯産の甕が出土しているが、小片ばかりである。

ＳＫ60　Ｂ地区東端で検出した径0.6m、深さ0.47mの円形の土坑である。土師器皿片が含まれる。

ＳＫ61　Ｂ地区東端で検出した0.8m×0.7m、深さ0.4mの円形の土坑である。中世の土師器皿片に混じって、磨滅した高杯や奈良・平安時代頃の土師器片が出土した。

（エ）溝

境界溝と思われる大溝１条、石が敷かれた暗渠２条のほか、２条の溝が検出された。

ＳＤ56（第17図）　Ｂ地区の西側を東西に走る大溝である。調査区の南端付近で南西の方向に屈曲する。幅２m、深さ0.8mの大きな溝である。Ａ地区のＳＤ７の主軸が22°東偏しているのに対し、ＳＤ56の主軸は32°東偏している。ＳＤ７同様、屋敷の境界を示していたと思われる。ただし、ＳＤ７で認められた両壁の石組みの痕跡は認められなかった。南部分でＳＤ56が屈曲する手前の中央部に、大きな石が３段ほど組まれている。東壁上部が切られており、石が数個並べられている。溝中央部に丁寧に積まれた石組みは、東側からの落水を弱める機能を持たせたものではないかと思われる。

遺構埋土は、上から淡灰褐色粘質土、淡灰色粘質土、明灰褐色粘質土となり、それぞれ遺物を含む。溝の底部分には、鉄分が固く沈着していた。

出土遺物は、多彩に及ぶ。出土遺物のなかで多数を占めるのが、土師器皿(174～177)と鍋(178)である。山茶椀(181・182)、天目茶椀(184)、陶器平椀(179)、陶器直縁大皿(180)、陶器壷(183)、風炉(185)、青磁器、灰釉陶器、常滑窯産の大甕、土錘等が出土している。鉄釘類に混じって、和鏡(187)が出土していることは遺構の性格を考えるうえで注目される。

ピットの分布状況から考えると、屋敷はＳＤ56の東側にあると言える。また、ＳＡ51との関係であるが、ＳＤ56の外側にＳＡ51があるとは考えにくく、両者は別個に存在したと思われる。ＳＡ51に直交する位置関係の石組暗渠ＳＤ64は、ＳＤ56を切っていることから、これら石組暗渠はＳＤ56の廃絶後敷設されたと考えられる。石組暗渠ＳＤ64、ＳＤ65は、ＳＡ51とは、それぞれ平行、直交する位置関係にあり、ＳＡ51と共伴していると考えられる。したがって、ＳＡ51よりもＳＤ56は古いと考えられる。

ＳＤ57　Ｂ地区北端から検出された東西方向の溝である。調査区北端のため、規模は不明である。また、ＳＤ56との関係は、接点部分が植木の伐根による撹乱のため、不明である。遺物は土師器皿(188)や瓦質の風炉が出土している。

ＳＤ62　Ｂ地区北部分で検出した幅0.4m、深さ0.05mの浅い溝である。磨滅の激しい土師器片を少量含む。

ＳＤ63　ＳＥ55の北端からゆるやかなカーブをえがいてＳＤ57に平行するように走る。幅は0.3m～0.7mである。淡褐色粘質土の埋土である。土師器皿片を含む。

ＳＥ55に付帯する排水路の性格をもっていたかもしれない。ＳＤ56の方向には、流れていないので、ＳＥ55・ＳＤ63の存在時期には、ＳＤ56は埋没していたとも考えられる。

ＳＤ64　調査区南端部分に東西方向に走る幅0.5m、深さ0.20mの石込めの暗渠排水溝である。握り拳大の石が２・３層にわたって敷きつめられている。ＳＤ64を切っていることから、ＳＤ56の廃絶後につくられたと考えられる。もうひとつの石込めの暗渠排水溝ＳＤ65と直交する。多くの遺物が石に混入されている。遺物の時代は、古墳時代から室町時代まで広範に及ぶ。須恵器杯身、須恵器甕(162)、緑釉陶器(170)、灰釉陶器、軒平瓦(171)、平瓦(172)、山茶椀(190)、土錘（191)などが出土した。いずれも、石の代用として、溝の築造時に使用されたと考えられる。

ＳＤ65　Ｂ地区の西部分を南北に走る石込めの暗渠排水溝で、ＳＡ51とほぼ平行で、ＳＤ64とは直交する位置関係にある。幅0.5m、深さ0.15m前後で、ＳＡ56と接するあたりで消滅する。ＳＤ64同様握り拳大の石が２・３層、敷き詰められている。須恵器、山茶椀、陶器壷などが混在している。

4．C地区

(1) 層序

旧河道近くの調査区であり、東端は旧河道の礫層となる。西端は、開墾による削平を受けている。C地区の基本的な層序は、第1層：耕作土、第2層：黄褐色土、第3層：黄灰褐色粘質土となっている。第3層が中世の遺構検出面である。第3層の下は暗褐色粗砂層となり、下層として縄文時代の遺物包含層がある。ただし、工事区域の変更が調査着手後にあり、調査区全体の下層調査は実施していない。

(2) 遺構

(a) 中世の遺構

多数の土坑やピットが検出されたが、幅2mという調査区の制約や近世以後の撹乱も激しく調査区の性格については不明瞭な部分もある。しかし、表土除去前に、畑の畦に石塔（五輪塔）の一部分が放置されていた点からすると、周辺には中世墓がひろがっていたことが予測された。

（ア）土坑

ＳＫ73　C地区の西端付近で検出された土坑で、東西1.5m、深さ0.55mであるが、さらに南壁側に続く。上面には、握り拳大の石が散らばり、その下には多量の土器が出土した。主な遺物としては、土師器皿(196～200)・鍋(201・202)、陶器壷(203)、山茶椀、瓦質土器片口鉢(204)、刀(205)等が出土した。また、磨き痕が認められる球形の石も出土した。中世墓であった可能性がある。

ＳＫ74　C地区西端で検出された東西2m、深さ0.18mの土坑で、土師器皿片が混じる。

ＳＫ75　C地区中央部西寄りで検出された不定形の土坑で、幅2m程ある。深さ0.13mと浅いが、多量の遺物を検出した。とくに土師器皿(206～209)・鍋(210・211)が多い。土師器鍋は、南伊勢系の小型のものが主である。ＳＫ73の遺物と同時期のものである。

ＳＫ76　C地区中央部で検出された東西1.5mの土坑で、直径0.3m前後のピットが3つ並ぶ。2～5cm大の鉄滓が多量に出土した。

ＳＫ77　C地区中央部で検出した0.3m×0.2m、深さ0.16mの土坑である。遺物としては、土錘(212)、山茶椀の小片、茶釜型の土師器鍋片が出土した。

ＳＫ78　C地区中央部北壁付近で検出した石込めの土坑である。北部分が調査区外のため、規模は不明であるが、東西3.4m、深さ0.8m検出した。上面には、10～20cm大の石が敷かれていた。その下からは、土師器皿・鍋、山茶椀、古瀬戸の壺(213)、天目茶椀、釘(214)などが出土した。集石墓の可能性が高いが、明確な埋納箇所は不明である。

なお、ＳＫ78の下層の暗褐色粗砂層からは縄文時代後期の土器(192・193)、石器フレークが出土している。

ＳＫ80　C地区東部分のＳＫ87に隣接している0.6m×0.6m、深さ0.1mの土坑で小型の土師器羽釜が出土した。

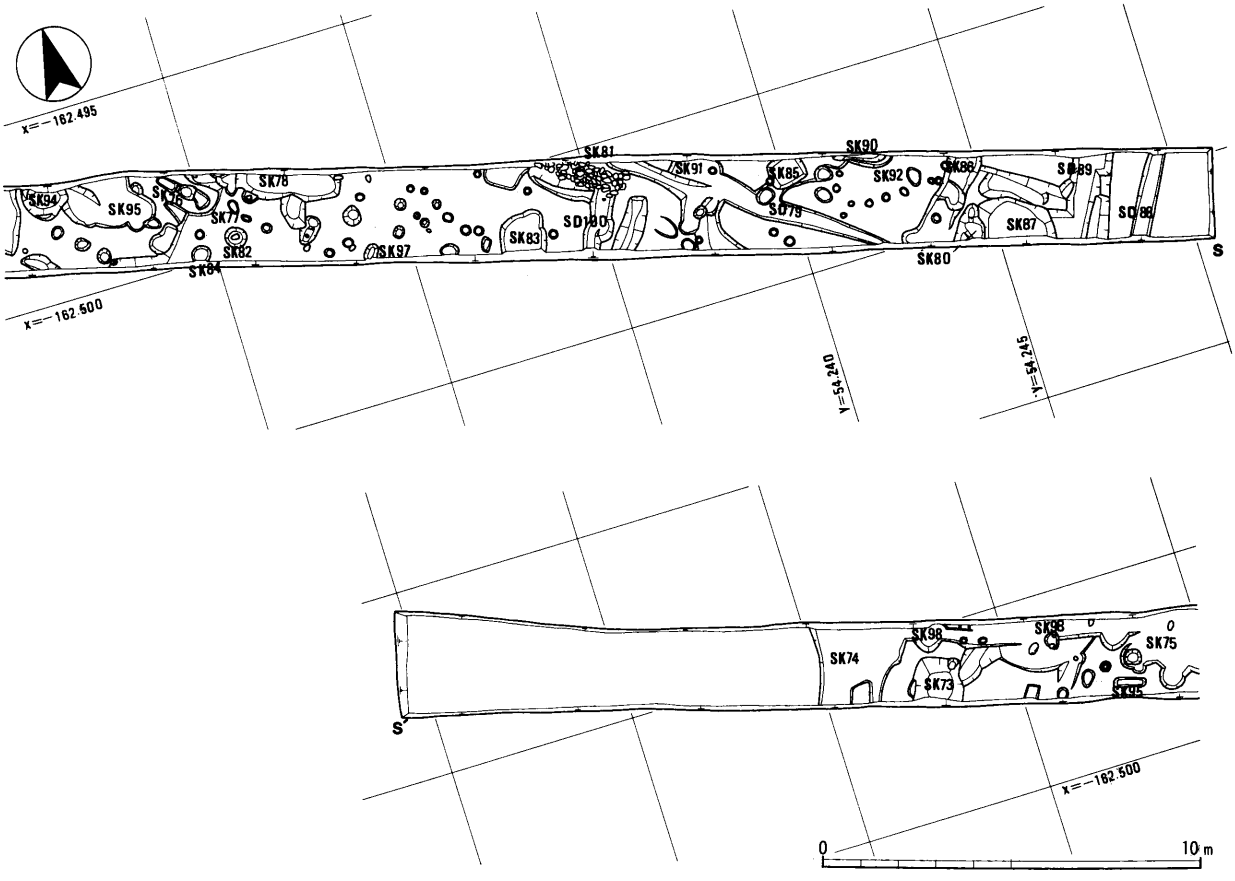
ＳＫ81　C地区中央部で検出した石込めの土坑である。北壁にかかるため、規模は不明であるが、東西で2.5m、深さ0.3m検出した。10～20cmの不揃いの石が、ＳＫ81の上面全体に敷かれている。土師器皿・鍋の小片が多量含まれており、灰釉陶器椀や須恵器の大甕の小片なども混じる。集石墓の可能性も考えられるが、埋納施設は確認できていない。

ＳＫ82　C地区中央部で検出した径0.6m、深さ0.23mの円形の土坑で、底部に20cm大の石がある。径9cm前後の土師器皿が検出された。

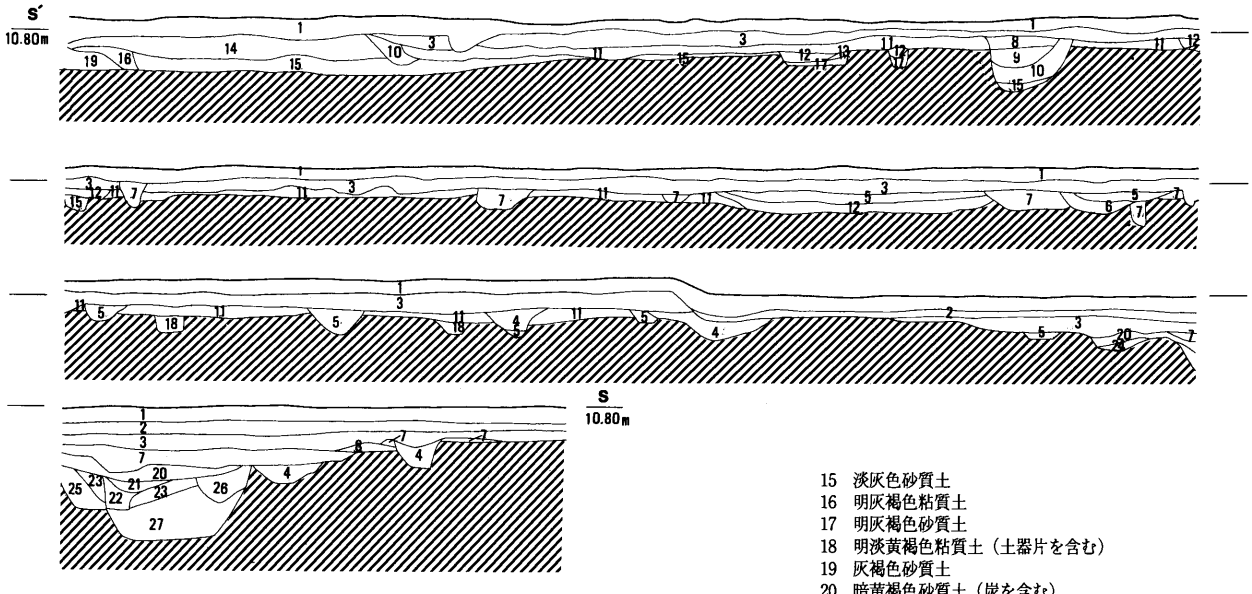
ＳＫ83　C地区中央部東寄りで検出した東西1.2m、深さ0.17mの土坑であるが、南に向かってさらに延びる。土師器皿片に混じって、朱が付着して内面底部がつるつるの山皿を検出した。

ＳＫ85　C地区東部分で検出した一辺0.9m、深さ0.38mの方形の土坑である．土師器小皿(216・217)・鍋(218・219)、青磁器、常滑窯産の大甕、山茶椀などが出土している。

ＳＫ87　C地区東端の南壁付近で検出された土坑で、規模不明であるが、東西2.8m、深さ1.1m検出した。炭・焼土が何層にもわたって堆積しているが、所々掘り返されて新たに投棄されていることが、断面からわかる。埋土には、土師器皿・鍋の小片も混じる



第18図　C地区遺構平面図（1:200）



1　耕作土
2　旧耕作土
3　黄褐色土
4　暗黄褐色粘質土(炭・土器片を含む)
5　灰色粘質土（炭・土器片を含む）
6　3に炭を少量含む
7　灰褐色土（炭を含む）
8　淡黄褐色粘質土(炭・土器片を含む)
9　淡灰色粘質土（炭・土器片を含む）
10　黄褐色粘質土
11　黄灰褐色粘質土
12　黄灰褐色粘質土（炭を含む）
13　黄褐色砂質土
14　淡灰褐色土
15　淡灰色砂質土
16　明灰褐色粘質土
17　明灰褐色砂質土
18　明淡黄褐色粘質土（土器片を含む）
19　灰褐色砂質土
20　暗黄褐色砂質土（炭を含む）
21　20より色が暗い
22　炭と地山小ブロック混じる
23　20より炭が多く、地山ブロック多く混じる
24　20より炭を多く含む
25　23より炭粒が小さい
26　23より炭粒が小さく、地山ブロック多く混じる
27　20に類似するが、色がやや暗い

第19図　C地区南壁土層図（1:100）

が、量は少ない。位置的には旧河道のそばになる。付近一帯を墓域と考えれば、火葬した際の炭・灰を投棄した土坑と考えられる。

ＳＫ90　Ｃ地区東部分の北壁付近で検出した土坑で規模不明であるが、東西1.7m、深さ0.27m検出した。土師器鍋などが出土した。

ＳＫ91　Ｃ地区中央部東寄りで検出した土坑であるが、北壁に接しており規模は不明である。出土遺物は、土師器鍋、常滑窯産の甕、山茶椀などである。また、下層の暗褐粗砂からは、縄文時代後期の土器(195)が出土した。

ＳＫ94　Ｃ地区西部分の北壁に接した検出した径1.3m、深さ0.7mの土坑である。朱皿として使用された痕跡のある陶器山皿(220)、陶器甕(221)に混じって、宋銭「皇宋通寶」(222)、鉄塊などが出土した。中世墓である可能性が高い。

ＳＫ95　Ｃ地区中央部で検出した2.5m×1.4m、深さ0.4mの不定型の土坑である。遺物は土師器皿が少々出土した程度である。

ＳＫ97　Ｃ地区中央部で検出した0.3m×0.5m、深さ0.35mの土坑である。土師器鍋と常滑窯産の甕の小片が含まれていた。

ＳＫ98　Ｃ地区西端で検出した1.0m×0.8m、深さ0.2mの土坑である。土師器皿、陶器山皿(224)、常滑窯産の甕が出土している。

ＳＫ99　Ｃ地区西部分で検出した一辺0.4m、深さ0.12mの土坑で土師器皿・鍋、山茶椀が出土した。

（イ）溝

ＳＤ79　Ｃ地区東部分で、ＳＫ91の延長線上にある幅0.1～0.2m、深さ0.1mの溝で南北方向にある。土師器皿や山茶椀が出土した。

ＳＤ86　Ｃ地区東部分で幅0.7～0.8m、深さ0.17mの溝で南北方向にある。中央部が一段落ち込み、0.44mの深さがある。土師器鍋、小型の天目茶椀、山茶椀、鉄釘が出土した。

ＳＤ88　Ｃ地区東端にある溝で、旧河道の地山に掘られている。0.5m、深さ0.15mの溝で南北方向にある。出土遺物は、土師器小皿のほかに、流れ込みと考えられる古墳時代の高杯、奈良時代頃の甕が出土している。縄文時代後期頃の土器(194)も出土している。

ＳＤ89　Ｃ地区東端で、ＳＤ88に平行した幅１m、深さ0.43mの溝で南北方向にある。西側は、ＳＫ87に接する。土師器鍋・羽釜、青磁、瓦などが出土している。

ＳＤ100　調査区中央部西寄りに、幅0.4m、深さ0.25mの溝で南北方向にある溝である。出土遺物は、土師器鍋が少々出た程度である。

5．Ｄ・Ｅ地区

(1)　層序

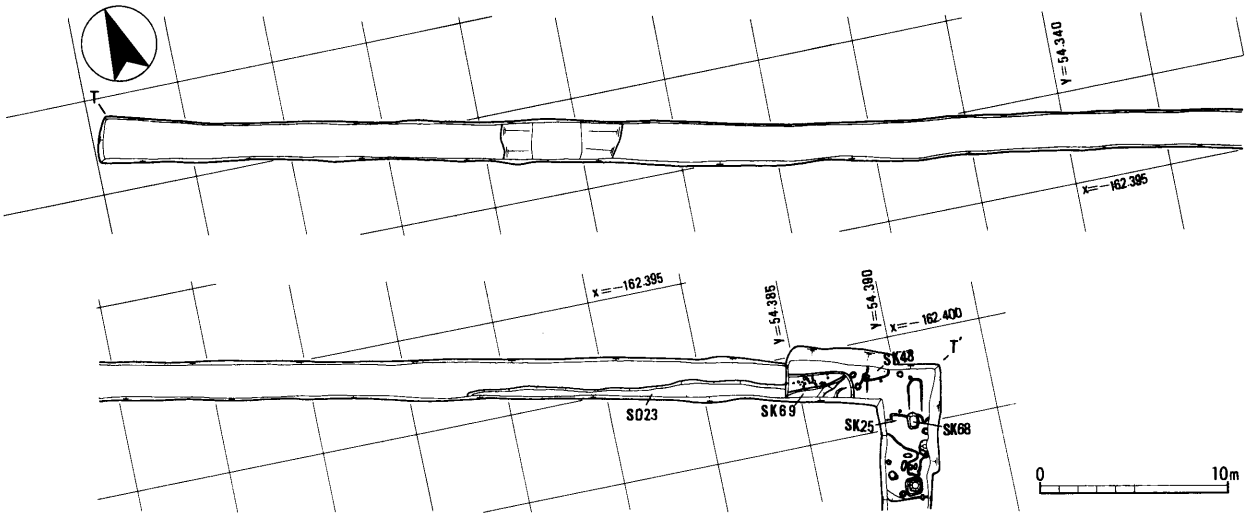
Ｄ地区は中の坊遺跡の中では最も北に位置し、調査区の幅は２mで、東西延長が110m余である。東端で南北に延びるＥ地区につながる。地表から遺構検出面までは、0.7～0.9mあり、表土直下から検出面に至るまで基本的には東端の落ち込み部分を除き、３層から４層にわたって粘質土が厚く堆積している。所々直径５mm以下の炭が見られたが、特に遺構は見られなかったが、東端になるＤ・Ｅコーナー部分はかなり落ち込み、古墳時代の遺構が見られるようになる。

Ｅ地区は、幅2.5m、南北延長84mである。現地表面から検出面まで0.5～0.8mであり、南にわずかに下る。遺構基盤は、淡褐色粘質土であり、表面に鉄分の沈着が広く認められ、かつて流路があったことが推定される。遺構は北部分に集中している。

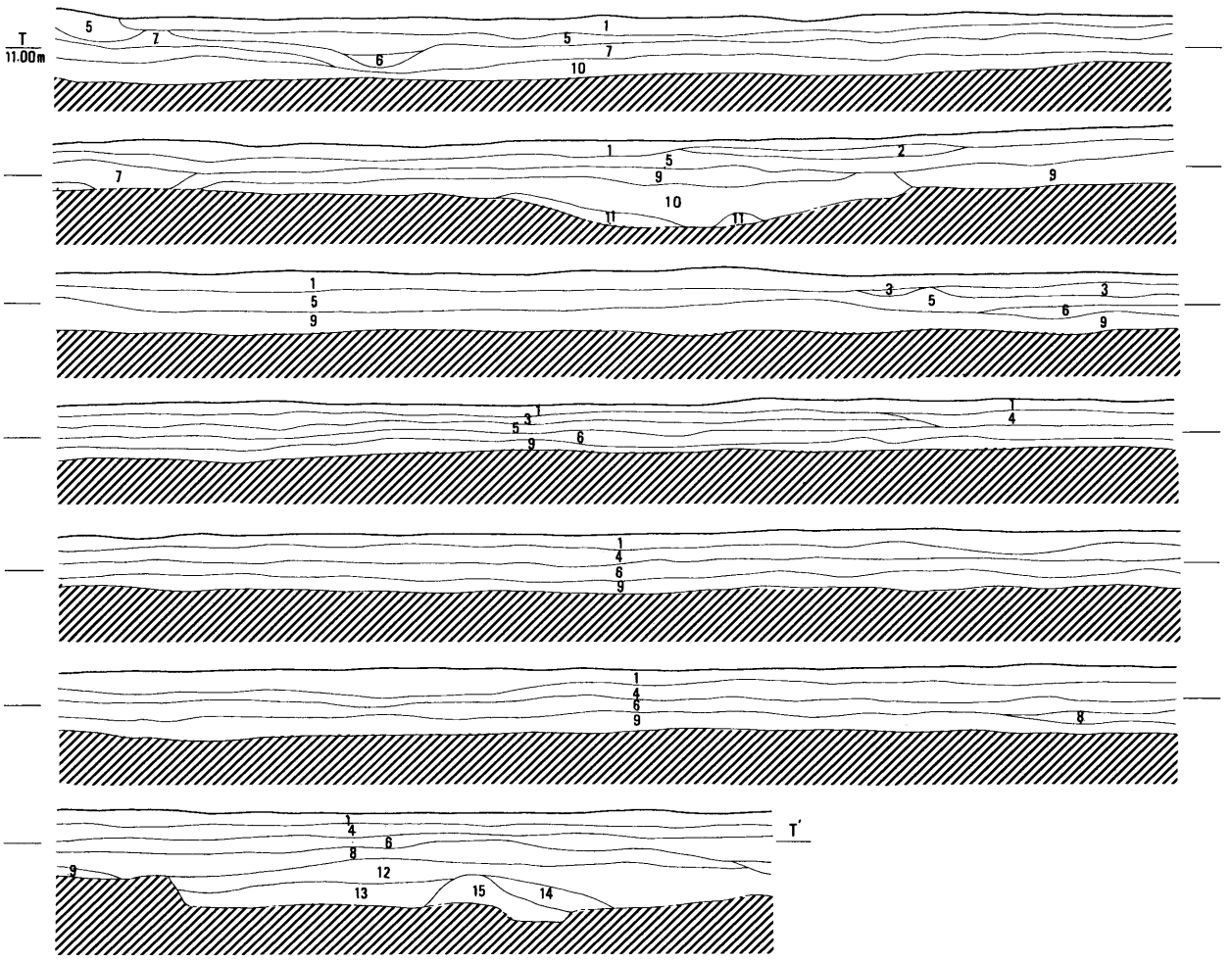
Ｄ・Ｅ地区は、磨滅を受けた遺物が多く、Ｅ地区の東側にあったと推定される旧流路との関連を考慮する必要があろう。

基本層位は、第21・23図に示した通りである。遺構基盤は、淡黄褐色粘質土で安定しており、その上層に堆積する褐色系粘質土を遺物包含層と捉えた。他の調査区と比べて、堆積層中の粘質土の割合が高い。

(2)　遺構



第20図　D地区遺構平面図（1:400）



1　耕作土
2　淡灰褐色粘質土に褐色の鉄分を多く含む
3　灰色粘質土に褐色の鉄分を多く含む
4　灰色粘質土
5　暗灰色粘質土
6　黄褐色粘質土に褐色の鉄分を多く含む
7　明黄褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　淡褐色粘質土
10　淡褐色砂質土
11　黄褐色粘質土
12　褐色粘質土に多量の炭を含む
13　灰色粘質土に褐色の鉄分を少量含む
14　暗褐色粘質土に多量の炭を含む
15　暗灰褐色粘質土と炭・焼土層の互層

第21図　D地区北壁土層図（1:100）

(a) 古墳時代の遺構

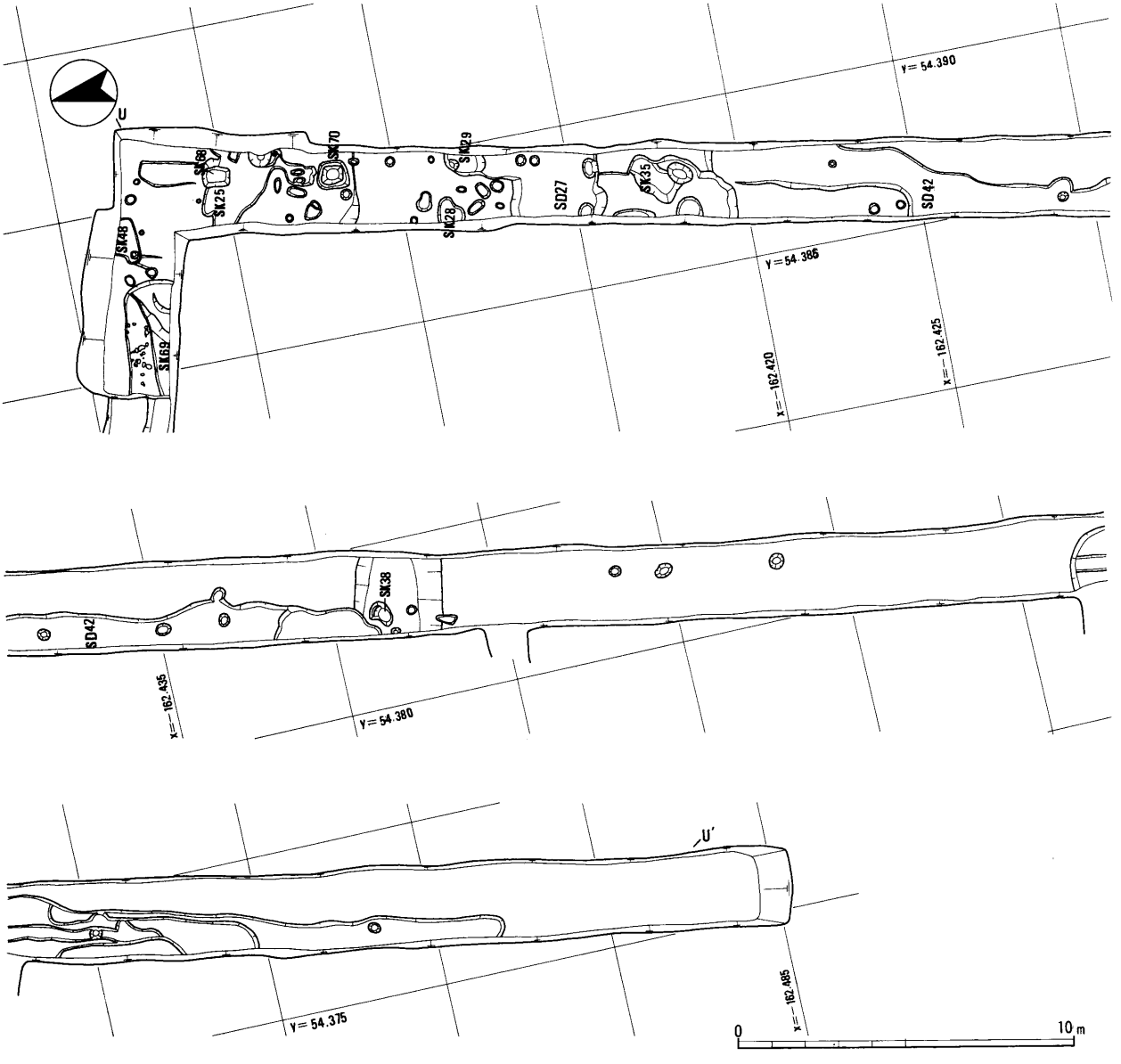
D・E地区のコーナーにあたるこの部分は、大溝の一部分ではないかと推定される落ち込みがあり、現地表面から1.2mのところに古墳時代の遺構が見られる。この落ち込みの周辺の土坑からは、穿孔のある台付甕や高杯が出土した。

（ア）土坑

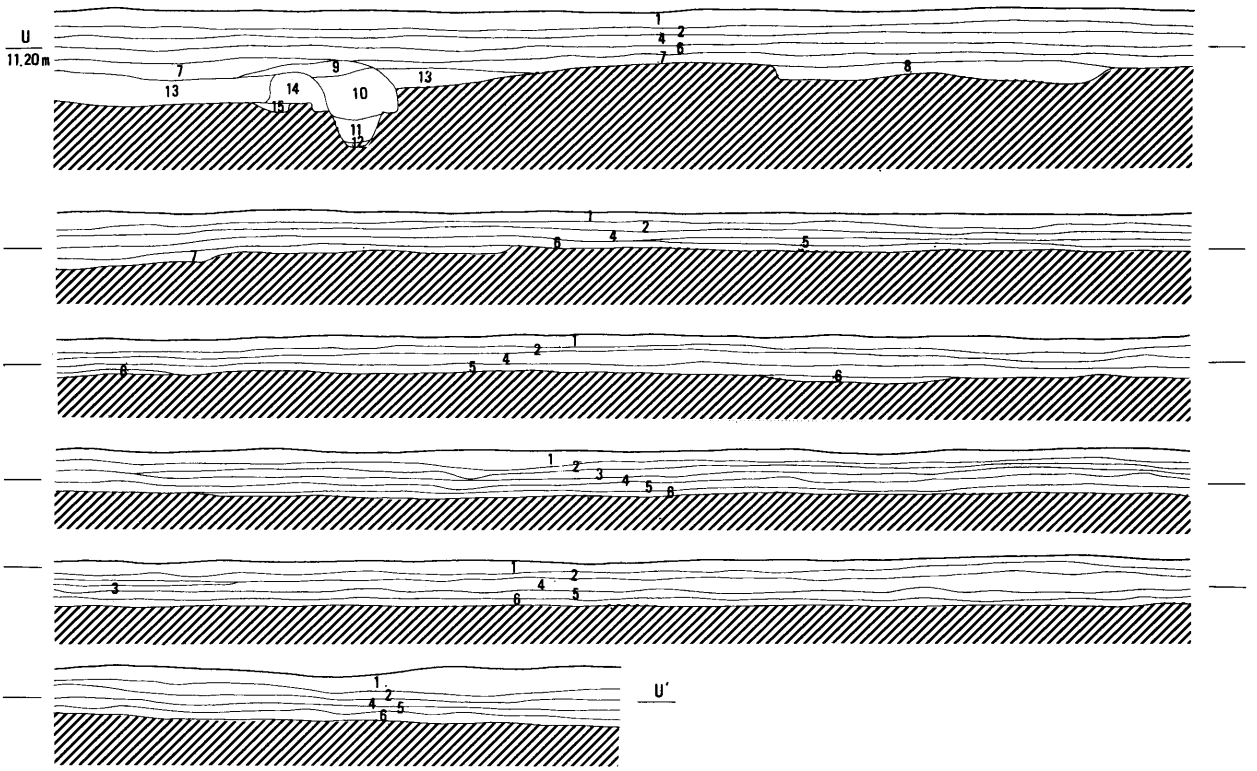
ＳＫ48　D地区東端の北壁際で検出された遺構である。北壁断面では、長さ１m、深さ0.8mの袋状を呈し、埋土からは焼土と炭が何層にも重なり検出された。土師器甕(225)、土師器高杯(226)、韓式系土器甕(227)などが出土している。

ＳＫ68（第24図）　E地区北端で検出した0.7m×0.5m、深さ0.38mの長方形の土坑である。埋土には多量の炭が含まれていた。土坑内からは胴部穿孔のある土師器台付甕(230)が口が北に向けて横になった状態で完形で出土し、西側からは土師器高杯(231)が出土している。これらは意図的に埋納されたのではないかと思われる。ほかに、台付甕の台部が２個体分出土している。

ＳＫ69　D地区東端の北壁際で検出した土坑であるが、北壁が崩落したため規模は不明である。時期的には、ＳＫ68と同様の土師器台付甕の台部が見つかっ

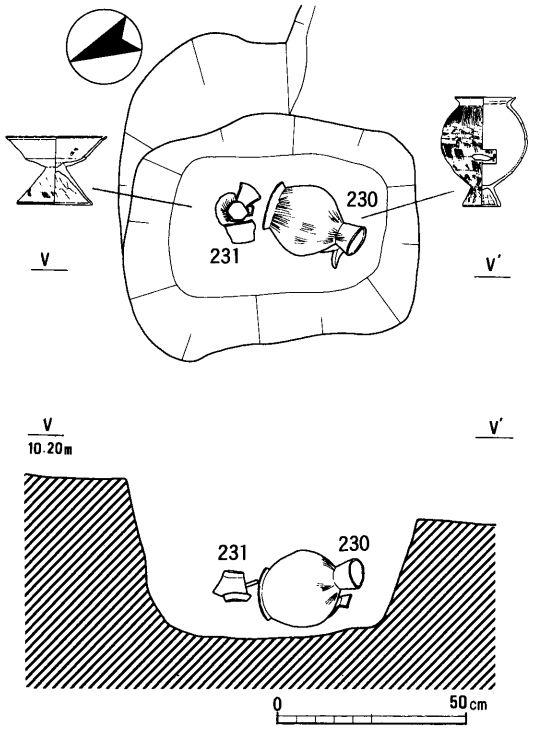


第22図　E地区遺構平面図（1:200）



1 耕作土
2 暗灰色粘質土
3 暗灰色粘質土（褐色の鉄分を少量含む）
4 淡灰褐色土
5 明灰褐色土
6 灰色粘質土（褐色の鉄分多く混じる）
7 暗黄褐色土
8 暗黄褐色粘質土
9 暗灰褐色粘質土（炭を多く含む）
10 暗褐色土
11 黄褐色粘質土
12 灰色粘質土
13 暗褐色粘質土
14 黄褐色土（炭を多く含む）
15 淡黄褐色粘質土

第23図　E地区東壁土層図（1:100）



第24図　SK68遺物出土状況図（1:20）

たことから、SK68と同時期であると考えられる。褐色系粘質土の平坦面に2～12cm大の石が配され、水もみられることから、大溝に伴う泉の可能性が考えられる。小型丸底壷(232)が完存の状態で出土した。

(b)飛鳥・奈良・平安時代の遺構

（ア）土坑

SK28　E地区北部分の西壁で検出された径0.8m、深さ0.2mの土坑である。飛鳥時代の土師器甕の口縁部が出土した。

SK29　東西に延びるSD27の北壁に位置するが、東壁にかかるため、規模は不明である。飛鳥時代頃の土師器椀(235・236)が出土している。

SK35　SD27の南側に位置する長径1.6m、短径0.8m、深さ0.1mの方形の土坑である。焼土を含む赤褐色土の埋土である。飛鳥時代頃の土師器椀が出土している。

ＳＫ38　Ｅ地区の中央部で検出された長径0.8m、短径0.4m、深さ0.2mの不定形の土坑である。平安時代後期の土師器椀が出土した。

ＳＫ70　Ｅ地区北部分で検出された一辺0.9m、深さ0.7mの中段を持つ方形の土坑である。飛鳥時代の甕片が見られる。

（イ）溝

ＳＤ23　Ｄ地区の南壁に沿って、Ｅ地区の東部分まで達する。検出面から、約0.2mの深さで平坦面をなすが、溝は南側にさらに延びると思われる。遺物は飛鳥時代の甕の破片が見られる。他に鞴の羽口や内部が被熱した土の塊が見られる。包含層では鉄滓も見られ、この付近に鋳造遺構の存在が想定される。

ＳＤ27　Ｅ地区の東部分で検出された東西方向に延びる幅2.5m、深さ0.4mの溝である。南肩に焼土層が広がる。暗灰褐色土の埋土である。ロクロ土師器皿(234)、土師器椀(235・236)などが出土している。

ＳＤ42　Ｅ地区中央部を南北に延びる溝で西肩部分は調査区外となる部分が大部分である。深さは、約0.05m程度で、北側にわずかに下っている。鉄分が沈着した層が続く。自然流路の可能性がある。

(c)　鎌倉時代の遺構

山茶椀をはじめとして、鎌倉時代の遺物は、Ｅ地区の包含層から多量に出土しているが、ローリングを受けているものがほとんどである。遺構として確認できたものは、土坑２基である。

ＳＫ25　Ｅ地区北部分にある1.6m×1.4mの土坑で、淡灰色粘質土の埋土である。

ＳＫ29　ＳＤ27の北側に、東壁に接して検出された1.2m×0.7m、深さ0.17mの土坑で、渥美窯産の山茶椀が検出された。

⑬　土器埋納について、　服部芳人　「高寺南遺跡」（『火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡』　三重県埋蔵文化財センター、1996年）

⑭　谷岡武雄「飯野・多気郡の条里制」（『伊勢湾岸地域の古代条里制』1979年、東京堂出版

Ⅳ　調査の成果　～出土遺物～

遺物はコンテナバットで約120箱あり、縄文時代から室町時代まで幅広く及んでいる。Ｄ地区を除けば、各地区とも多量の遺物が出土した。出土遺物のなかで最も多いのが、中世の土師器や陶器類であり、次に古墳時代の土師器が続く。出土遺物も多彩にわたり、須恵器、韓式系土器、灰釉陶器、緑釉陶器、磁器、瓦質土器、土錘、瓦、鉄製品、銅銭、鏡などがある。以下、地区別に時代順に主な出土遺物について略述する。それぞれの詳細については観察表を参照されたい。

１．Ａ地区

(1)　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては、須恵器杯蓋(1)・大甕、土師器台付甕(2・3)・高杯(4～6)・小型丸底壷(7～15)・二重口縁壷(16)が出土している。なかでも、小型丸底壷は良好な残存度でＳＫ15から一括して出土した。

（ア）ＳＫ13出土遺物(1)

須恵器杯蓋(1)　径15cmほどの大きさがあり、口縁端部は、ハの字状に外反する。稜の直下に幅２㎜の沈線がめぐらされる。陶邑編年[15]のⅡ－１と併行するもので、６世紀前半頃のものと思われる。

（イ）ＳＫ15出土遺物(2～15)

土師器Ｓ字状口縁台付甕(2・3)　ＳＫ15から、正立した状態でほぼ重なるように、２個体のＳ字状口縁台付甕が出土した。２は大部分を欠くが、口縁部の残りは良い。口縁部が外反し、外面の横ナデによって生じる稜が上半部に生じている。Ｄ１類[16]に属し、４世紀後半頃のものと考えられる。３は口唇部を欠くが、２と同じくＤ１類に属し、４世紀後半のものと考えられる。

土師器高杯(4～6)　４の口縁部は直線的で口唇部に

小さく面取りがあり、平らな底部をもつ。5の脚は直線的な柱状部と折れ曲がる裾部を持つ。裾先端部は内湾気味である。6は、5よりもやや長い脚部を持つ。4～6とともに、松河戸期頃[17]のものと思われる。

小型丸底壷(7～15)　ＳＫ15から良好な状態で9個の小型丸底壷が出土した。7～12は体径と器高がほぼ同じである。

7～10・12は、口径と体径が近似し、頸部付近に稜を持ち、体部にはヘラケズリ痕を残す。

11は、頸部がややくびれ気味であり、器高も体径に比べて長くなっており、口縁上部に稜がある。

13・14は、口縁部は体部に比べてやや小ぶりとなり、その高さも体高の半分以下になっている。体部にはヘラケズリ痕を残す。

15は、頸部のくびれから7～10・12と同じ部類に属すると思われる。

7～15ともに松河戸II式に相当する4世紀後半のものと思われる。

（ウ）Pit 1 出土遺物(16)　ピット底部に横向きに完存の状態で出土した。一見、瓢風の形体をしている。平底中央部がくぼみ、端部には砂痕がある。精巧品である。口縁部は、直線的に成形した後に、中央部を内側から張り出させて、外側からの横ナデで成形している。4世紀頃のものと考えられる。16は小型の二重口縁壷という極めて珍しいものであると同時に、ピット底部より完存の出土状況であったことを考え合わせると、この土器は供献のために埋納されたのではないかと考えられる。

⑵　奈良・平安時代の遺物

Ａ地区全体で、奈良・平安時代の遺物は多数出土しているが、多くは包含層であり、磨滅したものが多い。土師器椀(20)・長胴甕(19)、緑釉陶器(18)、ロクロ土師器椀などが出土している。

（ア）ＳＫ14出土遺物(19)

土師器長胴甕(19)　直線的な体部から口縁部は大きな角度で広がっており、口縁端部には沈線が巡らされている。ほぼ3cm単位で粘土接合痕が見られる。8世紀頃のものと思われる。

（イ）包含層出土遺物(20)

土師器椀(20)　底部から口縁部まで緩やかに立ち上がる。内面には、削痕や工具痕が残る。同じ器形のものが、中の坊遺跡に隣接した古川遺跡から出土している。6世紀後半から7世紀前半頃のものと思われる。

⑶　中世の遺物

Ａ地区では、土師器皿・鍋が出土している。ＳＫ3からは、完存の土師器皿がまとまって出土した。また、区画溝と考えられるＳＤ7からは、土師器皿・鍋のほかに、陶器壷・鉢・椀、磁器、瓦質土器（火鉢・花瓶）など多種多様な遺物が出土した。なお、土師器小皿については、器高1cm前後で、口縁部ナデ調整のものを土師器小皿Ａ、器高2cm前後で口縁部が内湾気味で横ナデ調整されているものを土師器小皿Ｂと分類した（第8図）。

（ア）ＳＤ1出土遺物（21・22）

土師器皿(21)　伊藤裕偉氏の編年[18][19]（以下、土師器皿・鍋・羽釜の編年は、伊藤氏の編年を引用する）によれば、南伊勢系土師器皿のＢ系統のIIIｂ期にあたる15世紀中葉のものと考えられる。

土師器鍋(22)　上向きで、ほぼ完存の状態でＳＤ1上層部から出土した。小型の土師器鍋であるが、口縁部の特徴から南伊勢系の土師器鍋の第4段階のｂ型式に併行するものと思われる。15世紀後葉のものと思われる。

（イ）ＳＤ3出土遺物（23～36）

土師器小皿(23～27)　南伊勢系のＡ系統にあたる土師器小皿で、口径7～8cm、器高1cm前後のものである。23は、器高も0.6cmしかなく、供膳用の土師器小皿とも考えられる。25～27は、口縁に油煙痕が残る灯明皿である。25は4か所、26は2か所、27は2か所に油煙痕が認められる。15世紀後半のものと思われる。

土師器皿Ｂ(28～33)　ＳＫ3で一括して多量に出土した土師器小皿で，南伊勢系のＢ系統にあたる。口径7～8cm、器高1.7cm前後のものが中心を占める。色調は、土師器小皿に比べて、橙色がかったものが多い。口縁部は横ナデ調整が施され、端部は内湾している。

砥石(36)　凝灰石製である。表面以外に側面・端部

も利用されている。

（ウ）ＳＤ６出土遺物（37・38）

土師器鍋(37)　口径19cmの小型の南伊勢系の土師器鍋で、頸部に指オサエ痕がある。伊藤編年の第２段階のｃ型式にあたる。13世紀前葉のものと思われる。

山茶椀(38)　高台に籾殻痕がある。内面に自然釉が薄く付着している。藤澤良祐氏の山茶椀編年[29]（以下、山茶椀・山皿の編年及び類型名は藤澤良祐氏のものを引用する）の第６型式（尾張型）と考えられる。13世紀前葉のものと思われる。

（エ）ＳＤ７出土遺物（39～86）

土師器小皿(39～45)　南伊勢系のＡ系統にあたる。口縁部は緩やかに外に開く。39は灯明皿であるが、内面だけではなく、外面の1/3ほどにも油煙痕が付着している。43は、口径が８cm前後あるが、歪みが大きく、皿の体を全くなさない失敗作とも言えるものである。本来、流通経路には乗らないはずの皿が、他の完形品とともに投棄されていたことは、土師器皿がかなりまとまった個数で取引されていたため、この種の欠陥品も紛れ込む余地があったのではないかと推測される。

土師器小皿(46～59)　土師器皿の大部分を占めるのが、小皿Ｂのタイプである。口径は7.8cm前後で、南伊勢系のＢ系統に属する。58・59は器高が約2.5cmとやや高くなっており、端部もナデ調整で仕上げられている。

土師器皿Ａ(60～70)　口径が11～12cm、器高2.2cm前後で、南伊勢系のＣ系統にあたる土師器皿である。外側体部に指オサエ痕があり、口縁部は横ナデ調整がみられるもの(64・65・70)もある。口縁部は直線的に伸び、端部がナデ調整で仕上げられている。70は、口径１cm、器高で0.5cmほど大きいが、形としては、Ｃ系統に属する。

土師器鍋(71～78)　土師器鍋は南伊勢系の第４段階を中心に小型から中型の鍋までいろいろな法量のものに加えて、羽釜形や茶釜形なども出土している。

71～73は、南伊勢系の小型の土師器鍋で第４段階のｃ型式に属するものである。71は、口縁部は受口状に直線的に開いており、口縁端部の折り返し部分の断面三角形もやや平らになっている。ハケメは、頸部から体部中央部まで施されている。72は、口縁部端部の折り返し部分の中ほどに沈線状のものが認められ、口縁端部はやや内斜し、端部外面が凹線状に窪む。ハケメは、頸部から体部中央下部分まで施される。73は、ナナメ方向のハケメにタテ方向のハケメが加わる。口縁部下部に稜線がみられる。端部外面が凹線に窪み、端部がやや内湾する。71・73は15世紀後半頃、72は15世紀後半から16世紀前半頃のものと思われる。

74は、南伊勢系の中型の土師器鍋で、第４段階ｃ類に属するものである。ヨコ方向のハケメにタテ方向のハケメが体部中央下まで加わる。口縁部端部はやや内湾し、外面が凹線に窪む。15世紀後半から16世紀前半の頃のものと思われる。

75は、南伊勢系の中型の土師器鍋で、第４段階ｂ類に属するものである。ヨコ方向のハケメにタテ方向のハケメが体部下部まで施され、偏平な底部を持つ。口縁端部外面のヨコナデが強く、内面の折り返し部分の中程に沈線状のものが認められ、端部もやや内湾する。15世紀半ば頃のものと思われる。

76は、南伊勢系の大型の土師器鍋で、第４段階ｂ類に属するものである。体部下部までのヨコ方向のハケメに加えて、タテ方向のハケメが体部中央部まで施される。口縁部端部はやや内湾し、内面の折り返し部分の中程に沈線状のものが認められる。

77は、南伊勢系の中型の土師器鍋で、体部の最大径が中央部より上にあるため、偏平な外観は失われ、やや鋭角に映る。ハケメ調整は体部中央下部までナナメ方向にされている。口縁部の特徴から第４段階ｃ類に属し、76と同時期のものと思われる。

78は、第４段階の煮沸用土器のバリエーションのひとつである茶釜形で、16世紀前半のものと考えられる。

陶器卸皿(79)　15世紀頃の古瀬戸の卸皿である。表面はあまり磨滅しておらず、すぐに廃棄されたと思われる。

青磁椀(80・81)　ＳＤ７からは、青磁片が数点出土している。81は外面体部に蓮弁文が施されている。81は見込み印花紋がヘラ描きされている。ともに、15世紀頃の龍泉窯産と思われる。

瓦質土器(82～85)　82は径６cm前後の筒状のものの小片であるが、３種類のスタンプ文様が認められ

る。縦方向に雷紋と平行して渦巻き紋が押され、突帯で区切り、横方向に花弁紋が互い違いに向かい合う文様となっている。無紋のところには、縦方向の暗紋も認められる。花瓶類の頸部と思われる。83は、脚部、あるいは把手部分の一部と思われるが、器種は不明である。

84・85は、浅鉢形の火鉢の肩部で、頸部に二本の突帯を設け、その間に唐草風の陰刻紋が施されている。

（オ）ＳＫ12出土遺物(86)

土師器皿Ａ(86)　完存で上向きの状態で出土した。底部に穿孔と思われる８㎜ほどの孔が開けられている。南伊勢系のＢ系統のII ｂ期の土師器皿と思われる。

（カ）ＳＤ18出土遺物(87～96)

土師器小皿Ａ(87～90)　南伊勢系の土師器皿Ａ系統にあたるもので、口径８cm前後、器高１cm前後の法量をもつ。89は、歪みがあるが、煤が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。

土師器皿(91～94)　南伊勢系の土師器皿Ｂ系統にあたり、口径12cm前後、器高2.5cmの土師器皿である。II ｂ期後半にあたる14世紀頃のものであろう。

土師器羽釜(95)　南伊勢系の土師器鍋の第３段階に併行するものと思われる。

山茶椀(96)　ほぼ完存で出土した。第６型式（尾張型）にあたるもので、14世紀のものであろう。

（キ）ＳＫ22出土遺物(97～100)

土師器皿(97)　南伊勢系の土師器皿Ｄ系統のもので、15世紀後半頃のものと思われる。

土師器鍋(98～100)　98は、南伊勢系の小型の土師器鍋で、第４段階に併行するものである。口縁端部は受け口状にやや開き気味である。99・100は南伊勢系の中型の土師器鍋である。ハケメが４本/cmとやや荒い。99は、口縁部と頸部との間がやや窪み、端部がやや内湾し、第４段階のｂ型式に該当すると思われる。100は、口縁部のヨコナデが強く、端部はやや内湾し、第４段階のａ型式に該当すると思われる。

（ク）包含層出土遺物(101)

青磁椀(101)　内面底部に印刻花文がされており、13世紀頃の龍泉窯のものと思われる。

２．Ｂ地区

(1)　古墳時代

ＳＨ66の壁際から、多量の古式土師器が出土した。壷、丸底壷、小型丸底壷、台付甕、高杯が出土した。とりわけ高杯の占める割合が高いことが特徴である。壁際の遺物の残存度は良かった。

（ア）ＳＨ66出土遺物(102～161)

土師器壷(102～104)　102は、長胴形を有する直口壷であるが、外面調整は荒く、不整形である。ＳＨ66の北東隅の土坑上部から、高杯とともに押しつぶされた形で出土した。

103は、底部のみであるが、102と同形の直口壷のものと思われる。

104は、大型の直口壷で、口縁部はやや短く、直線的に開く。外面調整は、台付甕(113・114)と似る。ＳＨ66の北壁東寄り付近で、押しつぶされた形で出土した。

土師器丸底壷(105・106)　ともに完存の状態で出土した。105は、ＳＨ66の北壁付近の土器群のなかから、横向きの状態で出土した。均整のとれたプロポーションで口縁部は直線的に開く。106は、壁際に並ぶ土器群とは離れて、ＳＨ66の北西部分の擂り鉢状になった底部からほぼ横向きの状態で出土した。この擂り鉢状の窪みは、ＳＨ66の主柱穴である可能性が高い。106は、口縁部が外反状に開く。体径が器高よりも１cmほど大きいため、105にしたやや偏平な感がある。

土師器小型平底壷(107～110)　107は、口縁部が体部に落ち込んだような接合がされている。108は口縁部が直口し、頸部にはオサエがあり、体部中央部が凹み、平底状を呈する。109は、107と同様な口縁部と体部との接合がある。口縁部は外側に向かって直線的に開き、小型丸底壷に似た形状である。110は、頸部中央がややふくらみを持ち、口縁部は外反し、体径とほぼ同じ口径を持つ。

土師器台付甕（く字口縁甕）(111～114)　112は

口縁部がやや厚く、口唇部内外のヨコナデは1単位となっており、口縁部断面のS字形は見られない。外面調整も、オサエとナデのみで、S字状口縁台付甕特有のハケメは見られない。113も112同様、無紋でハケメは見られない。114はハケメが残るが、口縁部の形状は、112・113と同様である。

高杯(115～161) 松河戸式Ⅰ後期[20]に対応するものが中心である。脚部は高く、裾はなだらかに開き、柱部内面のケズリがあり、器面はナデ調整されている傾向が見られる。さらに、高杯は、口縁部の形状によって5つの種類に分類できる（第25図）。

高杯Aは、SH66出土の高杯の大部分をしめているもので、平らな杯底部から屈折して立ち上がり、口縁端部が外側に開き気味となる。

高杯Bは、杯部と杯下部との外面境が突帯状に張り出す形態を持つ。口縁部は平らな杯部底部から屈折して立ち上がり、口縁端部が外側にやや開き気味となる。精製品が多い。

高杯Cは、杯部が直線気味で、平らな杯底部から緩やかに屈折して立ち上がる。

高杯Dは、杯部と杯下部との外面境が明瞭で、接合部より直線的に開く脚部が特徴であるが、B地区からの出土はなく、E地区からの出土である。

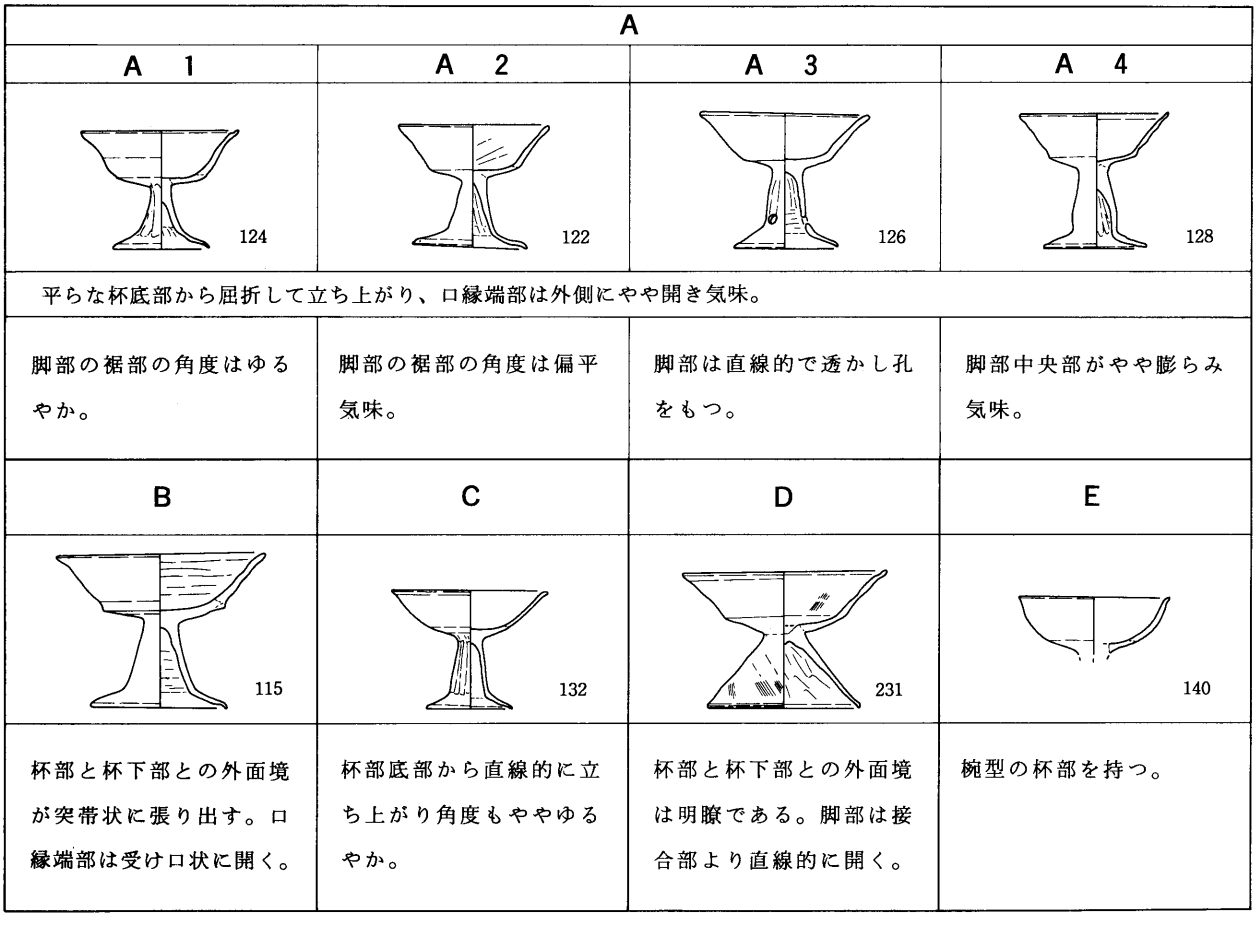
高杯Eは、杯部が丸みを持つ内斜面で、椀状となっている。出土例は少なく、残存度も良くない。

高杯Aとしては、119～126・128・135・136・139・142・143・145・146・148・149・151・154がある。高杯Aは、脚部の形状によって、さらに4つの種類に細分できる。

119・120・124は、杯部底部から口縁部にかけて明瞭な立ち上がりが見られるが、杯部中央部で受け口状にやや広がる。脚部の裾部の角度は緩やかである（A1）。

121～123・125・135・136は、119(A1)と同様な杯部であるが、脚部の裾部の角度は偏平である（A2）。125の杯部は、他のA2の杯部と比べると、やや直線的な立ち上がりである。

126は、今回出土した高杯のなかで唯一透かし孔



第25図　中の坊遺跡出土の古式土師器高杯

が認められたものである。口縁部は外反し、平らな杯底部から屈折して立ち上がっている。脚は直線的で下方に三方透かし孔がある。

128は、119(A1)と同様の脚部ながら、脚部中央部が膨らみ気味でゆるやかな裾部に続く（Ａ４）。

高杯Ｃ(117・127・129・130・132～134)は、杯部底部から直線的に広がる口縁部が特色である。117・127は杯部底部から口縁部にかけての屈曲がやや明瞭であり、高杯Ｂの特色も見られる。脚部は、直線的で、裾部はやや偏平な角度である。

高杯Ｅ(140)は、椀型の杯部を持つ。出土例は少なく、残存度も良くない。ＳＨ66の西側に集中している。

高杯Ａ～Ｃは、松河戸Ｉ式の後半期に対応すると思われる。高杯Ｅは、やや時代が新しくなり宇田期に対応するものと思われる。

⑵　奈良・平安時代

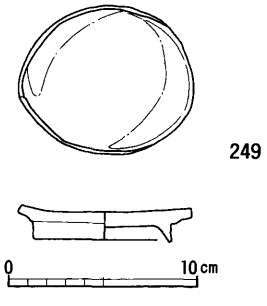
Ｂ地区出土の奈良・平安時代の遺物は、中世の遺構に含まれていたものがほとんどである。特に、ＳＡ51の土器溜まりに含まれていたものが多い。

（ア）ＳＡ51出土遺物(163～172)

土師器皿(163・164)　ともに底部をヘラケズリし口縁部を横ナデし、口縁端部は丸く終わっている。内面は風化のため、ミガキ・暗文などの調整は不明である。奈良時代前期頃のものと思われる。

灰釉陶器皿(165)　平安時代前II期[22]に属する東海系の皿で、10世紀前後のものと思われる。

転用硯(166)　灰釉陶器椀の底部が加工されたもので、形状から硯ではないかと思われるが、使用された痕跡はない。側面は二次加工を受けているのか、滑らかな断面となっている。なお、同様なものがもう一個出土している（249・第26図）が、側面に166のような滑らかさはなく、二次加工前に廃棄されたのではないかと思われる。10世紀前後のものと思われる。



第26図　ＳＡ51出土遺物（1:4）

製塩土器(167～169)　平底でほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ志摩式製塩土器とよばれる浅鉢形土器である。９～10世紀頃の平安時代のものと思われる。塩水煎熬用に適した形となっている。２次焼成痕が３個体とも認められる。ＳＡ51出土の土器の中では、残存度はきわめて悪く、小片・細片化している。これは、製塩土器の器壁中に浸透した炭酸塩の結晶成長による器壁の剝離性と破砕作用によるもの[23]と考えられる。

海岸部から離れた当地で、製塩がなされていたとは考えにくい。煎熬するための製塩土器ではなく、製品化された塩の容器として製塩土器がそのまま使用[24]され、櫛田川の水運によって、当地まで運ばれてきたものと考えられる。

（イ）ＳＤ64出土遺物(170～172)

緑釉陶器椀(170)　猿投産で、10世紀前後のもの[25]であると思われる。

軒平瓦(171)　均正唐草文軒平瓦で、外区はない。中心飾りを欠いているが、左右に２反転ずつの唐草文を配すると考えられる。１単位につき４つの子葉を持ち、細いながらも優美な感触を漂わせている。左右２単位の大きさからして、小振りの軒平瓦であり、御堂クラスの建物に使用されていたと考えられる。

表面が剝離した部分から縄タタキがされていることがわかる。内面は布目を消しており、丁寧な造りとなっている。８世紀第２四半期頃のものと思われる。

出土したのは、室町時代の石組み暗渠ＳＤ64からであり、直ちに同時期の寺院の存在が推定できるものではないが、字名の「中の坊」などに関連している可能性もある。また、既知の文様ではない[26]ことも考え合わせると、付近に奈良時代の寺院が存在していた可能性がある。

平瓦(172)　縄タタキがある平瓦で、171と同じ８世紀第２四半期頃のものと考えられる。

⑶　中世

区画溝と思われるＳＤ56からは、土師器皿・鍋、山茶椀、天目茶椀、陶器壷、瓦質の風炉、和鏡など多種にわたる遺物が出土した。石込め暗渠のＳＤ64・65にも陶器が石と混在して出土した。

（ア）ＳＤ56出土遺物（174～187）

土師器皿Ｂ（174～177）　174～176は、南伊勢系の土師器皿Ｂで、Ⅲｂ期にあたる。15世紀前半のものと思われる。177は南伊勢系の土師器皿Ｄ系統に属するものである。

土師器鍋（178）　南伊勢系の小型の土師器鍋で、第３段階のｂ型式に属し、15世紀前半のものと思われる。

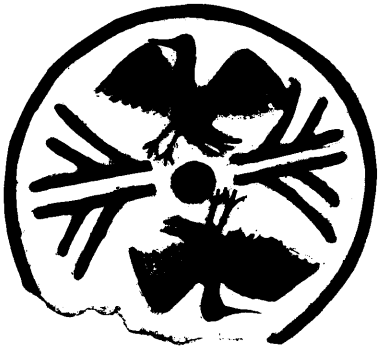
陶器平椀（179）　古瀬戸の平椀で、藤澤良祐氏による古瀬戸編年の後期のもので、15世紀頃のものと思われる。

陶器直縁大皿（180）　古瀬戸の直縁大皿で、藤澤氏の古瀬戸編年の後期のもので、15世紀頃のものと思われる。

陶器山茶椀（181・182）　180は渥美窯産の第６型式に属すると思われる。181は尾張窯産の第６型式に属すると思われる。

陶器天目茶椀（184）　瀬戸産の天目茶椀で、藤澤良祐氏による瀬戸・美濃大窯編年[27]の第３段階のもので、16世紀のものと思われる。

瓦質土器（185）　復元口径約35cmの瓦質の風炉である。頭部に２条の凸帯を設け、その間に花菱形のスタンプ文を連続して押印する。体部下部にも凸帯がめぐらされ、底部外面縁辺には猫足が張りつけられている。花菱文は、花弁の中央の子葉が逆Ｕ字形を呈し、花菱の単位が半分ずつ背中合わせになっている。16世紀の大和産のもの[28]と思われる。同文のものが、県内では松阪市の向王子Ｂ遺跡[29]で出土している。



第27図　和鏡構図概念図（1:1）

和鏡（187）（第27図）　ＳＤ56の底部から出土した円鏡である。縁が欠落しているため、正確な大きさは不明であるが、径６cm前後の円鏡である。背文様は腐食がすすんでおり、詳細な構図は不明であるが、翼を広げた鶴が向かい合い、間に草花が配置されている双鳥草花鏡と呼ばれるものと思われる。鈕座部分は約２cmの大きさである。鏡面の残存度は良く、一部磨かれたままの状態の部分もある。鎌倉時代後半から室町時代前半頃のものと思われる。

青磁椀（188）　13世紀頃の龍泉窯系の青磁椀である。

陶器山茶椀（190）　第６型式（尾張型）に属すると思われる。外側面には煤が付着している。

３．Ｃ地区

⑴　縄文時代

Ｃ地区の下層の暗褐色粗砂層からは縄文土器・石器（フレイク）が出土した。

縄文土器（192～195）　192は縄文施文の後、ヘラ描きの横位沈線が２条はいる。193は粗製土器の底部である。195は内面に縄文施文の後、ヘラ描きの横位沈線が１条はいる。いずれも、縄文時代後期頃のものと思われる。Ｃ地区の下層には、広範囲にわたって縄文時代の遺物が散布することが予想される。従来、櫛田川流域での縄文時代の遺跡分布は松阪市射和町付近までと考えられてきたが、今回の調査によって、下流域にまで、その範囲が広がる可能性が出てきた。

⑵　中世

出土遺物の大半を占める土師器皿・鍋に混じって、陶器壷などが混じる。多量の鉄釘に混じって、刀なども出土している。掘削前の畦畔部分には、五輪塔の一部もあり、中世墓がＣ地区付近に広がっていた可能性が高い。

（ア）ＳＫ73出土遺物（196～205）

土師器小皿(196・197)　南伊勢系のA系統にあたる土師器小皿である。SK73から多量に出土した。

土師器皿B(198～200)　南伊勢系のB系統のIIb期にあたる土師器皿で、口径が11～12cm、器高2.5cm前後である。14世紀後半頃のものと思われる。

土師器鍋(201・202)　南伊勢系の土師器鍋で、第3段階のa型式にあたるもので、14世紀半から後半にかけてのものと思われる。口縁部は長く発達しており、やや内湾気味である。体部外面には、クシメ状のハケメが斜め方向にていねいに施されている。

陶器壷(203)　13～14世紀頃の猿投産の三筋壷と思われる。

瓦質土器(204)　13世紀頃の片口鉢である。

(イ) SK75出土遺物(206～211)

土師器小皿(206～208)　南伊勢系のA系統にあたる土師器小皿である。SK73出土の土師器小皿とほぼ同じ法量のものである。

土師器皿B(209)　南伊勢系のB系統のIIb期にあたる土師器皿である。14世紀後半頃のものと思われる。

土師器鍋(210・211)　ともに口径20cm前後の南伊勢系の小型の土師器鍋で、第2段階のものと思われる。210の口縁部は直線的に伸びる。体部にはクシメ状のハケメがていねいに施されている。211は、口縁部が受け口状に開き、頸部には指オサエ痕もある。13世紀前葉のものと思われる。

(ウ) SK78出土遺物(213・214)

陶器壷(213)　古瀬戸の壷で、14～15世紀頃のものと思われる。

(エ) SK85出土遺物(216～219)

土師器皿B(216・217)　南伊勢系のB系統のIIb期にあたる土師器皿である。

土師器鍋(218・219)　218は、中型の南伊勢系の土師器鍋で、第4段階のc型式にあたる。口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部外面は凹線状に窪む。15世紀代のものと思われる。219は、口縁端部が強く内傾している羽釜形の土師器鍋である。15世紀代のものと思われる。

(オ) SK94出土遺物(220～222)

山皿(220)　藤澤氏の山茶椀編年による尾張窯産の第6型式にあたる山皿である。内側は磨滅して滑らかになっている。朱が付着していることから、朱皿として使用されたと思われる。

陶器甕(221)　藤澤氏の瀬戸・美濃大窯編年の第3段階にあたるもので、16世紀頃のものと思われる。頸部付近には、判読不明のヘラ記号ないし文字がある。

銅銭(222)　SK94の底部から出土した。真書で書かれた「皇宋通寶」(北宋・1038年)[30]である。今回出土した銅銭は、この1枚だけであるが、以前、この付近の畑を耕作中に、銭緡の状態で甕の中から多量の古銭が出土したとのことである。

(カ) SK98出土遺物(223・224)

土師器皿B(223)　南伊勢系のB系統のIIb期にあたる土師器皿である。

山皿(224)　藤澤編年による常滑窯産の第7型式にあたるもので、14世紀中葉から15世紀にかけてのものと思われる。

4. D・E地区

(2) 古墳時代

D・E地区のコーナー付近を中心に出土した。上層の包含層からは、6世紀頃の須恵器甕、杯蓋・杯身などが多量含まれていた。大溝と思われる落ち込みの周囲の土坑からは、ほぼ完形の土師器が数点出土した。

(ア) SK48出土遺物(225～229)

土師器壷(225)　口縁部がわずかに外反し、体部から底部にかけて煤が付着する。外面はナデ、オサエ及び板ナデ、内面はナデ、オサエ、下半部にはヘラケズリが施される。

土師器高杯(226)　口縁部は外反し、杯部は丸みを帯びる。脚台部には「ソケット」状の接合方法をとっている。

土師器甕(227)　韓式系土器の甕である。色調は灰色である。内面を工具によるナデ、外面にはタタキを施した後、螺旋状の沈線が施されている。県内での出土例[31]は少なく、本遺跡を含めて4例しかない。

(イ) SK68出土遺物(230・231)

土師器台付甕(230)　ほぼ完存の状態で、横向きに出土した。橙色の色調で、内面をナデ、外面は頸部以下をハケメ調整の後、体部上半に横方向のケズリを施している。体部下半には焼成後穿孔が見られる。

土師器高杯(231)　台付甕(230)の隣から正立した状態で出土した。口縁端部がわずかに外反し、端部内面には沈線がまわる。脚部は杯下部からそのままほぼ直線的に広がる。中の坊遺跡では、高杯が大量に出土しているが、このような形態は類を見ない。県内では城之越遺跡[31]、蔵田遺跡で同様なものが出土している。松河戸II式に対応するものと思われる。

(ウ) ＳＫ69出土遺物(232)

土師器小型丸底壷(232)　泉の可能性が考えられるＳＫ69から台付甕の台部とともに出土した。口縁部にはヨコナデ、体部外面には煤が付着する。Ａ地区ＳＫ15で見られる小型丸底壷と同時期のものと思われる。

(2) 飛鳥・奈良・平安時代

(ア) ＳＤ27出土遺物(234～237)

土師器皿(234)　内外面ともにヨコナデ、内面底部にはナデ調整を施す。12世紀頃のものと思われる。

土師器椀(235・236)　235は口縁がわずかに外反し、内面はナデ、外面はオサエ、下半の一部にケズリが施される。236は内外面ともにナデ調整が施され、内面下半にはケズリが見られる。236は７世紀前半、235はそれより若干遡ると思われる。

須恵器椀(237)　口縁がわずかに外反し、内外面ともにロクロナデ調整が施される。９世紀後半のものと思われる。

(イ) 包含層出土遺物(238～244)

ロクロ土師器椀(238・239)　238はＥ地区北部分の包含層から検出された。239はＥ地区中央部の包含層から数点まとまって検出された。ともに11世紀前半頃のものと思われる。

土錘(240～244)　Ｅ地区の包含層では土錘が多く出土しており、図示したものを含め計20点以上出土している。その中で径１cm以下のもの(241～244)が14点、径1.1～2.0cmのものは５点、２cmを越えるものは１点(240)のみである。

(3) 中世

中の坊遺跡全体では、山茶椀の検出は少ないが、遺跡の東端にあたるＥ地区では山茶椀が全般的に検出された。多くはローリングを受けており、Ｅ地区東側にあると推定される旧河道の流れ込みと思われる。中の坊遺跡の東方の古川遺跡では第６型式の山茶椀が多く出土しており、何らかの関連があると思われる。

(ア) ＳＫ29出土遺物(246・247)

山茶椀(246)　藤澤氏の山茶椀編年による渥美窯産の第６型式にあたるもので、14世紀頃のものであろう。高台には籾殻痕がある。Ｅ地区全体でも、渥美窯産の同型式のものが目立つ。

⑮　中村浩ほか　「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」（『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会、1978年）

⑯　Ｓ字状口縁台付甕の編年に関しては、下記の文献を参考にした。
加納俊介「土師器の編年　４東海」（『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』雄山閣、1991年）
山田猛「弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）

⑰　赤塚次郎ほか『松河戸遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター、1994年）

⑱　伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

⑲　伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』Vol.1　三重歴史文化研究会、1990年）

⑳　藤澤良祐「山茶椀と集落」(『尾路』瀬戸市教育委員会、1990年)
藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」(『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター、1994年)

㉑　赤塚次郎　前掲書

㉒　「斎宮跡の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報　1984』三重県斎宮跡調査事務所、1985年）

㉓　近藤義郎　「第２章　土器製塩の話」（『土器製塩の研究』1984年、青木書店）

㉔　石部正志　「原始・古代の土器製塩」『講座・日本技術の社会史第二巻　塩業・漁業」1985年、日本評論社）

㉕　大川勝宏　「斎宮跡の施釉陶器」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器』　古代の土器研究会第３回シンポジウム、1994年）

㉖　『三重県の古瓦』　（三重県の古瓦刊行会、1996年）

㉗　藤澤良祐　「瀬戸大窯の変遷」（『瀬戸市史 陶磁器篇四　瀬戸大窯の時代』　瀬戸市史編纂委員会、1993年）

㉘　菅原正明　「西日本における瓦器の展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告　第19号』、1989年）

㉙　福田哲也　「向王子Ｂ遺跡」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか」三重県埋蔵文化財センター、1993年）

㉚　「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」（兵庫県埋蔵銭調査会1994年、ぎょうせい）

㉛　穂積裕昌「三重県上野市城之越遺跡出土の韓式系土器について」（『韓式系土器研究Ⅳ』1993年、韓式系土器研究会）

㉜　伊藤裕偉「城之越遺跡の古式土師器」（『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1992年）

V　結　　語

集落の変遷

中の坊遺跡は、古墳時代と鎌倉・室町時代を中心とする集落跡である。遺物の分布状況からすると、縄文時代から室町時代にかけて、連綿と生活が営まれていた可能性がある。櫛田川と祓川にはさまれた当地は、自然堤防上を中心とする集落の適地であったのであろう。

中の坊遺跡周辺では、西方200mに位置する古川遺跡が平成７年度に発掘調査された。古川遺跡では４世紀後半頃のＳ字状口縁台付甕が10点近く出土しており、付近に同時代の集落跡があることが予想された。今回の調査で、そのことが裏付けされたものと考えられる。櫛田川両岸に連なる古墳群と関連する集落の存在は不明な点が多かったが、それらを支えた集落のひとつが、中の坊遺跡であったのではないかと思われる。櫛田川の沖積平野の自然堤防を中心に、古墳時代の集落が連続していた可能性は高い。

飛鳥～平安時代にかけての遺構は明確ではないが、Ｂ地区のＳＡ51の土器一括投棄箇所からは、同時代の遺物がまとまった量で出土している。付近に集落跡が存在したと考えられる。しかし、中世以降のＳＤ７やＳＤ56を伴うような大規模な造成のため、ほぼ同一レベルに存在した遺構は撹乱を受けたと考えられる。

鎌倉時代では、集落の中心は南方の古川遺跡付近に移ったと思われる。中の坊遺跡の山茶椀の検出箇所は遺跡の東部分に偏っており、全体として多くない。また、Ｅ地区で多く検出された山茶椀の大部分はローリングを受けており、古川遺跡とＥ地区との間にあったと想定される旧河道の影響と思われる。その古川遺跡が河道の変化などによって廃絶した後、室町時代の15世紀頃に中の坊遺跡に集落の中心が移ったと思われる。

ＳＨ66の出土遺物

ＳＨ66で注目されることは、一辺8.5mという大型の竪穴住居であることと、壁際から連なって検出された古式土師器群の存在である。古式土師器の器種別では、圧倒的に高杯が多く、その個体数は50を越える。とりわけ、北壁・東壁付近のものは残存度も良好である。一連の土師器は廃棄されたと考えるより、意図的に置かれたものと考えたほうがよいと思われる。

さらに、出土状況を考えるならば、竪穴住居として廃絶した後に、土器が並べられたと考える。北東隅の貯蔵穴と思われる土坑の下段には淡黄灰色砂質土が堆積しており、土師器群は上段部分から検出されている。さらに土坑の壁付近の土器は、周囲に並べられていたものが、土坑内にずり落ちたと思われる。また、完形で出土した丸底壷（106)が主柱穴と思われる部位の窪みから横向きに出土しているが、これも竪穴住居の廃絶後に置かれたものと思われる。

ＳＨ66では、組にして置かれたと思われる土器も目立つ。壁からやや離れた部分に、台付甕と小型丸底壷、高杯の３つが組み合わせて置かれている。Ａ地区のＳＨ15も同様なことがいえる。当時の祭祀の形態を示す資料かもしれない。

ＳＨ66の特色である大量の高杯であるが、時期的には松河戸Ｉ式後半期に相当する時期にあてはまる。ＳＨ66の中央部の西寄りで検出されている高杯は残存度が芳しくないが、主に宇田式に相当する時期まで下ると思われる。

ＳＨ66から出土した土師器群の性格であるが、供膳具である高杯の占める割合が極めて高いことから、祭祀が行われた跡と見ることができるのではなかろうか。竪穴住居から多量の高杯が出土した例としては、名張市の壇・柏原遺跡[8]のものがある。カマドを中心に30数点の高杯が出土している。何らかの祭祀形態が廃絶直後の竪穴住居内で行われたと考えられそうであるが、今後の類例を待って検討をしたい。

瓦質土器について

Ａ地区・Ｂ地区から、スタンプ紋の入った瓦質土器が数点出土した。昨年度発掘した古川遺跡では、瓦質土器が全く出土していないのと対照的である。

古川遺跡は鎌倉時代半ばの遺跡であるのに対し、時代がやや下る中の坊遺跡と同格に比べることはできないが、中の坊遺跡の広範な流通圏が推測される。

B地区で出土した火鉢の口縁外部に押印されている花文は「花菱文」と呼ばれるものである。菅原正明氏の分類[35]によれば、花菱文の花弁の中央の子葉が逆U字状になっており、花菱が半分ずつ背中合わせになっているBロ群に属するものである。同様のスタンプ模様と考えられるものが松阪市の向王子B遺跡[36]から見つかっている。また、阿山郡大山田村の向山2・6号墳から出土の風炉と同じスタンプ模様のものも出土している。

室町時代後期の奈良火鉢は、陸奥国から薩摩国まで広く流通していたと推測されている[37]が、三重県内も伊勢本街道に沿って流通したことが予想される。

製塩土器について

B地区のSA51からは、製塩土器の破片が多量に出土した。後世（室町時代）になってからの一括投棄という出土状況のため、明確なことまで言及できないが、多量の製塩土器が付近に持ち込まれていたことは確かである。

出土した製塩土器は浅鉢形の「志摩式製塩土器」と呼ばれている[38]ものである。県内では、海岸部に限らず、伊賀などの内陸部で確認されており、当地で煎熬したとは考えにくく、外部から持ち込まれたと考えるのが妥当である。櫛田川の水運を利用して、当地に運ばれたと考えられる。櫛田川河口部の西黒部村は、古くから塩業で知られている。塩業としての史料は、「勢陽五鈴遺響」[39]までしか遡れないが、それ以前から行われていた余地はある。櫛田川水運を通じて内陸部まで流通したのであろう。今後の櫛田川流域での製塩土器の出土例に期待したい。

中世の遺構の性格について

A・B地区では、区画溝と考えられる大規模な溝が見つかっている。A地区の区画溝には、当初石組みがなされていた痕跡も認められた。かなりの有力者の屋敷の存在がうかがえる。

両地区の溝から多量に出土した遺物に土師器皿がある。おそらく、溝としての機能を失ってからの投棄に違いないが、一時にまとめて投棄されていることは確かである。出土状況から見ると、完存の皿が主体であり、法量もほぼ同じものがまとまっている。破損したものを廃棄したのではなく、使用後そのまま投棄した様相がある。土師器皿そのものが、繰り返して使用するものではなく、使い捨ての容器としてとらえられていたと思われる。皿のなかには、実際の使用には耐えられなかったと思われる歪みが大きな不良品も混在する。これらは、土師器皿がかなりまとまった数量で取引されたままの状態で使用され、使用後に間もなく投棄されたことを示していると考えられる。

また、土師器鍋もかなりまとまった数量で土師器皿に混じって出土している。残存度も良好で、土師器皿同様、破損したため廃棄されたというよりも、土師器皿と同時に使用され、投棄された感が強い。

土師器皿の大量投棄は、鎌倉の都市遺跡、岩手県平泉の柳御所遺跡、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡をはじめ、県内でも北畠氏関連の多気遺跡群などでも見られる。饗宴などの行為の後で投棄されたと考えられており、中の坊遺跡も同様であった可能性は高い。

土師器皿・鍋に加えて、大和産の花瓶・火鉢などの瓦質土器、和鏡の出土も考え合わせていくと、一般集落ではなく、当時の有力階級の屋敷跡と思われる。

中の坊遺跡の位置づけ

従来、櫛田川下流部の漕代地区の遺跡については、中世が中心とされていた。今回の調査では、縄文土器が下層部から確認された。遺構の確認までは至らなかったが、松阪市射和町付近どまりであった縄文時代の遺跡がさらに下流部に広がる可能性がある。漕代地区で人々の暮らしが本格的になるのは、古墳時代と考えられる。E地区からは多量の土錘も見つかっており、漁撈活動も伴った生活が展開されたことが示唆される。また、韓式糸土器の出土は、幅広い交流があったことをうかがわせる。両岸の丘陵部に連なる古墳群との関連は不明であるが、中の坊遺跡は自然堤防上に連なる拠点的な集落のひとつであった可能性はある。歴史時代になると遺構・遺跡は減る傾向にあるが、室町時代の暗渠から出土した奈良

時代の軒平瓦は、付近に寺院があったことを想定させる。また、多量の製塩土器は櫛田川水運の体系に、当地が組み込まれていたことも想定させる。櫛田川流域には、広範囲にわたって古代条里制が分布するが、中の坊遺跡の位置は、条と里が交差する場所に近いこと[39]もわかっている。鎌倉時代になると、集落の中心は古川遺跡などに移るが、室町時代になると集落の中心は西側に移り、当地に大規模な溝を備えた屋敷がつくられたと考えられる。北畠氏の興隆とともに栄えたであろう当地も、織田勢による攻勢や度重なる氾濫も加わり廃絶していったのであろう。

㉝ 田阪仁「Ⅳ　名張市赤目町壇・柏原遺跡」（『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』1984年、三重県教育委員会）

㉞ 菅原正明　前掲書

㉟ 福田哲也　前掲書

㊱ 菅原正明　前掲書

㊲ 山本雅靖　「志摩式製塩土器考」（『考古学論集第3集』1990年、歴文堂書店）

㊳ 「勢陽五鈴遺響」に「西黒部…食塩ヲ焼テ出ス方俗黒部塩ト賞ス」とある。（『勢陽五鈴遺響4　飯野郡・飯南郡・多気郡』三重郷土資料刊行会、1977年）

㊴ 谷岡武雄　前掲書

A地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	018 −03	須恵器 杯蓋	SK13 (A)E−5	15.0 前後	−	4.6 前後	内側〜外側体部ロクロナデ、外側上部ロクロケズリ	やや粗(〜1mm砂粒含)	良	灰	3／5	
2	056 −01	土師器S字状口縁台付甕	SK15 (A)B−4	13.8	体部 25.2	−	内側体部ナデ、内外部口縁部横ナデ、外側体部ハケメ(3〜4本/cm)	密	良	浅黄橙	口縁部 3/8 台部欠く	外面スス付着
3	057 −01	土師器S字状口縁台付甕	SK15 (A)B−4	13.2	体部 24.7	28.1	内側台部オサエ後ナデ、底部横ナデ、内側体部ナデ内外部口縁部横ナデ、外側体部ハケメ(3〜5本/cm)	やや密	やや良	浅黄橙	口縁部 1/5 体部 1/2	高台径8.9cm完存
4	013 −02	土師器 高杯(杯)	SK15 (A)B−4	17.5	−	−	調整不明瞭	やや密	並	淡黄	杯部ほぼ完存	脚部欠く
5	013 −01	土師器 高杯(脚)	SK15 (A)B−4	−	12.2	−	内側裾部ナデ、裾部端面横ナデ、外側裾部・脚部ハケメ	やや密	並	浅黄橙	脚部ほぼ完存	
6	013 −03	土師器 高杯(脚)	SK15 (A)B−4	−	11.8	−	内側裾部ナデ、裾部端面横ナデ、外側面取り風ハケメ	やや密	並	灰白	1／5	
7	016 −01	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	8.2	8.7	8.7	内側体部ケズリ、内側口縁部〜外側底部ナデ、口唇部横ナデ	やや粗(〜1mm小石含)	並	にぶい黄橙	ほぼ完存	
8	016 −02	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	8.5	9.7	9.9	内側体部ケズリ、内側口縁部〜外側底部ナデ、	粗(〜3mm小石含)	並	にぶい黄橙	口縁部 3/8 欠く	
9	016 −03	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−3	9.0	10.0	9.6	内側体部ケズリ、内外側口縁部ナデ、外側体部ハケもしくはケズリ後ナデ	粗(〜3.5mm小石含)	並	浅黄橙	口縁部 1/5 欠く	
10	017 −01	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	9.4	9.6	9.3	内側体部ケズリ、内側体部上部〜外側体部上部ナデ、外側底部ケズリ	やや粗(〜2mm小石含)	並	にぶい橙	口縁部 13/16 欠く	
11	017 −03	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	9.2	9.4	10.2	内側体部ケズリ、内側体部上部〜外側体部上部ナデ、外側体部下部ケズリ	粗(〜3mm小石含)	並	浅黄橙	口縁部 2/3 欠く	
12	016 −04	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	9.3	10.1	10.1	内側体部ケズリ、内側口縁部〜外側体部上部ナデ、外側体部下部ケズリ	粗(〜3mm小石含)	並	淡赤橙	口縁部 1/2 欠く	
13	016 −05	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−3	8.2	9.4	9.3	内側体部ケズリ、内側口縁部〜外面体部ナデ及びオサエ、外側底部ケズリ	やや密	並	にぶい橙	口縁部 1/4 欠く	
14	017 −02	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	7.8	9.6	9.5	内側体部ケズリ、内側口縁部〜外側体部上部ナデ、外側体部下部〜底部ケズリ	やや粗(〜1.5mm小石含)	並	橙	口縁部 1/4 欠く	
15	017 −04	土師器 小型丸底壺	SK15 (A)B−4	−	9.7	−	内側体部ケズリ、内側体部上部ナデ、外側ケズリ	粗(〜3mm小石含)	並	淡黄	口縁部欠く	
16	013 −04	土師器 二重口縁壺	Pit1 (A)D−6	8.7	4.0	10.7	内外側ナデ	やや密(微砂粒)	並	淡黄	完存	高台に砂痕 一部に黒斑あり
17	001 −06	土錘	SK2 (A)D−1	径 1.4	穴径 0.6	長さ 5.2		密	良	にぶい橙	完存	重さ 6.78g
18	001 −05	緑釉陶器 椀	SK5 (A)D−1	8.9 前後	−	−	ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ、全体に施釉	密	良	灰白	1／12	釉:黄緑がかった緑
19	015 −01	土師器 長胴甕	SK14 (A)F−5	24.8	体部 22.6	−	内側体部下部ナデ、内側体部上部ハケメ、口縁部ナデ、外側体部ハケメ	やや密	並	浅黄橙	口縁部 5/8	接合痕あり 口縁に沈線
20	055 −02	土師器 椀	包含層 (A)E−5	12.9	−	4.9	内側ナデ、口縁部横ナデ、外側体部オサエ後ナデ内側に削痕・工具跡	やや密	やや良	淡黄	口縁部 4/5 欠く	
21	003 −04	土師器 皿	SD1 (A)D−1	8.9	−	2.4	内側底部ナデ、内外側体部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	密(〜5mm小石含)	良	灰白	ほぼ完存	
22	010 −01	土師器 鍋	SD1 (A)E−2	22.0	体部 20.6	−	内側底部ケズリ、内側体部〜外側口縁部ナデ、外側体部ハケメ(4本/cm)、外側底部ケズリ、内側口頸部ハケメ	やや密	並	浅黄橙	口縁部 3/8	4b
23	014 −06	土師器 小皿	SK3 (A)F−5	7.2	−	0.6	内側底部〜外側口縁部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	密	並	浅黄橙	完存	
24	003 −02	土師器 小皿	SK3 (A)F−5	7.2	−	1.1	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	密	並	浅黄橙	完存	
25	002 −06	土師器 小皿	SK3 (A)F−5	7.7	−	1.3	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	密	並	浅黄橙	完存	口縁に煤付着 灯明皿
26	014 −01	土師器 小皿	SK3 (A)F−5	7.8	−	1.0	内側底部〜外側口縁部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	密	良	浅黄橙	完存	油煙付着 灯明皿
27	014 −02	土師器 小皿	SK3 (A)F−5	7.9	−	1.4	ナデ	密	良	浅黄橙	完存	口縁に油煙付着 灯明皿
28	002 −05	土師器 皿	SK3 (A)F−5	8.0	−	1.7	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	密	良	浅黄橙	底部欠く	

第1表　遺物観察表

A地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
29	003 −01	土師器 皿	SK3 (A)F−5	8.0	−	1.7	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	密	良	浅黄橙	完存	
30	003 −03	土師器 皿	SK3 (A)F−5	7.7	−	1.6	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ	やや密	並	淡赤	完存	
31	014 −04	土師器 皿	SK3 (A)F−5	7.8	−	1.7	内側底部〜外側体部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	やや密 (細砂粒)	並	橙	完存	
32	014 −05	土師器 皿	SK3 (A)F−5	7.7	−	1.6	内側底部〜外側体部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	やや密	並	浅黄橙	1／2	
33	014 −03	土師器 皿	SK3 (A)F−5	8.2	−	1.9	内側底部〜外側体部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	密	良	浅黄橙	完存	
34	001 −02	土師器 皿	SK3 (A)F−5	12.1	−	2.4	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側底部オサエ後ナデ、両側に指オサエ痕	やや密	並	浅黄橙	完存	
35	001 −07	土錘	SK3 (A)F−5	径 2.0	穴径 0.6	長さ 5.7		密	良	にぶい橙	ほぼ完存	重さ 12.92g
36	002 −03	砥石	SK3 (A)F−5	厚さ 0.7	幅 3.2	長さ 12.6		−	−	浅黄		凝灰岩
37	001 −01	土師器 鍋	SD6 (A)B−5	19.0	体部 19.4	−	内側体部ナデ、口縁部横ナデ、外側肩部オサエ後ナデ、外側体部ハケメ(7・8本/cm)	やや密	並	淡黄	1／4	外側に煤付着 小型 2c
38	002 −04	陶器 山茶椀	SD6 (A)B−5	−	6.1	−	内外側ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ、糸切痕	密	良	灰白	1／2	高台に籾殻痕 尾張6
39	011 −09	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	6.8	−	0.8	内側底部〜外側口縁部ナデ、外側底部オサエ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	並	淡黄	完存	灯明皿内外面に油煙付着
40	021 −01	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	6.7	−	0.7	内側ナデ、外側オサエ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	並	浅黄橙	完存	
41	012 −06	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	7.2	−	1.0	内側ナデ、外側オサエ	密 (微砂粒)	並	浅黄橙	完存	
42	021 −02	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	8.1	−	0.8	内側ナデ、外側オサエ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	並	浅黄橙	完存	
43	009 −12	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	7.3	−	0.8	外側ナデ、外側オサエ	密	並	浅黄橙	3／4	歪み大きく皿の体なさず
44	009 −11	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	7.6	−	0.8	内側ナデ、外側オサエ	密	並	浅黄橙	完存	
45	009 −10	土師器 小皿	SD7 (A)B−5	7.9	−	1.0	外側ナデ、外側オサエ	密	並	浅黄橙	完存	
46	012 −01	土師器 皿	SD7 (A)B−5	8.0	−	1.8	外側ナデ、外側オサエ・ナデ	やや密(〜1.5mm砂粒含)	良	浅黄橙	完存	
47	012 −02	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.9	−	1.5	外側ナデ、外側オサエ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	並	淡黄	完存	
48	012 −03	土師器 皿	SD7 (A)B−6	7.5	−	1.5	外側ナデ、外側オサエ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	良	浅黄橙	完存	
49	009 −08	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.7	−	2.0	内側底部〜外側体部ナデ、外側底部オサエ・ナデ	密	並	浅黄橙	3／4	
50	009 −07	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.4	−	1.8	内側底部〜外側体部ナデ、外面底部オサエ後ナデ	密	並	浅黄橙	完存	
51	009 −09	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.7	−	1.9	内側底部〜外側体部ナデ、外面底部オサエ後ナデ	密	並	浅黄橙	3／4	
52	012 −05	土師器 皿	SD7 (A)B−5	8.0	−	1.8	内側ナデ、外側オサエ・ナデ	密(〜1.0mm砂粒含)	良	橙	完存	
53	021 −03	土師器 皿	SD7 (A)B−5	6.9〜8.4	−	1.9	内側ナデ、外側オサエ・ナデ	密(〜1.5mm砂粒含)	並	淡黄	完存	
54	021 −04	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.2〜7.9	−	1.7	内側ナデ、外側オサエ・ナデ	密(〜1.5mm砂粒含)	並	浅黄橙	完存	
55	009 −05	土師器 皿	SD7 (A)C−5	7.6	−	2.2	内側底部〜外側体部ナデ、外面底部オサエ後ナデ	密	並	灰白	完存	
56	011 −08	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.8	−	2.0	内側ナデ、外側オサエ・ナデ	密(〜1.5mm砂粒含)	並	にぶい橙	完存	

第2表　遺物観察表

A地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
57	021 −03	土師器 皿	SD7 (A)B−5	6.9〜8.4	−	1.9	内側ナデ、外側オサエ・ナデ	やや密 (微砂粒)	良	浅黄橙	完存	
58	011 −07	土師器 皿	SD7 (A)B−5	7.9	−	2.5	内側ナデ、口縁部横ナデ、外側体部〜底部オサエ 内側口縁部に工具痕	密	並	灰白	完存	
59	009 −06	土師器 皿	SD7 (A)C−5	8.3	−	2.4	内側底部〜外側口縁部ナデ、外側体部〜外側底部オサエ	密	並	灰白	3／4	
60	009 −01	土師器 皿	SD7 (A)B−5	10.6	−	1.9	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ	やや密	並	浅黄橙	完存	
61	009 −02	土師器 皿	SD7 (A)B−5	11.8	−	2.0	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ 体部に指オサエ痕あり	やや密	並	浅黄橙	完存	
62	009 −03	土師器 皿	SD7 (A)B−5	11.5	−	2.2	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ	やや密	並	淡黄	完存	
63	009 −04	土師器 皿	SD7 (A) B−5	11.5	−	2.2	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ 底部に工具痕	密	並	浅黄橙	完存	
64	011 −01	土師器 皿	SD7 (A)B−5	11.5	−	2.3	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側体部〜外側底部オサエ・ナデ	やや密(〜1.5mm砂粒含)	並	橙	7／8	
65	011 −02	土師器 皿	SD7 (A)B−6	11.3	−	2.3	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側体部〜外側底部オサエ・ナデ	やや密(〜1.5mm砂粒含)	並	橙	7／8	
66	011 −03	土師器 皿	SD7 (A)B−5	12.2	−	2.2	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ	密 (微砂粒含)	並	橙	完存	
67	011 −05	土師器 皿	SD7 (A)B−5	11.5〜12.0	−	2.0	内側〜外側体部ナデ、外側体部オサエ 外側底部中央に板目状圧痕	やや粗(〜2.0mm砂粒含)	並	橙	完存	
68	011 −06	土師器 皿	SD7 (A)B−5	10.8〜11.4	−	2.1	内側ナデ、外側オサエ	やや密(〜2.0mm砂粒含)	並	浅黄橙	完存	
69	021 −05	土師器 皿	SD7 (A)B−5	11.0〜11.5	−	2.1	内側底部ナデ、体部指手延ばし、外側底部オサエ	粗(〜1.5mm砂粒含)	並	橙	完存	
70	011 −04	土師器 皿	SD7 (A)D−2	12.4〜13.0	−	2.7	内側底部ナデ、口縁部横ナデ、外側体部〜外側底部オサエ・ナデ	やや粗(〜3.0砂粒5mm小石含)	並	淡黄	完存	
71	019 −02	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	22.4	体部21.4	−	内側底部ケズリ 内側体部ナデ内側頸部ケズリ 口縁部横ナデ外側体部上部ハケメ 外側体部下部ケズリ	やや密	並	淡黄	口縁部 1／2	煤付着 4c
72	021 −06	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	23.2	体部21.0	−	内側体部ナデ口縁部横ナデ外側体部ハケメ(4〜7・8本/cm)外側底部ケズリ	やや密(〜1.0mm砂粒含)	並	浅黄橙	口縁部 1／8	煤付着 4c
73	005 −01	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	26.1	体部23.6	−	内側底部ケズリ 内側体部〜外側口縁部ナデ 外側体部ハケメ(7本/cm)外側体部下部ケズリ	やや粗 (〜2mm砂粒含)	並	浅黄橙	口縁部 1／2	煤付着 4c
74	004 −01	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	28.1	体部25.6	−	内側底部オサエ 内側体部下部ケズリ 内側体部〜外側口縁部ナデ 外側体部ハケメ(5本/cm) 外側底部ケズリ	やや粗 (1〜2mm砂粒含)	並	淡黄	口縁部 完存	煤付着 4c
75	020 −01	土師器 鍋	SD7 (A)B−6	29.4	体部30.8	−	内側底部ケズリ 内側体部ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ (6本/cm) 外側底部ケズリ	やや密 (微砂粒)	並	淡黄	口縁部 4／5	煤付着 4b
76	008 −01	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	34.0	体部31.1	−	内側底部ケズリ 内側体部ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ (7〜8本/cm) 外側底部ケズリ	やや粗 (〜1mm砂粒含)	並	淡黄	口縁部 2／5	煤付着 4b
77	007 −01	土師器 鍋	SD7 (A)B−5	32.8	体部31.2	−	内側体部ナデ 口縁部横ナデ 外側口頸部ナデ 外側体部ハケメ (5本/cm) 外側底部ケズリ	やや密	並	浅黄橙 灰黄褐	口縁部 4／5	煤付着 4c
78	055 −01	土師器 鍋	SD7 (A)C−5	12.7	体部18.8	−	内側体部オサエ横ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ(5本/cm) 把手ナデ	密	並	灰白	口縁部 1／4	茶釜形 内側に粘土接合痕
79	012 −07	陶器 卸皿	SD7 (A)B−4	−	6.0	−	底部、糸切痕、外面体部ロクロナデ	密 (微砂粒)	良	灰白	底部 1／2	
80	012 −08	青磁 椀	SD7 (A)C−4	−	高台6.2	−	ロクロケズリ 高台ロクロケズリ、施釉	密 (微砂粒)	良	灰白	1／3	釉：緑灰、蓮弁紋 龍泉窯産
81	012 −09	青磁 椀	SD7 (A)D−3	− −	高台5.4	− −	ロクロケズリ 施釉	密 (微砂粒)	良	灰白	2／5	釉:オリーブ灰、見込み印花紋、龍泉窯産
82	001 −03	瓦質土器 花瓶?	SD7 (A)C−4	−	−	−	両側ナデ、スタンプ紋	密	良	灰		花瓶類の頸部か
83	001 −04	瓦質土器 花瓶?	SD7 (A)C−5	径3.2	−	−	ナデ	密	良	褐灰		脚部か把手部分か
84	002 −01	瓦質土器 火鉢	SD7 (A)D−3	−	−	−	ナデ	密	良	灰		火鉢の上部。線刻紋85と同一個体?

第3表　遺物観察表

A地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
85	002 −02	瓦質土器 火鉢	SD7 (A)D−3	−	−	−	ナデ	密	良	黄灰		火鉢の上部。線刻紋84と同一個体?
86	018 −01	土師器 皿	SK12 (A)E−4	12.7	−	2.5	内側底部ナデ　口縁部横ナデ　外側底部オサエ	やや粗	並	浅黄橙	ほぼ完存	底部に穿孔
87	022 −01	土師器 小皿	SD18 (A)F−5	7.5	−	0.7〜1.6	内側ナデ外側オサエ	密(1mm砂粒含)	良	淡黄	ほぼ完存	
88	022 −02	土師器 小皿	SD18 (A)F−5	7.9	−	1.2	内側ナデ外側オサエ	密(1mm砂粒含)	良	淡黄	完存	歪みあり
89	022 −04	土師器 小皿	SD18 (A)D−5	7.7	−	1.0	内側ナデ外側オサエ	やや密(1mm砂粒含)	並	灰白	3／5	煤付着 歪みあり
90	022 −03	土師器 小皿	SD18 (A)F−5	8.0	−	1.2	内側ナデ外側オサエ	密(1mm砂粒含)	並	灰白	3／5	
91	021 −07	土師器 皿	SD18 (A)F−5	11.5	−	2.3	内側底部ナデ　口縁部横ナデ　外側底部オサエ	やや密(〜2mm砂粒、5mm小石)	並	浅黄橙	完存	
92	018 −05	土師器 皿	SD18 (A)F−5	11.3	−	2.5	内側底部ナデ　口縁部横ナデ　外側底部板目圧痕、外側底部中央ナデ	やや粗（〜1mm砂粒含）	並	淡黄	完存	
93	018 −04	土師器 皿	SD18 (A)C−6	12.4	−	2.4	内側底部ナデ　口縁部横ナデ　外側底部オサエ	やや粗（〜1mm砂粒含）	並	にぶい黄橙	3／4	
94	018 −06	土師器 皿	SD18 (A)C−6	11.9	−	2.8	内側底部ナデ　口縁部横ナデ　外側底部オサエ	やや粗（〜1mm砂粒含）	並	浅黄橙	完存	
95	019 −01	土師器 羽釜	SD18 (A)F−5	30.0前後	鍔径42前後	−	内側体部ナデ　口縁部横ナデ　外側口縁部オサエナデ　鍔部横ナデ　外側体部ハケメ	やや粗（〜1mm砂粒含）	並	灰白	1／10	
96	018 −02	陶器 山茶椀	SD18 (A)C−6	13.7	6.0	5.7	内側底部〜外側体部ロクロナデ　高台貼り付けナデ　糸切痕	やや粗（〜1mm砂粒含）	並	浅黄	ほぼ完存	籾殻痕あり自然釉付着、尾張6
97	022 −05	土師器 皿	SK22 (A)E−1	13.6	−	2.4	内側底部ナデ口縁部横ナデ　外側底部オサエ・ナデ	やや密(2mm小石、5mm小石含)	並	浅黄橙	完存	
98	023 −03	土師器 鍋	SK22 (A)E−1	21.4	体部22.3	−	内側体部ナデ　口縁部横ナデ　外側体部ハケメ（6本/cm）	やや粗（〜2mm砂粒含）	並	浅黄橙	口縁部1／6	煤付着
99	023 −02	土師器 鍋	SK22 (A)E−1	27.6	体部27.4	−	内側体部ナデ　口縁部横ナデ　外側体部上部ハケメ（6本/cm）　外側体部下部ナデ	やや密（〜1.5mm砂粒含）	並	灰白	口縁部1／6	煤付着 4b
100	023 −01	土師器 鍋	SK22 (A)E−1	30.7	体部29.0	−	内側体部ナデ　口縁部横ナデ　外側体部ハケメ（4・5本/cm）	やや粗(〜1.5mm砂粒含)	並	淡黄	口縁部1／3	4a
101	055 −03	青磁 椀	包含層 (A)B−3	−	5.8	−	ロクロナデ　高台ケズリ出し　施釉	密	良	灰白 釉：緑	口縁部1／3	印刻花文

B地区

102	063 −01	土師器 壺	SH66 (B)D−6	9.6	−	18.2	内側底部ナデ　内側　板ナデ・オサエ・ナデ　外側口頸部ナデ　外側体部ナデ・板ナデ・オサエ外側底部ケズリ	粗(〜2mm小石含)	並	にぶい橙	完存	
103	035 −03	土師器 壺	SH66 (B)D−6	−	−	−	内側底部オサエ、外側体部ナデ、外側底部ケズリ	粗(〜2mm小石含)	並	にぶい褐	底部のみ	
104	066 −01	土師器 壺	SH66 (B)D−5	15.5	6.0	−	内側底部ナデ　内側体部工具によるナデ　口頸部横ナデ　外側体部ナデ・ケズリ外側底部ナデ	やや密	並	橙	口頸部1／2	煤が薄く付着
105	029 −02	土師器 丸底壺	SH66 (B)D−5	8.5	−	13.3	内側〜外側体部ナデ　外側底部ケズリ	粗（〜2mm小石含）	並	にぶい橙	完存	
106	029 −03	土師器 丸底壺	SH66 (B)D−5	11.0	−	13.6	口頸部ケズリ後ナデ　内側〜外側体部ナデ　外側底部ケズリ	粗（〜3mm小石含）	並	浅黄橙	完存	
107	043 −03	土師器 小型平底壺	SH66 (B)D−5	6.7	−	−	内側体部ナデ、口縁部横ナデ　外側体部ナデ	やや密	並	灰黄褐	1／2	
108	025 −03	土師器 小型平底壺	SH66 (B)E−6	6.8	6.1	8.1	内側体部指ナデ　内外側口縁部ナデ　外側口頸部オサエ　外側体部ナデ　外側底部ケズリ	粗（〜1mm小石含）	並	にぶい橙	口縁部1／5	
109	025 −04	土師器 小型平底壺	SH66 (B)E−4	7.3	4.5	7.8	内側体部ナデ　内外側口縁部横ナデ　外側体部ナデ	やや粗（〜2mm小石含）	並	浅黄橙	口縁部2／3	
110	062 −03	土師器 小型平底壺	SH66 (B)D−6	10.0	−	−	内側体部ナデ及びオサエ　内外側口縁部ナデ　外側体部ナデ	やや粗（〜3mm小石含）	並	にぶい橙	口縁部1／20	
111	035 −05	土師器 台付甕	SH66 (B)D−5	−	9.4	−	台部工具ナデ　底部ナデ外側台部オサエナデ	粗（〜2mm小石含）	並	橙	台部分のみ完存	

第4表　遺物観察表

B地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
112	058 −01	土師器 台付甕	SH66 (B)E−6	15.3	体部 24.5	−	内側体部ケズリ後ナデ及びオサエ 内側口縁部ナデ 外側口縁部横ナデ 外側体部オサエ及びナデ	粗(〜6mm小石含)	並	にぶい橙	1／3	
113	059 −01	土師器 台付甕	SH66 (B)D−5	17.0	台部 10.9	32.9	内側台部オサエ ナデ 内側体部ナデ 内側肩部オサエ ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ナデ 外側体部下部オサエ ナデ外側台部ナデ	やや粗(〜2mm小石含)	並	橙	口縁部1/2欠く	
114	060 −01	土師器 台付甕	SH66 (B)E−6	15.9	台部 9.5	30.0 推定	台部ナデ 内側肩部ハケメ工具ナデ 口縁部ナデ 外側肩部ハケメ(6本/cm)	やや密	並	にぶい橙	口縁部・台部完存	
115	062 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	21.5	14.0	16.3	内側脚部ケズリ 内外裾部ナデ 外側脚部横ナデ 外側杯部横ナデ 内側杯部ケズリ	粗(〜9mm小石含)	並	橙	ほぼ完存	杯部下部に稜線
116	026 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	20.2	14.5	15.0	内側脚部ケズリ 内側裾部〜外側杯部〜内側杯部ナデ裾端部横ナデ	やや密(〜1mm砂粒含)	並	浅黄橙 灰黄褐	杯部3／4	
117	026 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	16.5	10.8	13.0	内側杯部〜外側〜外側裾部ナデ 内側脚部シボリ(一部ケズリ)裾端部横ナデ	やや密	並	淡黄 浅黄橙	完存	
118	032 −01	土師器 高杯	SH66 (B)E−5	17.7	11.5	12.7	杯部〜内側裾部ナデ 内側脚部シボリ痕	密	良	にぶい橙	1／2	杯部下部に稜線 内外面に煤付着
119	032 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−5	16.0	10.7	13.1	内側杯部〜外側杯底部ナデ 外側脚部面取り風ナデ 裾部横ナデ 内側裾部ナデ 内側局部シボリ 痕	密	良	橙	杯部完存 脚部 1/3	
120	027 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	17.5	11.0	13.6	内側杯部ナデ 杯部体部横ナデ 外側底部〜外側脚部ナデ 外側裾部横ナデ風ナデ 内側脚部ケズリ	やや粗(〜1mm砂粒含)	並	橙	杯部完存 脚部1/3	
121	029 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	15.7	11.0	12.7	ナデ 内側脚部ケズリ	粗(〜4mm小石含)	並	橙	ほぼ完存	
122	062 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−5	15.5	11.5	12.8	内側杯部ケズリ 及びナデ 外側杯部ナデ 外側脚部縦ナデ 裾部ナデ 内側脚部ナデ	粗(〜5mm小石含)	並	黄橙 橙	脚部1／8欠く	
123	027 −01	土師器 高杯	SH66 (B)E−6	14.5	11.1	12.5	内側杯底部ナデ 杯体部横ナデ 外面杯底部〜外側脚部ナデ 裾部横ナデ内側脚部ケズリ	やや粗(1〜2mm砂粒含)	並	黄橙	完存	
124	028 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−5	16.4	10.0 前後	13.0 前後	内側杯底部ナデ 杯体部横ナデ 外側杯底部ナデ 外側脚部面取り風ナデ 裾部横ナデ 内側脚部ケズリ シボリ 痕	やや粗(1〜7mm砂粒含)	並	橙	杯部完存 脚部1／8	
125	025 −01	土師器 高杯	SH66 (B)E−5	16.6	11.1	12.6	内側杯底部ナデ 杯体部横ナデ 外側杯底部ナデ 外側脚部工具ナデ 裾部横ナデ 内側脚部ケズリ	やや密	並	橙	杯部3／4 脚部完存	
126	024 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	17.4	10.8	14.3	口縁部〜外側杯体部横ナデ 外側杯底部〜外側脚部ナデ 裾部横ナデ 内側脚部ケズリ シボリ	やや粗(3m小石粒含)	並	橙	杯部2／3 脚部1／2	三方に透かし
127	067 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−5	22.0	14.0	16.3	杯内側工具アタリ 杯部体部横ナデ外側体部横ナデ 外側脚部ナデ裾部横ナデ内側脚部ナデシボリ	やや密	並	浅黄橙	杯部3／4 脚部完存	
128	025 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−4	15.2	10.6	14.0	内側杯部〜外側脚部ナデ 裾部横ナデ 内側脚部シボリ痕	やや密	並	橙	杯部1／2 脚部2／3	
129	063 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	17.3	11.1	13.0	内側杯部〜外側杯体部ナデ 外側杯体部工具ナデ 外側脚部ナデ 内側脚部ケズリ	やや粗(3mm小石粒含)	並	にぶい橙	完存	
130	031 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	16.5	11.0	13.0	内側杯部〜外側杯体部ナデ 外側脚部ナデ 裾部横ナデ内側脚部シボリ痕 オサエ	やや密	並	浅黄橙	完存	
131	031-01 028-02	土師器 高杯	SH66 (B)E−6	20.6	14.0	16.0	内外側杯部ナデ 口縁端部に強い横ナデ 外側脚部ナデ(板ナデ風) 裾部横ナデ 内側脚部ナデ	やや密	並	橙	杯部ほぼ完存 脚部5/6	
132	030 −01	土師器 高杯	SH66 (B)D−5	16.2	8.8	12.6	杯部ナデ 外側脚部ミガキ 裾部ナデ内側脚部ケズリ	粗(3mm小石粒含)	並	にぶい黄橙	完存	
133	061 −01	土師器 高杯	SH66 (B)E−6	17.1	−	14.4 前後	杯部〜外側脚部ナデ内側脚部ナデ ケズリ	やや密(〜5mm小石粒含)	並	浅黄橙	杯部ほぼ完存 裾部欠く	
134	031 −03	土師器 高杯	SH66 (B)E−6	16.5	11.0	12.8	内側杯部〜外側脚部〜内側裾部横ナデ・ナデ 内側脚部オサエ	やや密(1.5m小石微砂粒含)	並	にぶい黄橙	杯部完存 脚部1／3	
135	030 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	15.0	12.0	12.8	内側杯部〜内側裾部ナデ 内側脚部ケズリ	粗(3mm小石粒含)	並	橙 明黄褐	杯部完存 脚部5／6	
136	024 −02	土師器 高杯	SH66 (B)D−6	15.1	11.8	10.2	内側杯部〜外側杯部ナデ 外側脚部工具ナデ 裾部横ナデ 内側脚部ケズリ	やや密(〜4mm小石粒含)	並	橙	ほぼ完存	
137	035 −06	土師器 高杯	SH66 (B)E−4	−	10.8	−	内側杯部ナデ 外側杯部ナデ 外側杯底部ナデオサエ 外側脚部縦ナデ 裾部横ナデ 内側脚部ケズリ	やや密(〜2mm小石粒含)	並	浅黄橙 にぶい	脚部1／3	
138	076 −02	土師器高杯 (杯)	SH66 (B)D−5	21.0	−	−	ナデ	粗	並	淡赤褐	1／6	
139	037 −01	土師器高杯 (杯)	SH66 (B)D−5	21.0	−	−	内外側ナデ	やや粗(1〜2mm小石含)	並	橙	1／6	

第5表 遺物観察表

B地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
140	039 −01	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	15.2	−	−	内外側ナデ	密	並	橙	1／4	粘土接合痕有り
141	034 −01	土師器高杯(杯)	SH66 (B)E−6	21.6	−	−	内外側ナデ	やや密(～1cm石含)	並	黄橙 橙	2／3	
142	061 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−5	18.7	−	−	内外側ナデ	やや密	並	にぶい橙	杯部完存	
143	035 −04	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	16.3	−	−	内外側体部横ナデ　外側底部オサエ　体部:杯部を手延ばしして成形後横ナデ	やや粗(～3mm砂粒含)	並	橙	杯部完存	
144	035 −01	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	17.7	−	−	内側底部ナデ　口唇部横ナデ　外側底部オサエ	やや粗(～3mm砂粒含)	並	浅黄橙	杯部　ほぼ完存	
145	034 −04	土師器高杯(杯)	SH66 (B)E−5	17.2	−	−	外側ナデ	やや密(～6mm石粒含)	並	橙	7／8	胎土に雲母多。
146	034 −05	土師器高杯(杯)	SH66 (B)E−6	16.7	−	−	内側体部ナデ　外側体部横ナデ　外側底部オサエ後ナデ	やや密	並	橙	1／2	
147	034 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)E−6	16.6	−	−	内外側ナデ	やや密	並	浅黄橙	1／2	胎土に雲母多。
148	035 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	15.9	−	−	内側底部ナデ　内外側体部横ナデ	やや粗(～2mm砂粒含)	並	にぶい橙	杯部完存	
149	033 −01	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	16.3	−	−	内側体部工具によるナデ　外側体部ナデ　内側に板アタリ痕あり	やや密	良	にぶい橙	杯部完存	外面煤付着
150	033 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	17.7	−	−	内外側ナデ	密	並	にぶい黄橙	杯部完存	粘土接合痕あり 外面煤付着
151	037 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	16.8	−	−	内外側ナデ	やや粗(1～3mm砂粒含)	並	橙	3／8	
152	039 −03	土師器高杯(杯)	SH66 (B)F−5	15.0	−	−	ナデ	やや密	並	にぶい黄橙	1／4	
153	039 −02	土師器高杯(杯)	SH66 (B)E−5	15.7	−	−	ナデ	やや密(～1mm小石砂粒含)	並	橙	1／4	
154	034 −03	土師器高杯(杯)	SH66 (B)D−6	15.4	−	−	ナデ	やや密	並	黄橙	杯部　完存	
155	037 −04	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−6	−	−	−	外側ナデ　内側ケズリ	やや粗	並	にぶい橙	脚部2／3	
156	038 −02	土師器高杯(脚)	SH66 (B)F−5	−	9.9	−	外側工具によるナデ・粗い面取り裾部ナデ　内側ケズリ	やや粗	並	淡黄	脚部1／4	
157	038 −01	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−5	−	14.0	−	外側ナデ　内側ケズリ	やや粗	並	橙	脚部1／6	
158	031 −04	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−5	−	14.0	−	外側ナデ　裾部ナデ　内側シボリ	やや密	並	浅黄橙	脚部3／4	
159	038 −03	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−6	−	11.4	−	外側工具によるナデ(面取り)裾部ナデ内側ケズリ	やや粗	並	にぶい黄橙	脚部完存	
160	037 −03	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−6	−	11.6	−	外側ナデ　裾部ナデ内側シボリ痕	やや粗(1～4mm小石含)	並	橙 灰褐	脚部2／3	
161	038 −04	土師器高杯(脚)	SH66 (B)D−5	−	−	−	外側ナデ　内側シボリ痕	やや粗	並	にぶい橙	脚部3／4	
162	054 −01	須恵器 甕	SD64 (B)E−5	44.0	−	−	内側肩部タタキ口縁部ナデ外側口縁部にタタキ痕あり	粗(～2mm小石含)	良	オリーブ灰	1／8	
163	071 −02	土師器 皿	SA51 (B)B−2	17.0	−	2.5	内面底部ナデ　体部横ナデ　外側底部ケズリ・ナデ	やや密	並	橙	1／4存	
164	071 −01	土師器 皿	SA51 (B)B−2	18.5	−	2.5	外側体部ナデ　外側底部ケズリ　内側風化のためミガキ・暗文等不明	やや密	並	橙	2／3	
165	040 −01	灰釉陶器 皿	SA51 (B)B−2	14.0	7.0	2.3	ロクロケズリ　底部にヘラ切痕施釉・内側は2度かけ	密	良	灰白	1／2	
166	040 −02	灰釉陶器 転用硯?	SA51 (B)B−2	−	7.3	1.7	削り出し高台糸切痕	密	良	灰白	完存	椀の2次加工品?
167	039 −04	製塩土器	SA51 (B)B−2	20.0	20.0	6.4	内側体部ナデ内外側上部横ナデ外側体部ナデオサエ外側底部横ナデ	やや密(～1mm小石砂粒多)	並	橙	1／10	

第6表　遺物観察表

B地区

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
168	039 －05	製塩土器	SA51 (B)B－2	22.0	21.0	6.2	内側体部ナデ内外側上部横ナデ外側体部ナデ オサエ外側底部横ナデ	やや密（～1mm砂粒多）	並	橙	1／5	
169	039 －06	製塩土器	SA51 (B)B－2	16.5	18.0	6.0	内外側体部ナデオサエ外側体部下部ケズリ外側底部ナデ	やや密(～1mm小石砂粒多)	並	灰褐 橙	1／6	
170	054 －03	緑釉陶器 椀	SD64 (B)E－5	－	7.8	－	内側ロクロナデ後施釉　外側ロクロナデ 貼り付け高台糸切痕	やや密	良	灰	1／10	釉：明緑灰
171	045 －01	軒平瓦	SD64 (B)F－5	－	－	－	凹面ナデ　凸面ケズリ					均整唐草文
172	046 －01	平瓦	SD64 (B)F－6	－	－	－	縄タタキ					
173	043 －04	砥石	SK52 (B)B－5	－	－	厚さ 1.5						
174	042 －04	土師器 皿	SD56 (B)E－3	8.6	－	2.3	ナデ及びオサエ	粗（～1mm小石含）	並	外灰白 内淡黄	完存	
175	042 －05	土師器 皿	SD56 (B)B－3	10.0	－	2.2	ナデ	粗（～1mm小石含）	並	外灰白 内淡黄	1／3	
176	042 －06	土師器 皿	SD56 (B)B－3	10.0	－	2.1	内外面ナデ及びオサエ	やや粗（～5mm小石含）	やや不良	淡黄	1／2	
177	041 －03	土師器 皿	SD56 (B)B－3	16.0	－	3.8	ナデ	やや粗（～1mm小石含）	並	淡黄	3／8	
178	042 －02	土師器 鍋	SD56 (B)C－3	20.0	体部 19.5	－	内側底部ケズリ 内側体部～外側口縁部ナデ　外側体部上部ハケメ(5本/cm)　外側体部下部ケズリ	やや粗（～1mm小石含）	並	浅黄橙	1／3	3b
179	042 －01	陶器 平椀	SD56 (B)C－3	19.7	－	－	ロクロナデ後施釉外側体部下部ケズリ	やや密	並	淡黄 オリーブ黄	1／3	内側に重ね焼の痕あり
180	041 －05	陶器 直縁大皿	SD56 (B)A－3	－	－	－	ロクロナデ後施釉	やや粗（～2mm小石含）	やや良	灰白	1／10	足がつく 釉：灰オリーブ
181	041 －04	陶器 山茶椀	SD56 (B)A－3	－	6.0	－	ロクロナデ貼り付け高台ナデ糸切痕	やや密	並	灰白	13／16	渥美6
182	042 －03	陶器 山茶椀	SD56 (B)E－3	－	6.0	－	ナデ　貼り付け高台	やや粗（～3mm小石含）	良	灰白	3／4	糸切痕 尾張6
183	041 －01	陶器 壺	SD56 (B)D－3	21.0	－	－	ロクロナデ後施釉	やや密	良	灰 灰白	1／3	
184	041 －02	陶器 天目茶碗	SD56 (B)C－3	12.2	3.1	6.8	ロクロナデ施釉削り出し高台	やや密	良	灰白	1／2	釉：灰褐
185	044 －01	瓦質土器 風炉	SD56 (B)C3D3	－	体部 約40	－	ナデ	密	並	灰	口縁部 1/2 脚部 1/6	花菱紋スタンプ
186	043 －05	土錘	SD56 (B)D－4	径 1.4	穴径 0.4	長さ 4.1		密	並	橙	完存	5.75g
187	053 －02	銅鏡	SD56 (B)D－3	径 6.5	－	－						腐食大 双鳥草花鏡か
188	054 －02	土師器 小皿	SK59 (B)D－5	7.7	－	1.0	ナデ	粗（～2mm小石含）	並	灰白	完存	歪みあり
189	043 －02	青磁 椀	SD64 (B)F－5	－	5.9	－	ロクロナデ後施釉削り出し高台外側底部ケズリ	密	並	灰白	底部完存	
190	043 －01	陶器 山茶椀	SD64 (B)E－4	15.2	7.1	5.6	ロクロナデ　高台貼り付けナデ糸切痕	やや粗（～8mm石含）	並	灰白	1／3	尾張6
191	054 －04	土錘	SD64 (B)E－4	径 1.3	穴径 0.4	長さ 5.0		粗（～1mm小石含）	やや不良	にぶい 黄橙	ほぼ完存	
249	076 －01	灰釉陶器 転用硯?	SA51 (B)B－2	7.8 ～9.2	7.2	1.5	側面未調整	密	良	灰白色	完存	166と同様 未完成品?

C地区

192	052 －08	縄文土器	SK78下層 (C)H－1	－	－	－	内側ナデ　縄文篦描の横位沈線 外側ナデ無紋	やや粗）	並	にぶい 黄橙		後期
193	052 －09	縄文土器	SK78下層 (C)H－1	－	3.4	－	ナデ	やや粗(4mm小石,2mm小石含)	並	にぶい 橙		後期 平底片

第7表　遺物観察表

C地区

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
194	052 −07	縄文土器	SD88下層 (C)V−2	−	−	−	内側ナデ 外側ナデ 篦描の横位沈線無紋	やや密(微砂粒含)	並	灰黄褐		後期
195	052 −06	縄文土器	SK91下層 (C)K−1	−	−	−	内側ナデ 外側ナデ 縄文篦描の横位沈線	やや粗(1.5mm小石、細砂粒	並	褐灰		後期
196	051 −06	土師器 小皿	SK73 (C)D−2	7.2	−	1.1	内側ナデ 外側オサエ	やや粗(〜1.2mm小石含)	並	灰白	完存	
197	051 −07	土師器 小皿	SK73 (C)D−2	6.7〜7.7	−	1.4	内側ナデ 外側オサエ	やや粗(〜1.2mm小石含)	並	灰白	完存	
198	050 −03	土師器 皿	SK73 (C)D−2	11.3	−	2.5	内側〜外側体部ナデ 外側底部オサエ	やや粗(微粒)	並	灰白	3／4	
199	051 −01	土師器 皿	SK73 (C)D−2	11.5	−	2.7	内側〜外側体部ナデ 外側底部オサエ	やや粗	並	灰白	1／2	
200	051 −02	土師器 皿	SK73 (C)D−2	11.7	−	2.6	内側〜外側体部ナデ 外側底部オサエ 外側底部に工具痕	やや粗	並	灰白	5／8	
201	075 −01	土師器 鍋	SK73 (C)D−2	26.0	体部24.3	−	内側底部ケズリ 内側体部ナデ 内側口頸部ハケ 内側口縁部工具ナデ 口唇部〜外側口頸部ナデ 外側体部ハケ 外側底部ケズリ	粗(〜2.5mm小石含)	並	浅黄橙	1／2	3a
202	074 −01	土師器 鍋	SK73 (C)D−2	32.0	体部31.4	−	内側ケズリ 内側体部〜外側口頸部ナデ 外側体部ハケ 外側底部ケズリ	粗(〜1mm小石含)	並	灰黄褐	5／8	3a
203	050 −01	陶器 壺	SK73 (C)D−2	−	体部19.4	−	ロクロナデ外側肩部・体部に沈線	やや粗(1〜2mm小石含)	並	灰白	体部1／2	三筋壺
204	050 −02	瓦質土器 片口鉢	SK73 (C)D−2	15.0	6.5	5.4	内側ナデ外側オサエ暗紋	やや粗(微粒)	並	灰白	1／2	
205	053 −03	鉄製品 刀	SK73 (C)D−1	−	−	−						
206	051 −04	土師器 小皿	SK75 (C)F−1	7.8	−	1.2	内側ナデ 外側オサエ	やや粗(1〜2mm小石含)	並	灰白	ほぼ完存	
207	051 −05	土師器 小皿	SK75 (C)F−1	8.0	−	1.1	内側ナデ 外側オサエ	やや粗(微砂粒)	並	灰白	完存	
208	051 −03	土師器 小皿	SK75 (C)F−1	7.8	−	1.5	内側ナデ 外側オサエ外側底部に工具痕	やや粗(微砂粒)	並	灰白	3／4	
209	050 −04	土師器 皿	SK75 (C)F−1	11.0	−	2.4	内側〜外側体部ナデ 外側底部オサエ	やや粗(微砂粒)	並	灰白	3／8	
210	065 −01	土師器 鍋	SK75 (C)F−1	20.2	体部21.5	−	内側体部ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ(7本/cm)外側底部ケズリ	粗(〜1.5mm砂粒多く含)	並	灰白 淡黄	1／2	2
211	065 −02	土師器 鍋	SK75 (C)F−1	21.5	体部21.5	−	内側体部ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ(7本/cm) 外側底部ケズリ	粗(〜1.5mm砂粒含)	並	褐灰	1／3	2
212	051 −08	土錘	SK77 (C)G−2	径3.5	穴径1.1	長さ5.5		やや粗(1〜2mm小石含)	並	灰白	完存	
213	069 −02	陶器 壺	SK78 (C)H−1	16.8	−		口縁部ロクロナデ	やや粗(1〜2mm小石含)	並	淡黄	1／2	
214	053 −05	鉄製品 釘	SK78 (C)H−1	−	−	−						
215	053 −07	鉄製品 釘	SK84 (C)H−2	−	−	−						
216	052 −01	土師器 皿	SK85 (C)K−1	11.2	−	2.7	ナデ	やや密	並	灰白	完存	
217	052 −02	土師器 皿	SK85 (C)K−2	11.5	−	2.4	内側底部ナデ 体部横ナデ 外側底部オサエ・ナデ指オサエ・ナデで成形	やや密	並	灰白	完存	
218	068 −01	土師器 鍋	SK85 (C)M−2	32.1	体部29.4	−	内側底部ケズリ 内側体部〜外側口縁部ナデ 外側体部ハケメ(5本/cm) 外側底部ケズリ	やや粗(1〜3mm小石含)	並	浅黄橙	1／4	4c
219	069 −01	土師器 羽釜	SK85 (C)M−2	26.4	鍔径31.3	−	内側底部ケズリ 内側体部〜鍔部ナデ 外側体部(4本/cm)	やや粗(1〜3mm小石含)	並	浅黄橙	1／3	
220	052 −05	陶器 山皿	SK94 (C)F−1	8.0	4.5	1.9	ロクロナデ糸切痕	密	良	灰白	1／2	朱皿、内側磨滅 尾張6
221	073 −01	陶器 甕	SK94 (C)F−1	43.0	−	−	内側ナデ・オサエ 口縁部ロクロナデ 肩部ナナメ方向ハケメ(4本/cm)外側体部ロクロナデ	やや密	良	灰	1／4	

第8表 遺物観察表

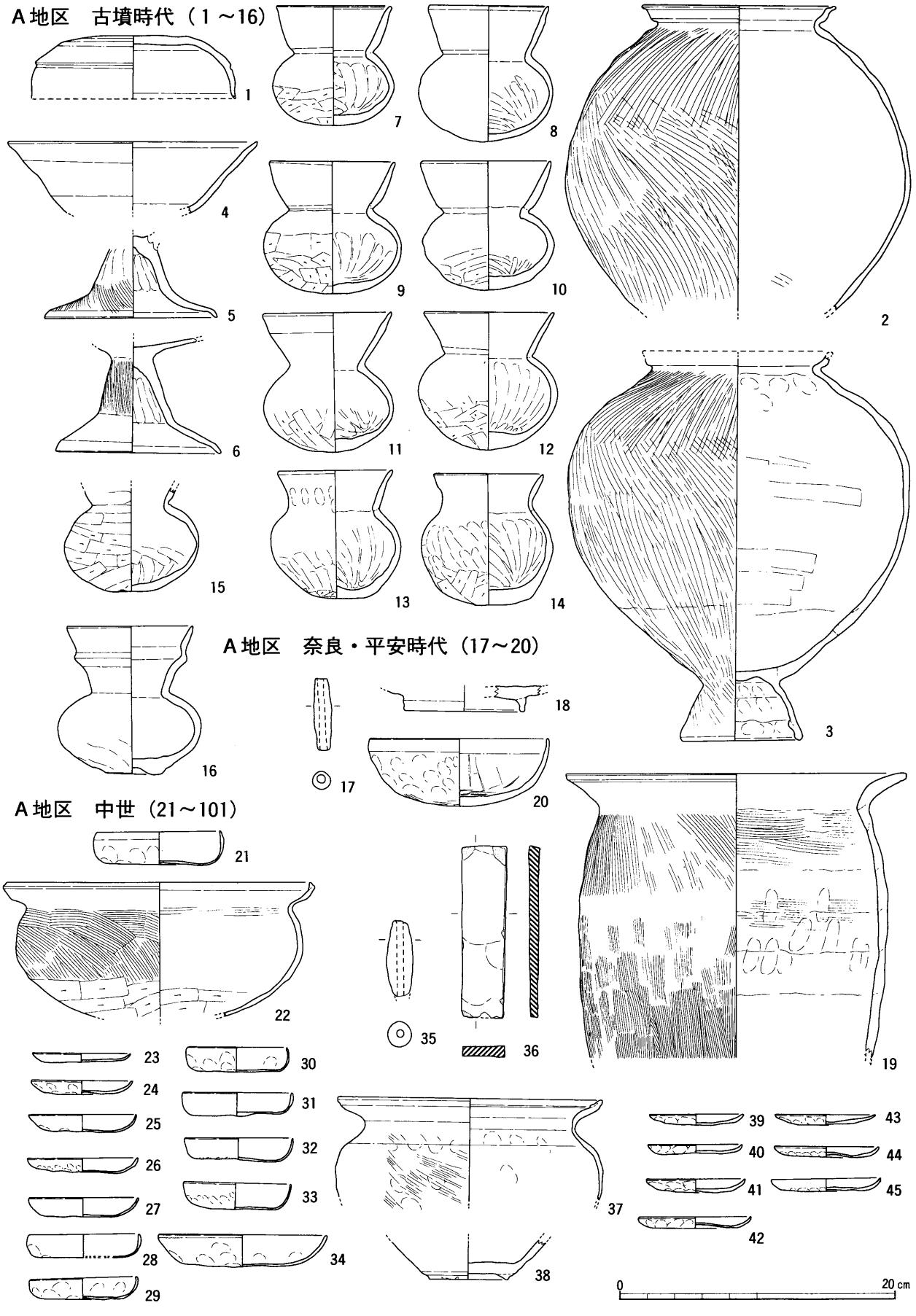
C地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
222	053 −01	銅銭	SK94 (C)G−1	−	−	−					完存	皇宋通寶
223	052 −03	土師器 皿	SK98 (C)E−1	11.3	−	2.5	内側ナデ・オサエ 口縁部ナデ 外側底部ナデ・オサエ	やや密	並	淡黄	3／4	
224	052 −04	陶器 山皿	SK98 (C)E−1	7.8	−	1.6	ロクロナデ糸切痕	密（微砂粒）	良	灰白	完存	口唇部に自然釉 常滑7

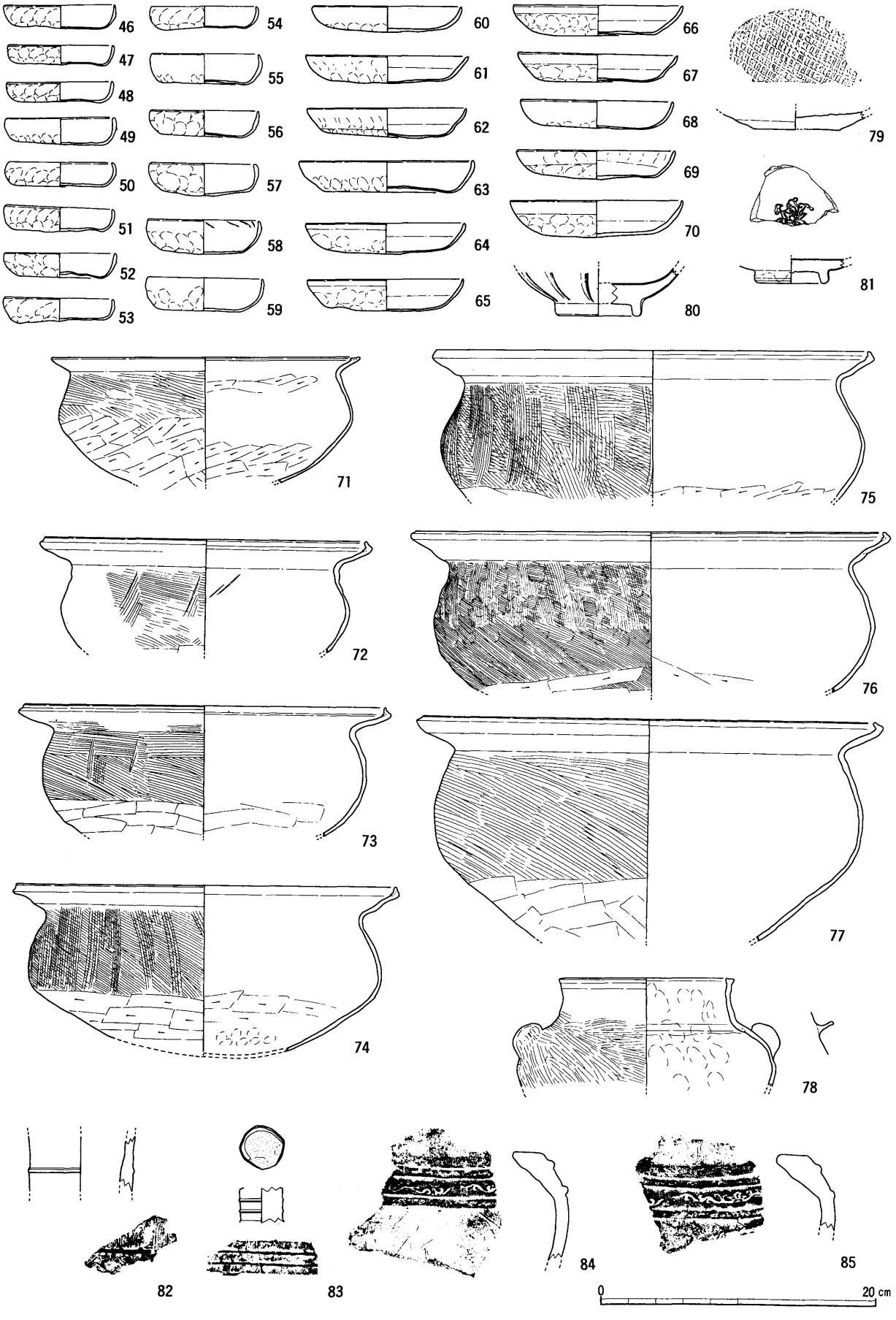
D・E地区

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
225	072 −01	土師器 壺	SK48 (E)B−2	16.0	5.6	26.0	内側ナデオサエ 口縁部横ナデ 外側体部ナデオサエ（板ナデ）底部未調整	粗(1,2mmの砂粒含)	並	明黄褐 にぶい	1／3	外側に煤付着
226	047 −02	土師器 高杯（杯）	SK48 (E)B−2	17.5	−	−	内側～口唇部横ナデ 外側体部オサエナデ外側底部オサエ脚部ナデ	やや密(1mmの砂粒)	並	橙	1／3	
227	047 −01	土師器 甕	SK48 (E)B−2	16.6	−	−	内側ナデ 内側肩部に工具痕 口頸部横ナデ 外側口頸部タタキ外側肩部に沈線(1本で螺旋を描く)	粗(～3mm砂粒含)	並	灰色	1／3	韓式系土器
228	049 −01	土錘	SK48 (E)B−2	径 1.0	穴径 0.4	長さ 5.2		やや粗(～1mm砂粒含)	並	黄橙	ほぼ完存	
229	049 −06	土錘	SK48 (E)B−2	径 1.8	穴径 0.3	長さ 5.6		やや粗(～1mm砂粒含)	並	明赤橙	ほぼ完存	
230	064 −01	土師器 台付甕	SK68 (E)B−2	12.6	7.7	23.1	内側ナデ 口縁部横ナデ 外側体部ハケメ(5.6本/cm) 外側体部中央部ケズリ 裾部ナデ 台内側ケズリ 底部未調整粒含)	粗(～2mm砂粒含)	並	橙	ほぼ完存	体部18.1cm、体部に穿孔（焼成後）
231	070 −01	土師器 高杯	SK68 (E)B−2	20.8	15.5	14.5	ナデ脚部内側ケズリ	やや密（微砂粒）	並	浅黄橙	杯部1／3 脚部4／5	
232	049 −09	土師器 小型丸底壺	SK69 (E)B−2	6.8	−	8.5	口縁部横ナデ 外側体部ナデ 外側底部ヘラケズリ	やや粗（～1mm砂粒含）	並	淡黄	ほぼ完存	
233	047 −04	須恵器 杯蓋	包含層 (E)B−2	13.8	−	−	ロクロナデ	やや密（～1mm砂粒含）	良	灰色	1／4	
234	048 −01	ロクロ土師器 皿	SD27 (E)C−2	9.4	5.2	1.8	内側底部ナデ 内外側体部横ナデ 糸切痕	やや粗(1mm砂粒少量含)	並	浅黄橙	2／3	
235	047 −03	土師器 椀	SD27 (E)D−2	11.9	−	5.1	内側ナデ口唇部横ナデ外側体部上部オサエ 外側体部下部ケズリ外側底部ナデ	やや粗(1mm砂粒含)	並	にぶい橙	7／8	
236	070 −02	土師器 椀	SD27 (E)E−2	12.0	−	−	ナデ	やや粗（微砂粒）	並	にぶい橙	7／8 底部欠く	
237	048 −02	須恵器 椀	SD27 (E)D−2	17.0 前後	8.0 前後	6.2	ロクロナデ貼り付け高台ナデ	やや密	良	灰	口縁部 1/8 底部1/3	
238	048 −06	ロクロ土師器 椀	包含層 (E)D−2	17.0	7.0	5.2	ロクロナデ 貼り付け高台ナデ糸切痕	やや粗(1～3mm砂粒含)	良	灰白	口縁部1/16 高台1/2	
239	048 −03	ロクロ土師器 椀	包含層 (E)Q−2	−	7.0	−	ロクロナデ 貼り付け高台ナデ糸切痕	やや粗(～1mm砂粒含)	並	浅黄橙	高台完存	
240	049 −05	土錘	包含層 (E)Q−2	径 2.4	穴径 0.5	長さ 6.0		粗（1～2m砂粒含）	並	橙	ほぼ完存	32.6g
241	049 −07	土錘	包含層 (E)D−2	径 1.1	穴径 0.3	長さ 2.9		やや密	並	黄橙	ほぼ完存	4.9g
242	049 −08	土錘	包含層 (E)Q−2	径 1.3	穴径 0.3	長さ 6.3		粗（1～2m砂粒含）	並	黒	ほぼ完存	8.5g
243	049 −03	土錘	包含層 (E)D−2	径 1.0	穴径 0.4	長さ 5.4		粗（1mm砂含）	並	浅黄橙	ほぼ完存	6.5g
244	049 −04	土錘	包含層 (E)D−2	径 1.2	穴径 0.4	長さ 5.5		やや粗	並	にぶい黄橙	ほぼ完存	7.3g
245	047 −05	陶器 山茶椀	SD27 (E)E−2	−	8.6	−	ロクロナデ 貼り付け高台後ナデ 糸切痕	やや粗(2mm砂粒含)	良	灰白	高台完存	渥美6
246	048 −05	陶器 山茶椀	SK29 (E)D−2	17.0	9.0	5.2	ロクロナデ 貼り付け高台後ナデ 糸切痕	やや粗(1mm砂粒含)	良	灰白	口縁部 1/6 高台1/2	渥美6 籾殻痕
247	049 −02	土錘	SK29 (E)D−2	径 1.8	穴径 0.5	長さ 6.6		やや粗(1mm砂粒含)	並	浅黄橙	ほぼ完存	
248	048 −04	陶器 山茶椀	包含層 (D)A−11	−	7.8	−	ロクロナデ 貼り付け高台後ナデ 糸切痕	やや粗(2mm砂粒含)	良	灰白	高台完存	

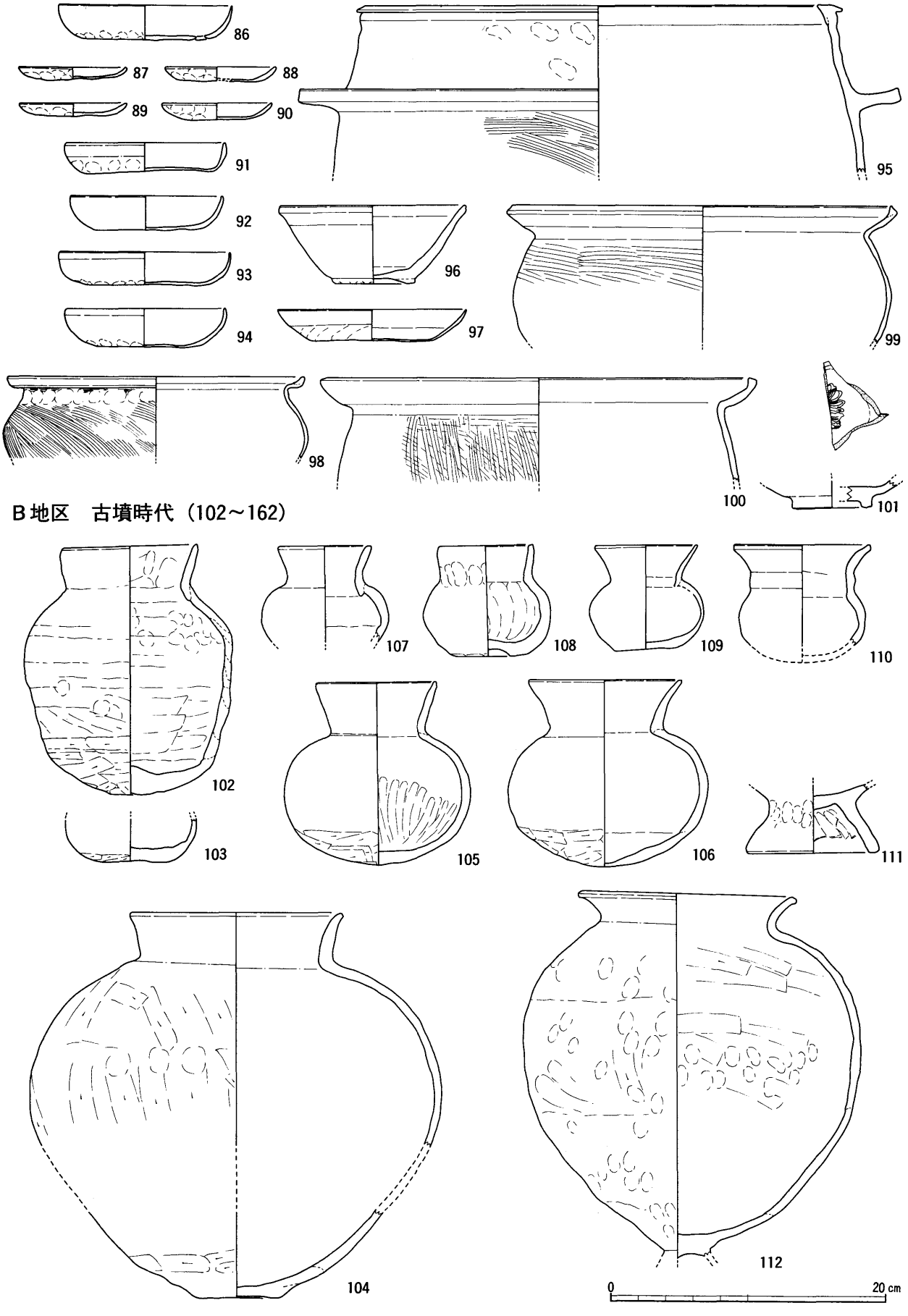
第9表 遺物観察表



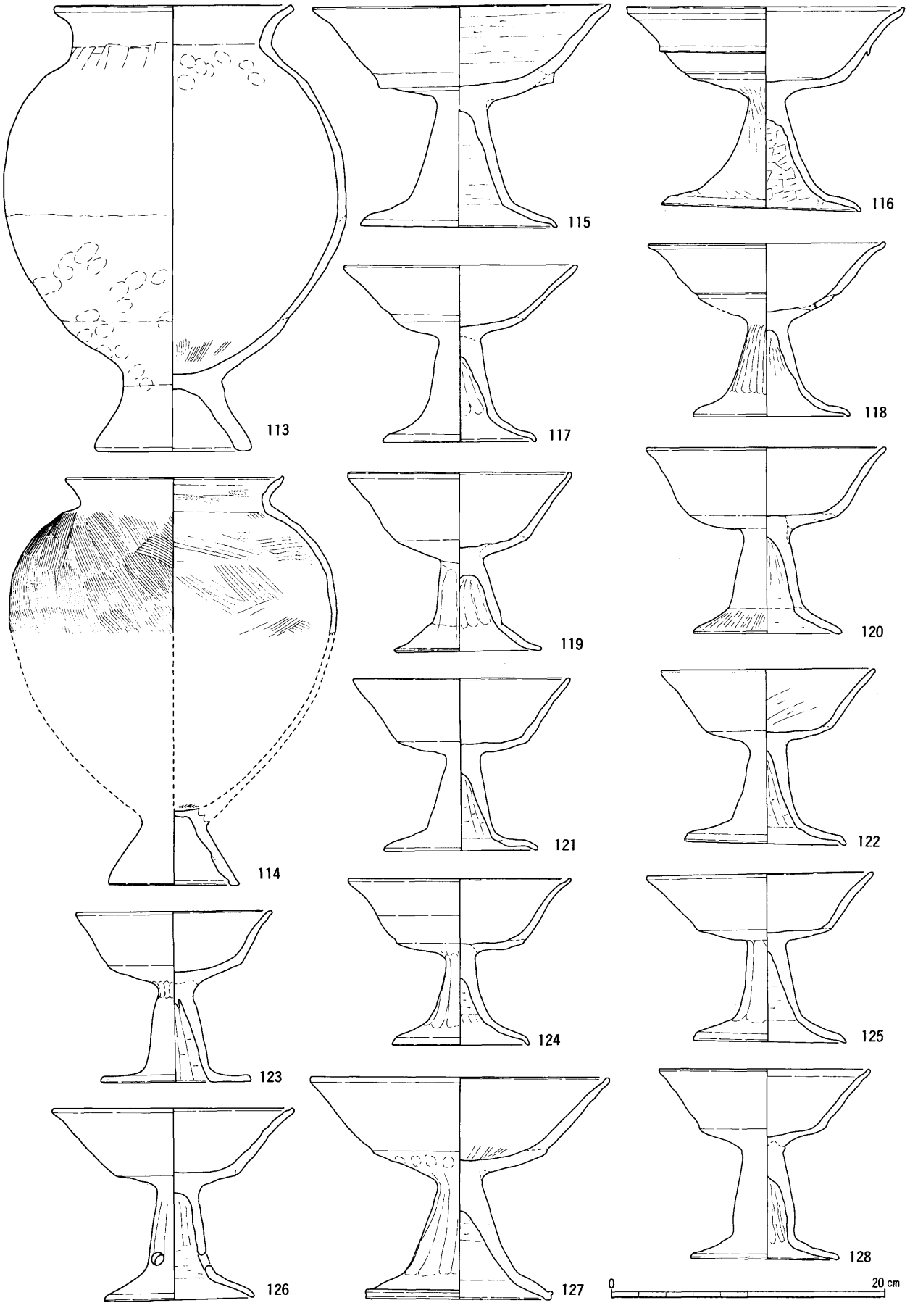
第28図　遺物実測図（1:4）SK13(1),SH15(2～15),D7Pit1(16)／SK2(17),SK5(18),SK14(19),包含層(20)／SD1(21・22),SK3(23～36),SD6(37・38),SD7(39～45)



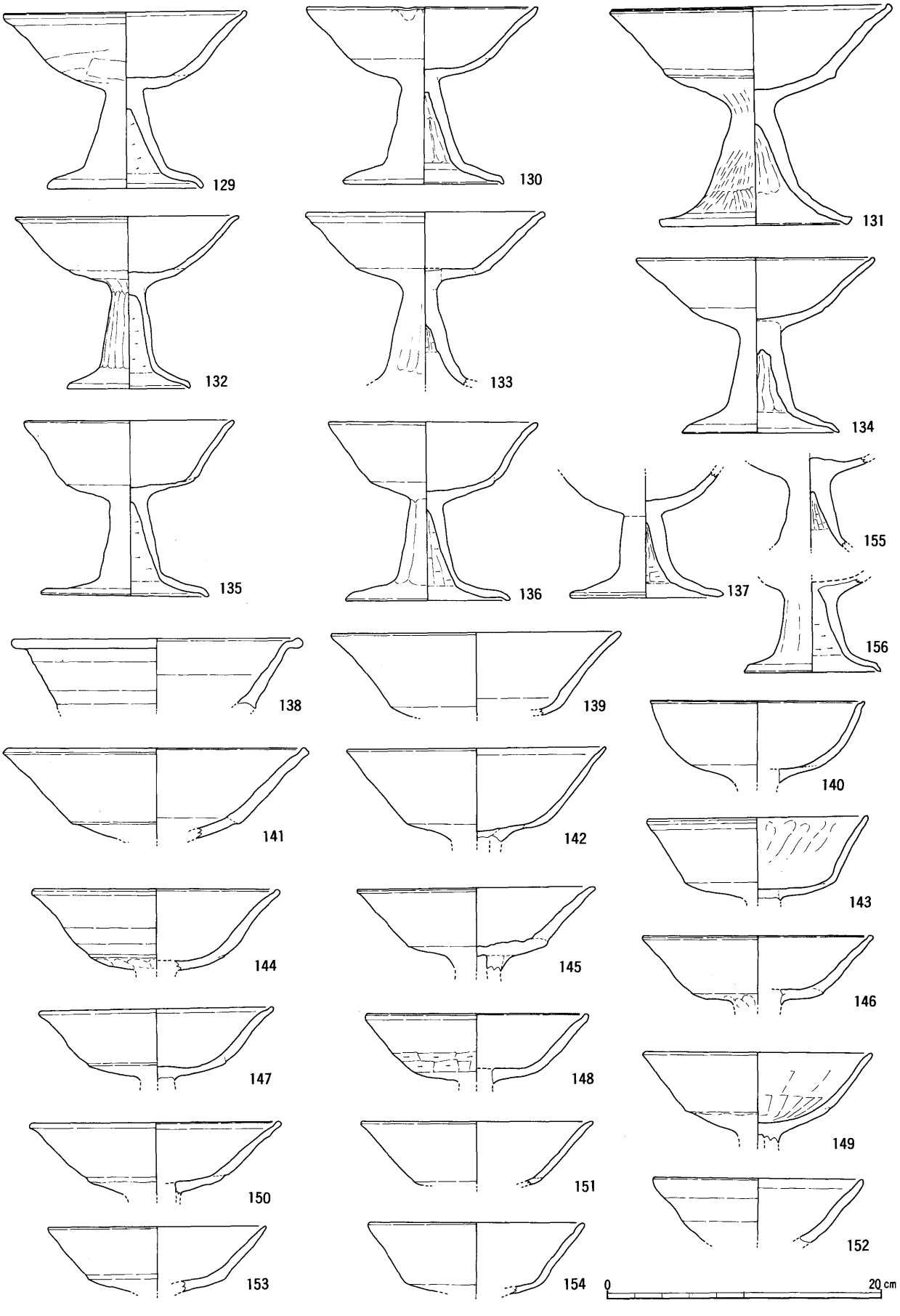
第29図　遺物実測図（1:4）SD7(46～85)



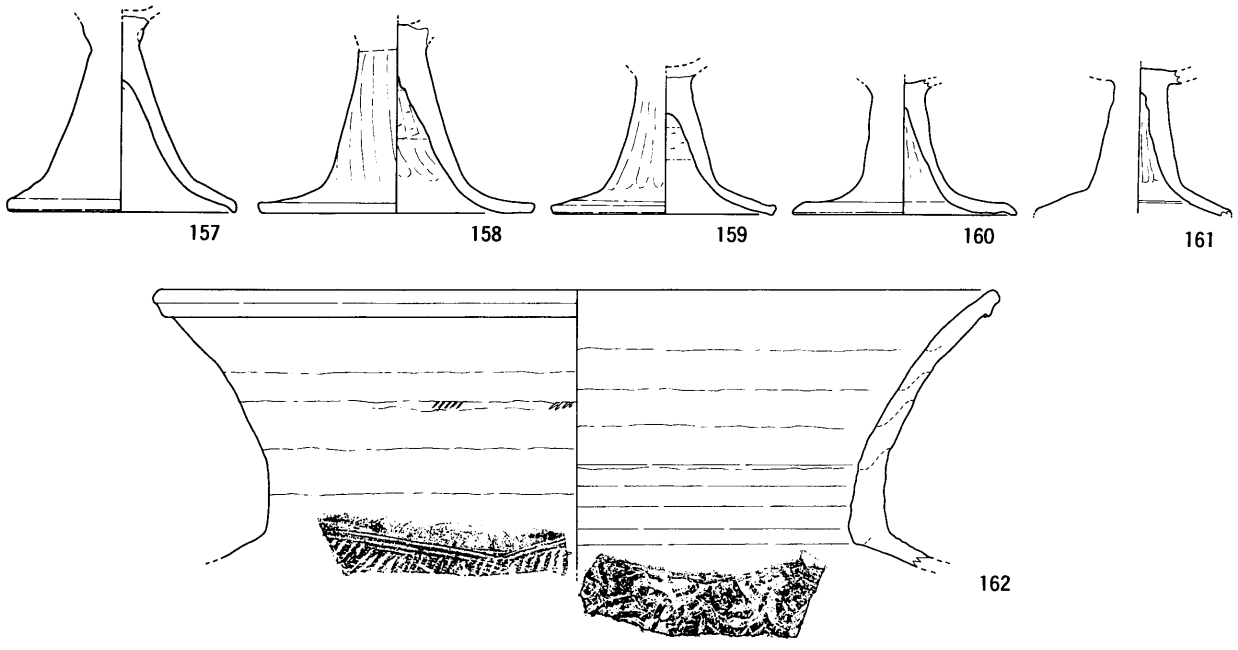
第30図　遺物実測図（1:4）SK12(86),SD18(87～96),SK22(97～100),包含層(101)／SH66(102～112)



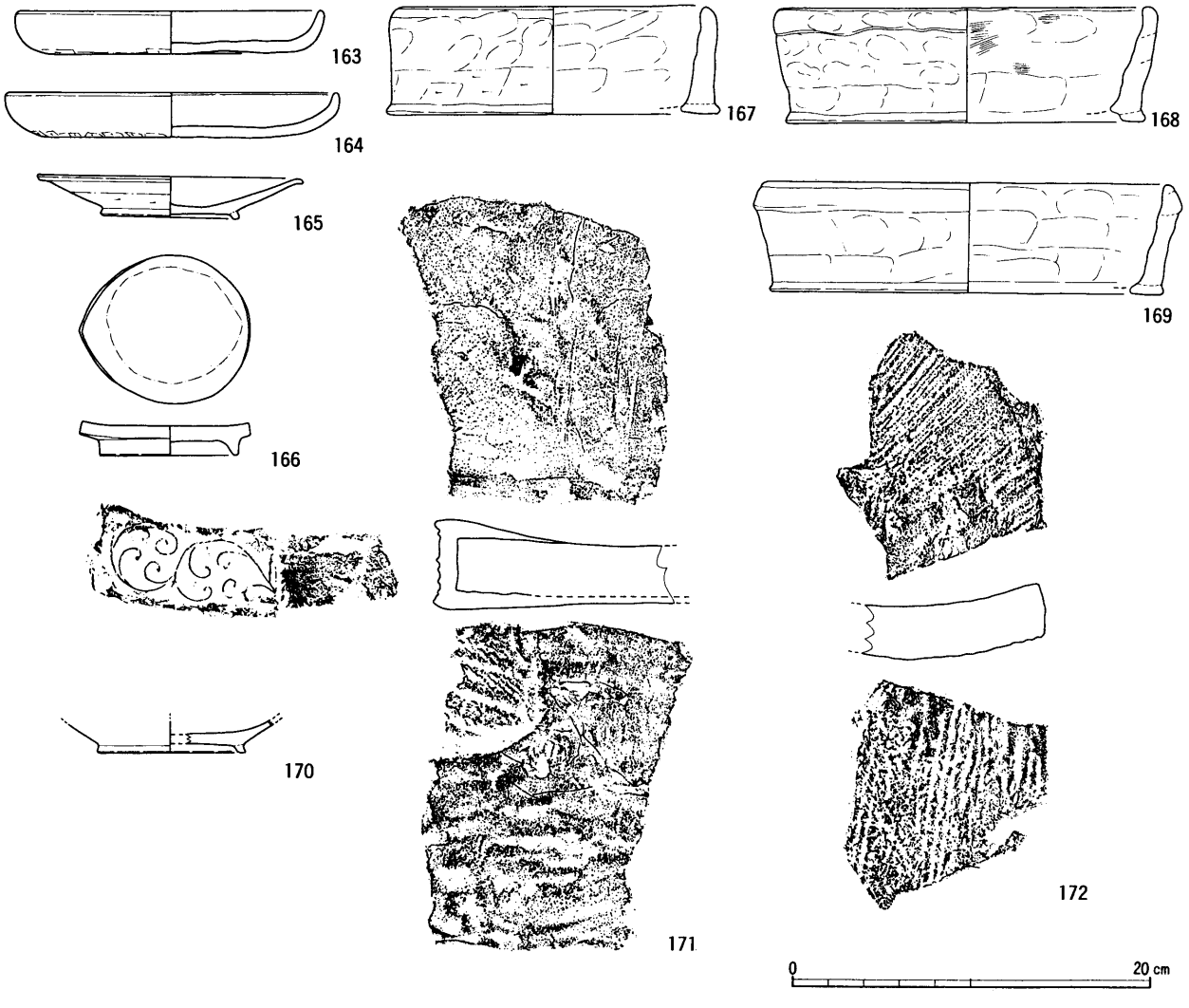
第31図　遺物実測図（1:4）SH66(113～128)



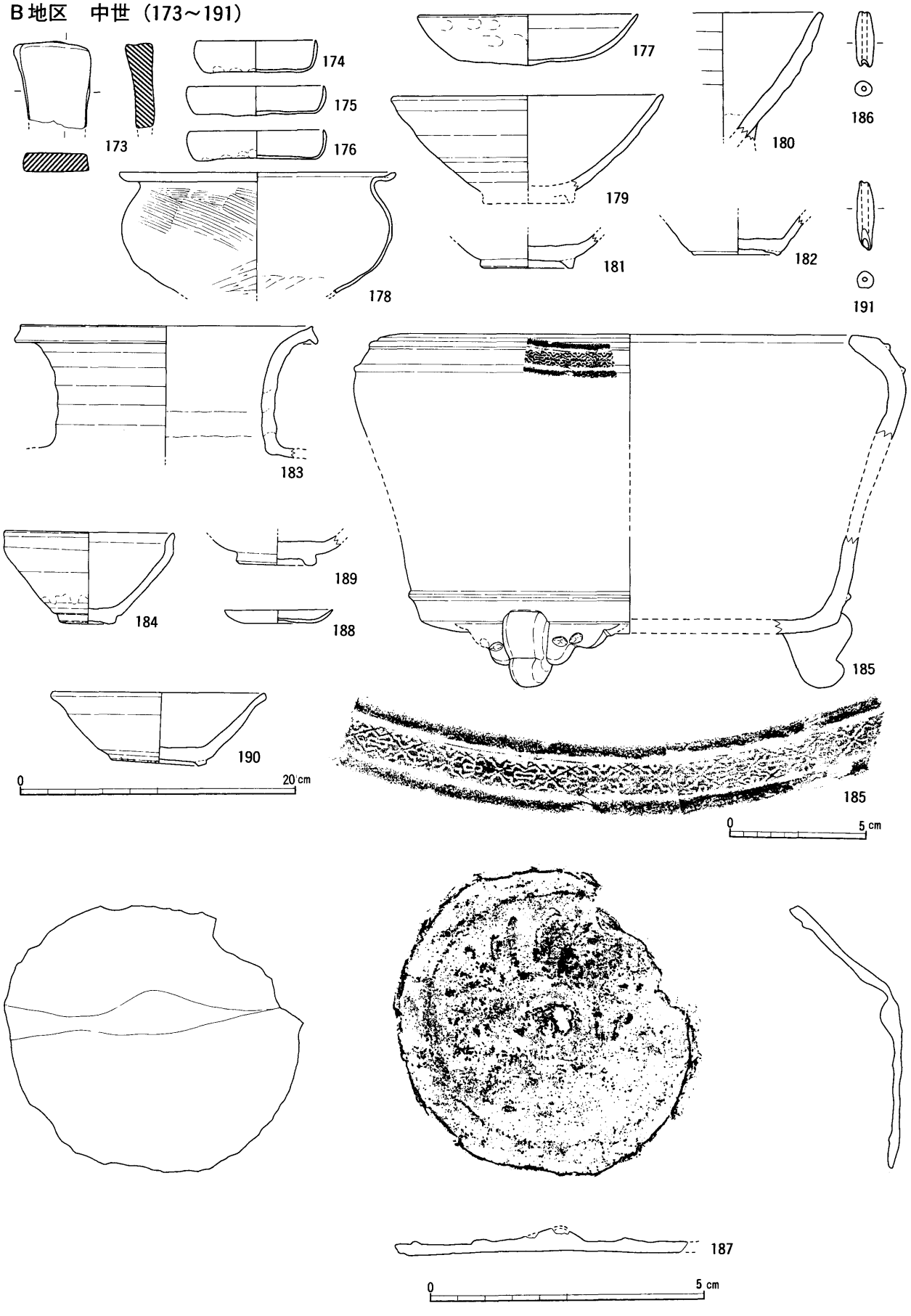
第32図　遺物実測図（1:4）SH66(129～156)



B地区　奈良・平安時代（163～172）

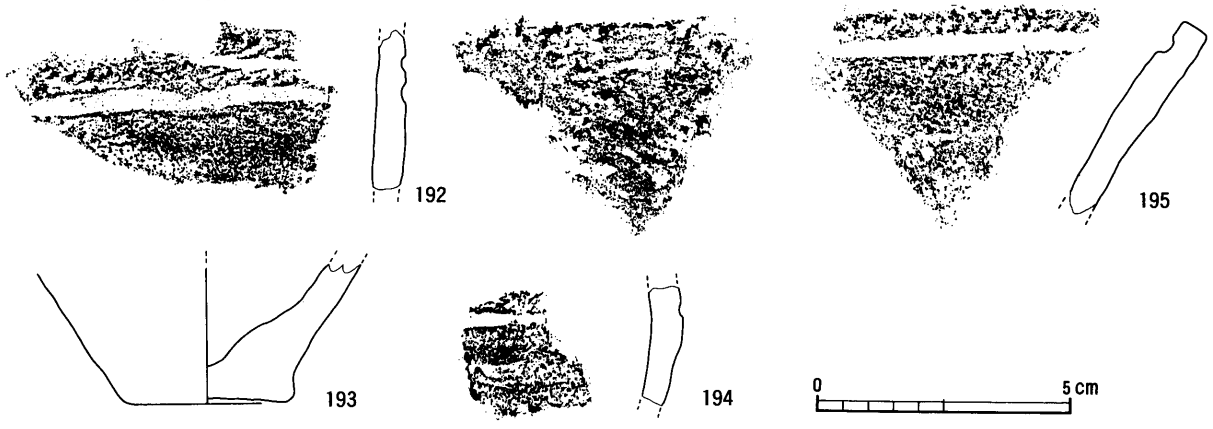


第33図　遺物実測図（1:4）SH66(157～161),SD64(162)／SA51(163～169),SD64(170～172)

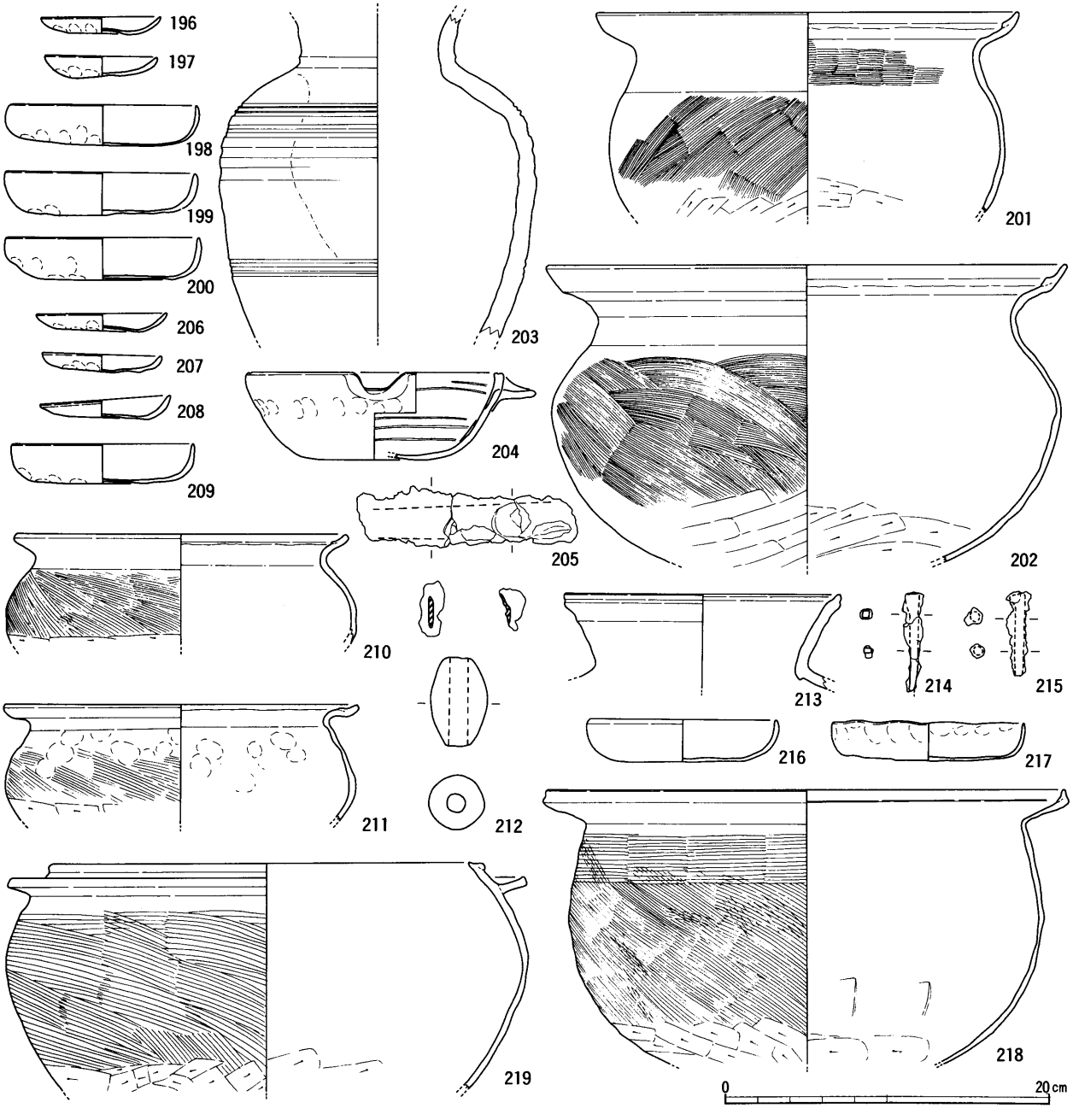


第34図　遺物実測図（1:4,185の拓本は1:2,187は1:1）SK52(173),SD56(174～187),SK59(188),SD64(189～191)

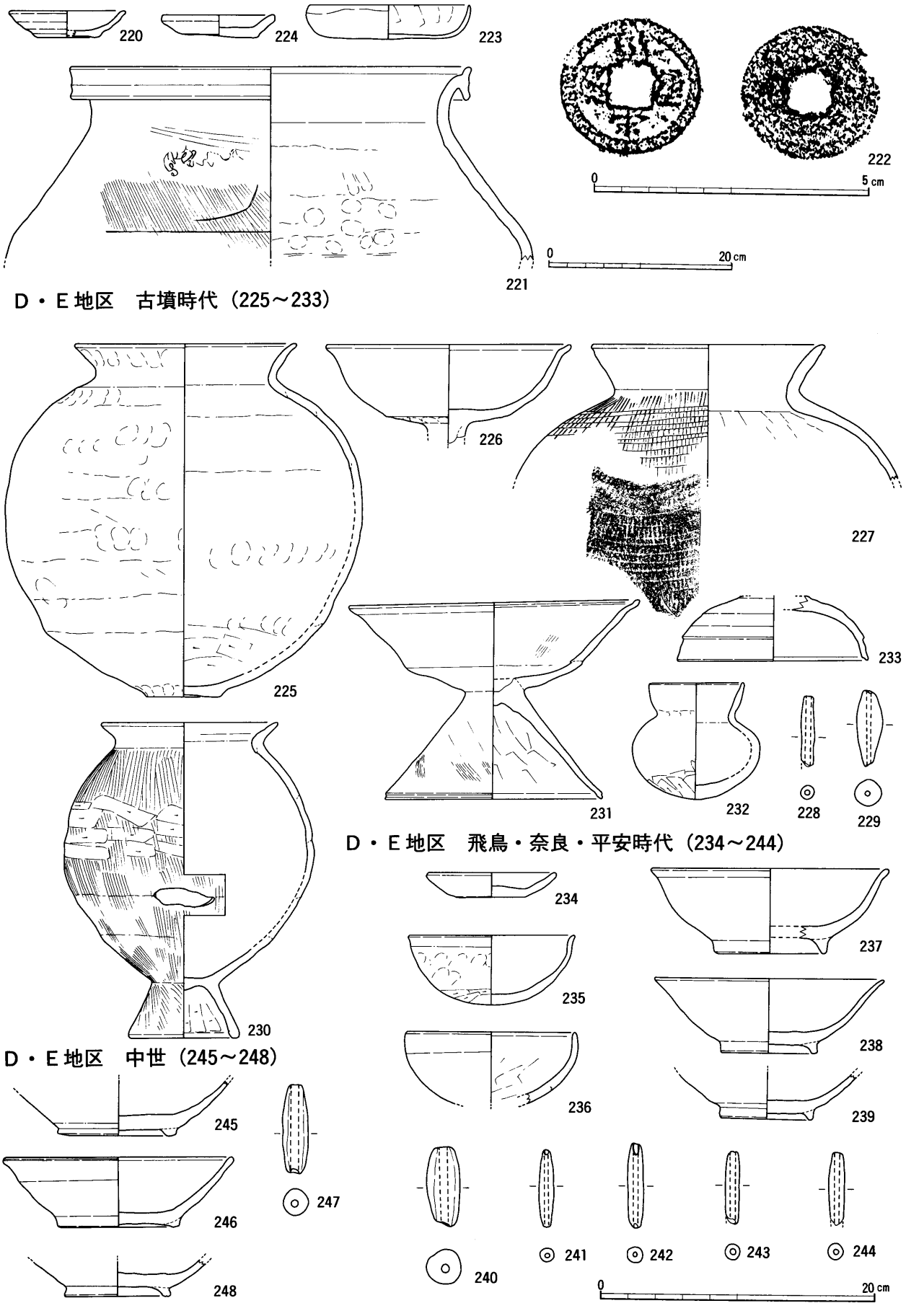
C地区　縄文時代（192～195）



C地区　中世（196～224）



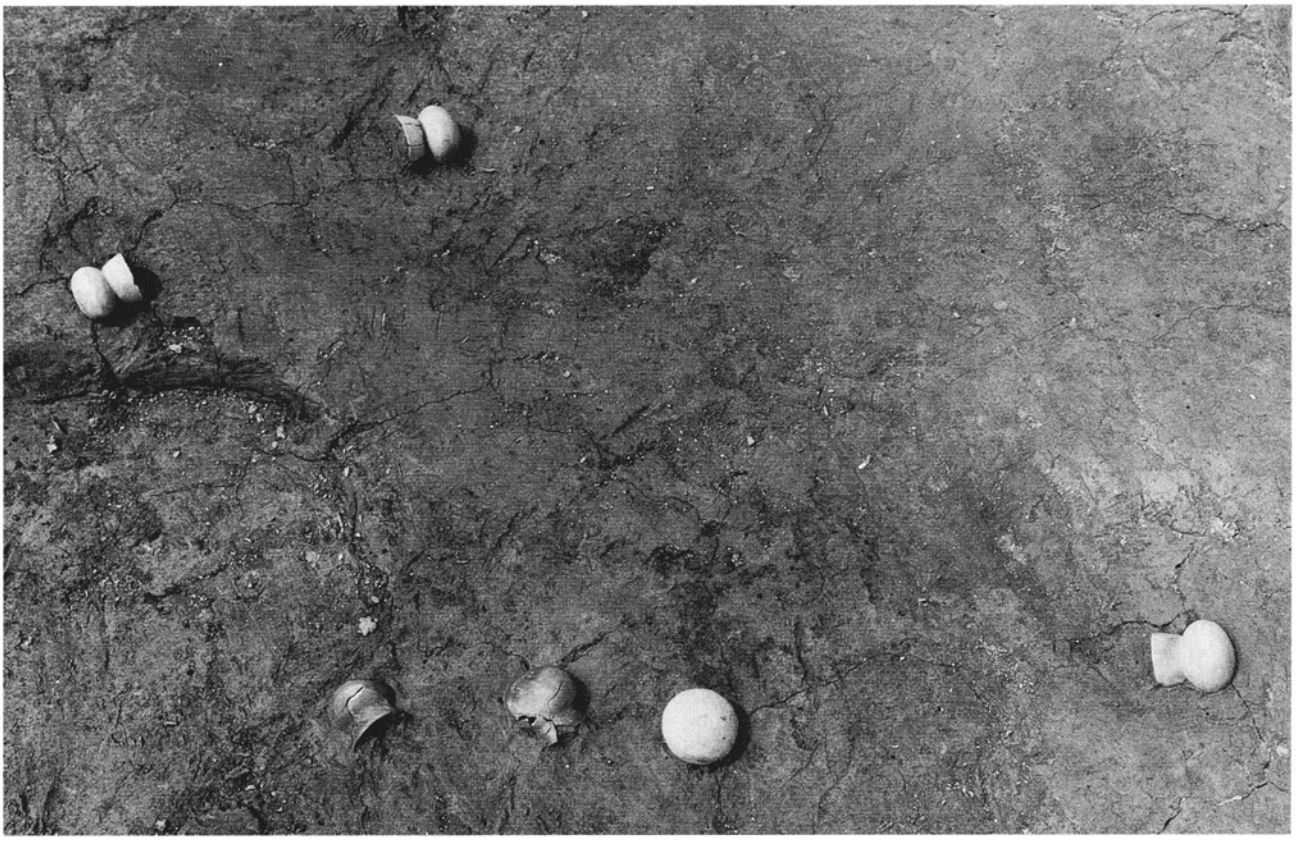
第35図　遺物実測図（1:4,192～195は2:3）SK78下層(192～193),SD88下層(194),SK91下層(195)／SK73(196～205),SK75(206～211),SK77(212),SK78(213～214),SK84(215),SK85(216～219)



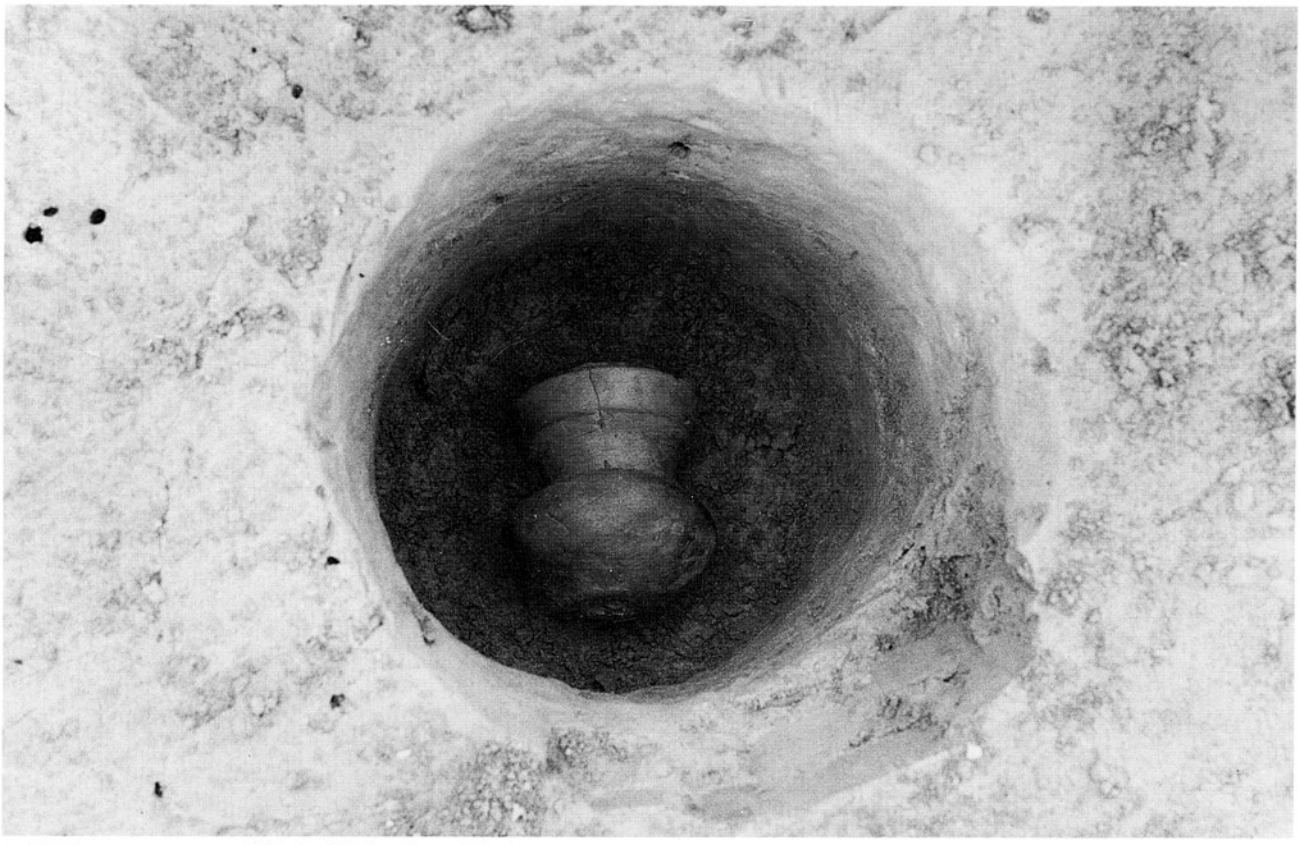
第36図　遺物実測図（1:4,221は1:6,222は1:1）SK94(220～222),SK98(223・224)／SK48(225～229),SK68(230・231),SK69(232),含含層(233)／SD27(234～237),包含層(238～244)／SD27(245),SK29(246～247),包含層(248)

図版１

Ａ地区全景（南から）



Ａ地区　ＳＨ15遺物出土状況（東から）



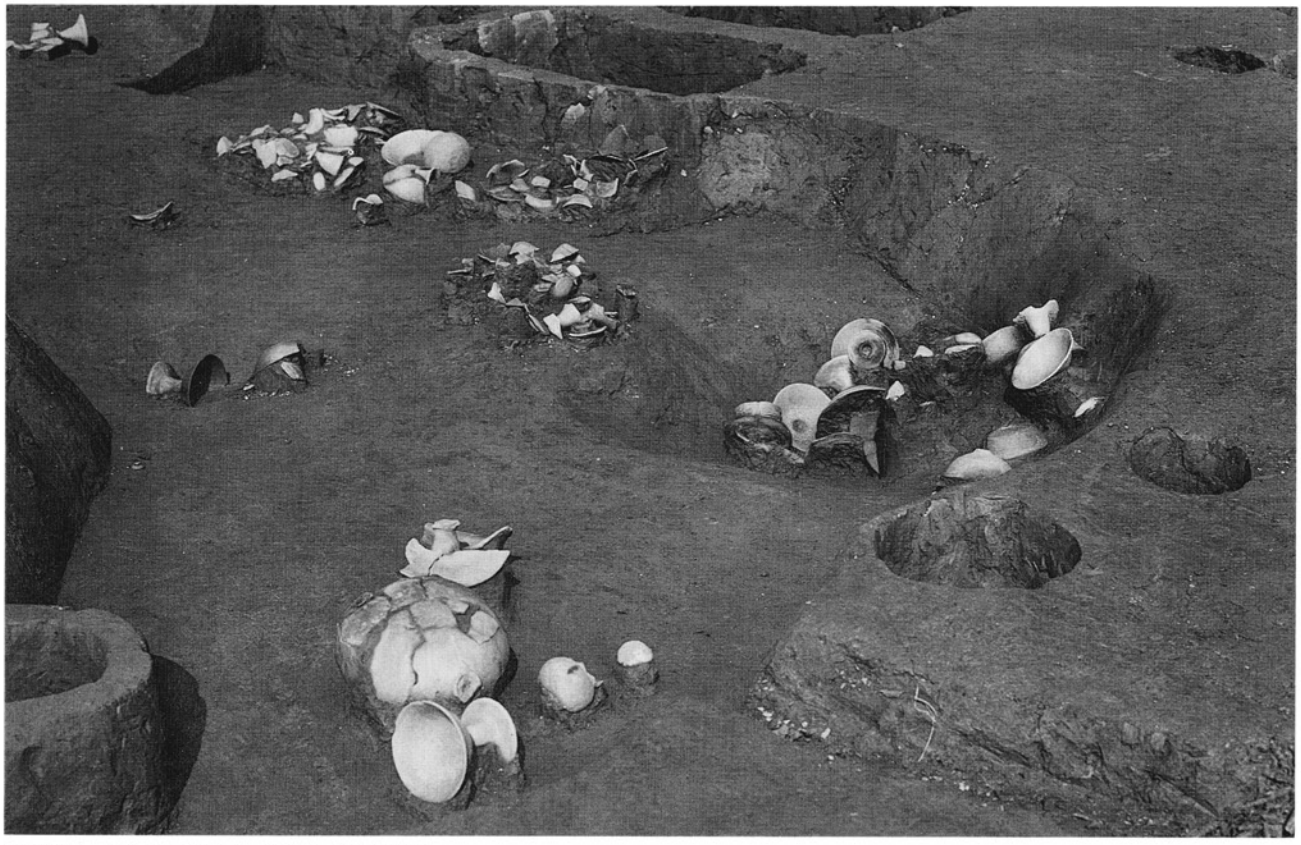
A地区　D－7　Pit 1 遺物出土状況（西から）

A地区　SD 7（南から）

図版 3

A地区　ＳＤ18遺物出土状況（西から）

B地区全景（北から）



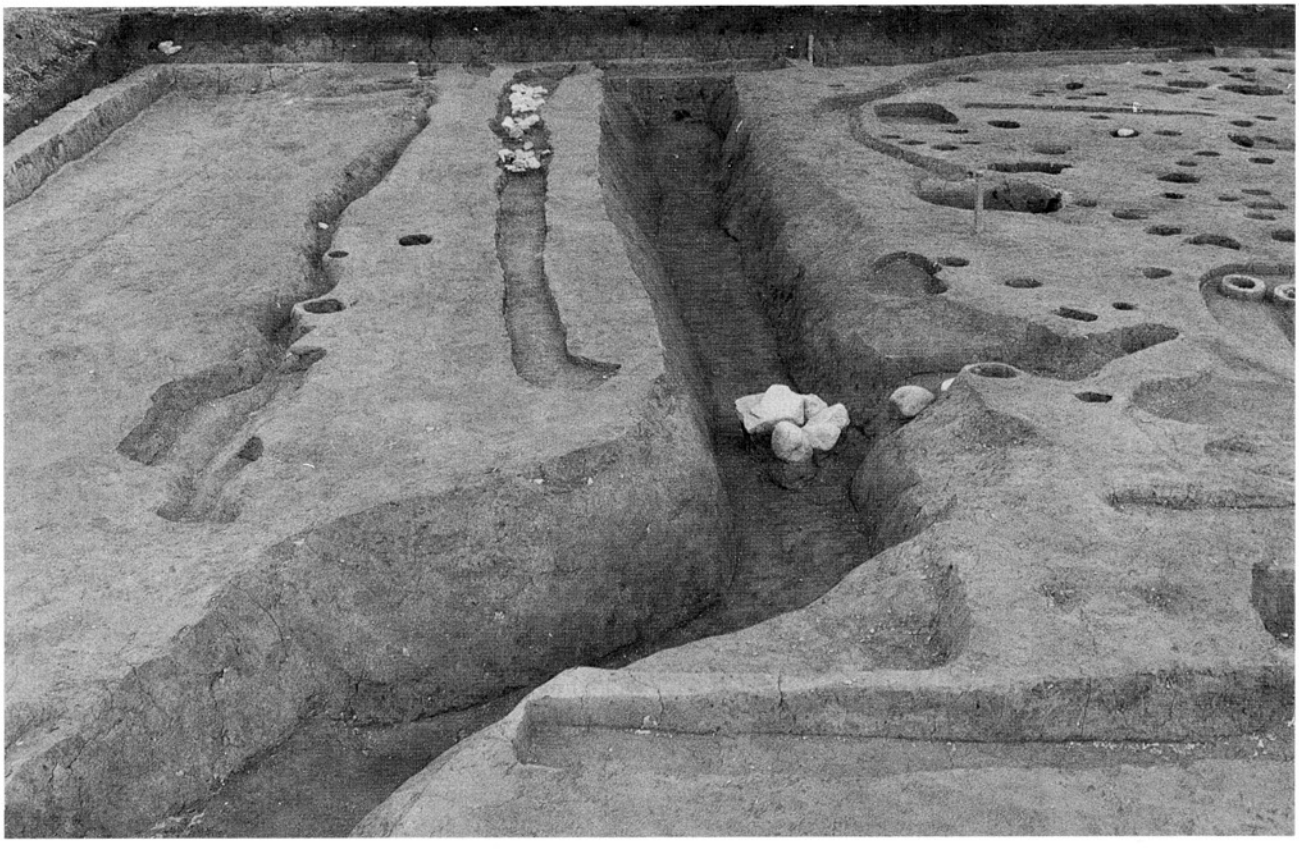
B地区　ＳＨ66遺物出土状況（東から）

B地区　ＳＨ66遺物出土状況（西から）

図版 5

B地区　ＳＨ66遺物出土状況（南から）

B地区　ＳＨ66遺物出土状況（南から）



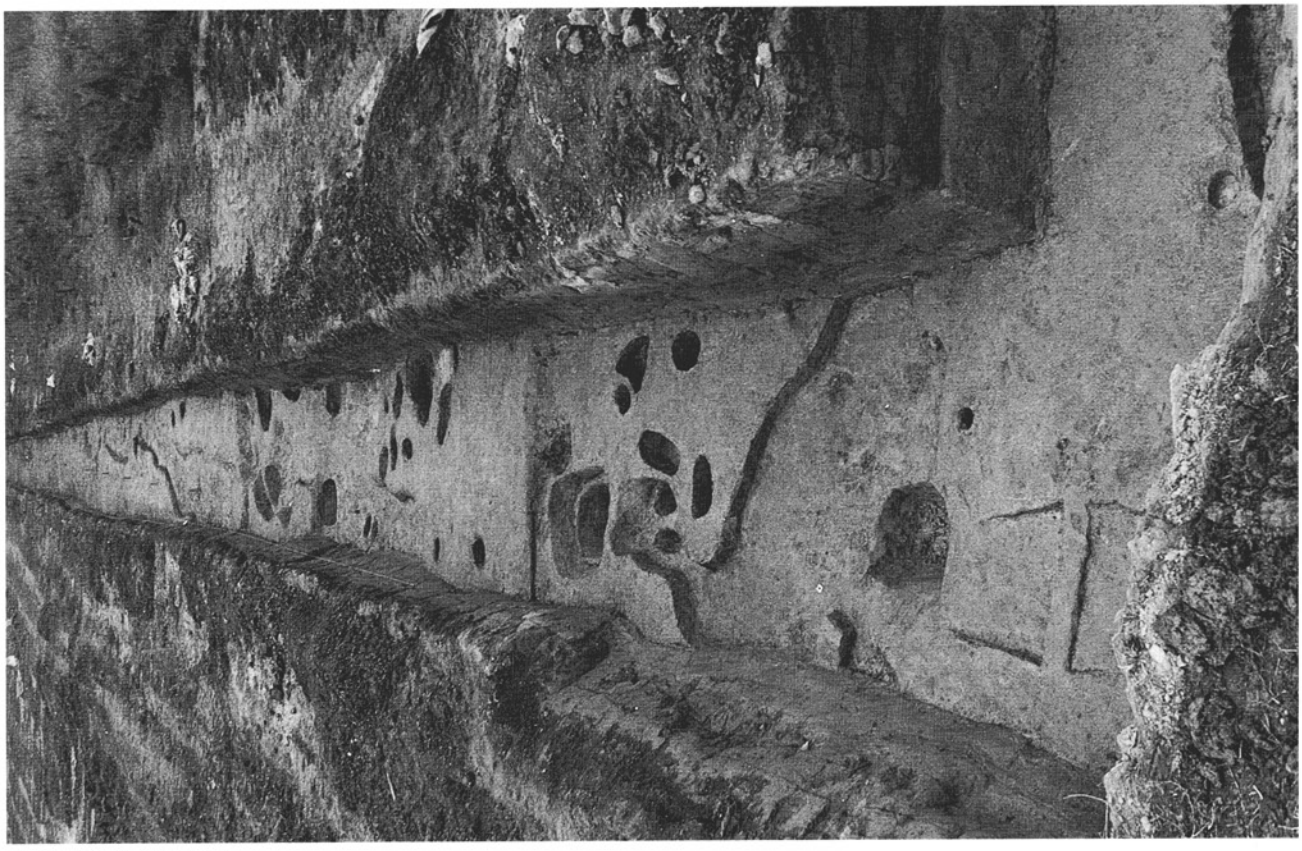
B地区　ＳＤ56（南から）

C地区全景（西から）

図版 7

C地区　ＳＫ81（西から）

C地区　ＳＫ87（北から）



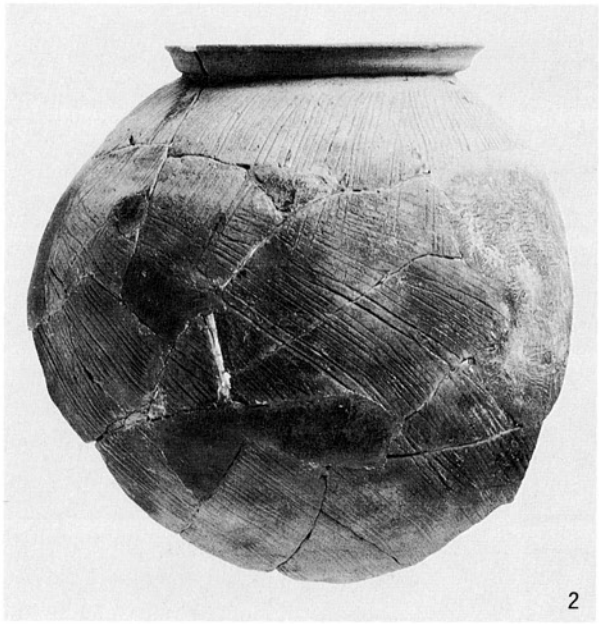
E 地区全景（北から）

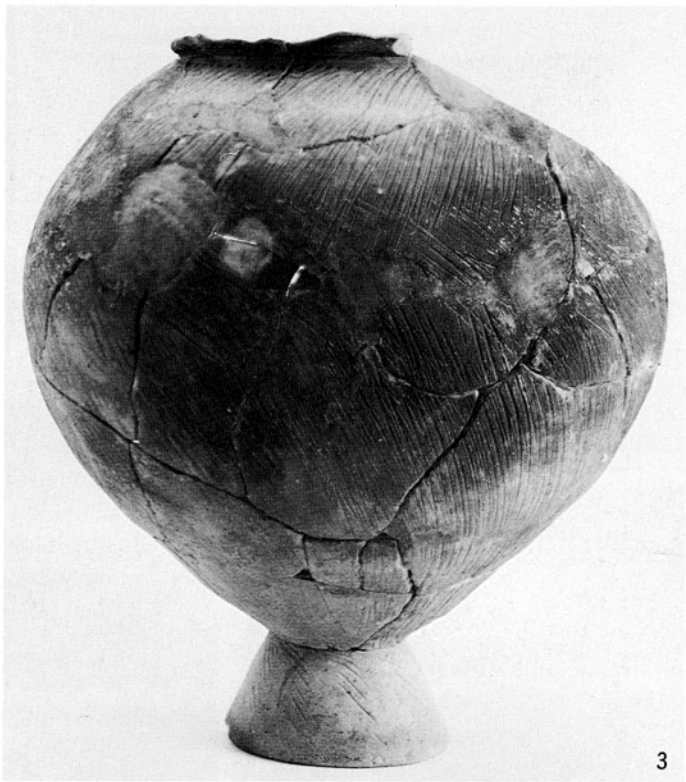
E 地区　ＳＫ68出土状況（北から）

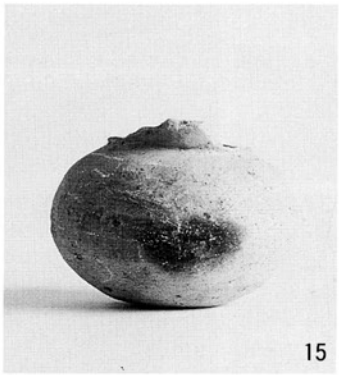
図版 9

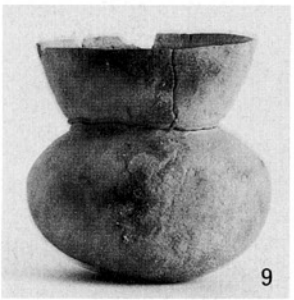
作業風景（A 地区）

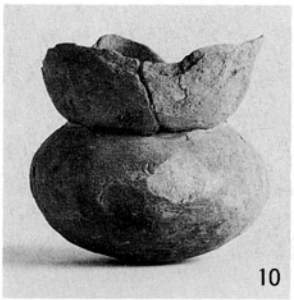
漕代幼稚園の訪問（1996.9.4）







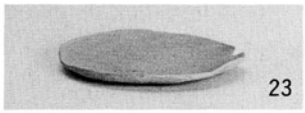


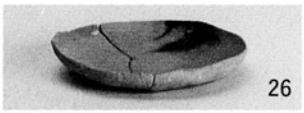


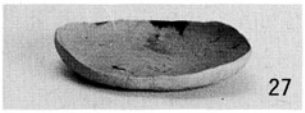
出土遺物（1:3）

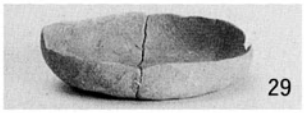
図版11

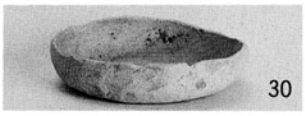
22

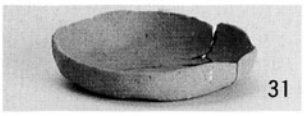

23

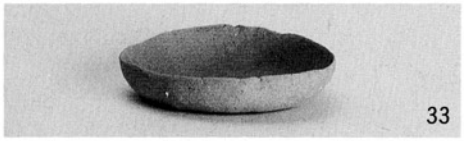

26

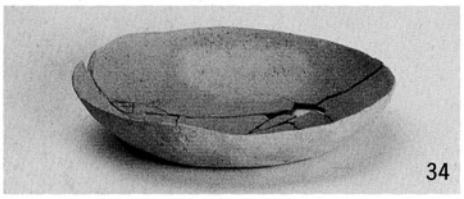

27


29

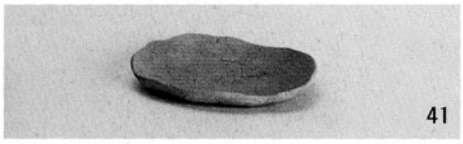

30

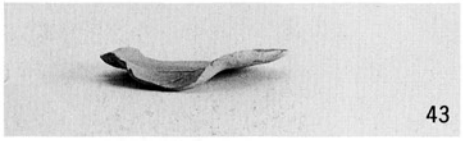

31

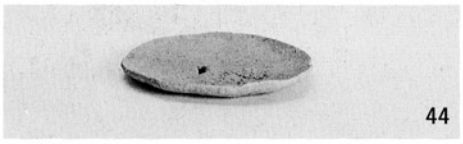

33

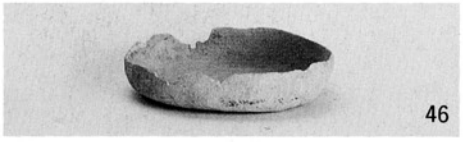

34

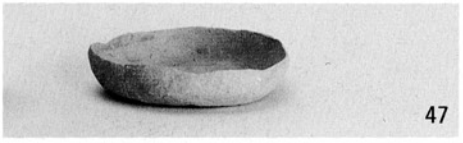
39

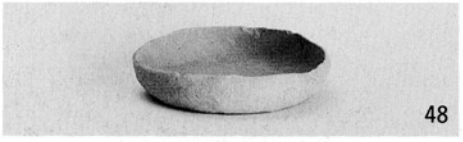

41

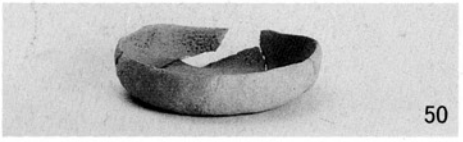

43

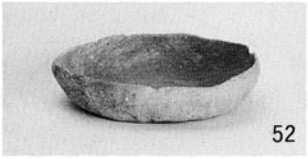

44

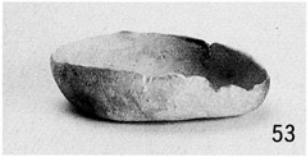

46

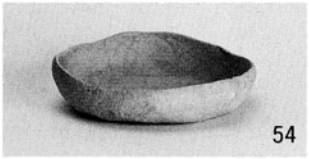

47


48

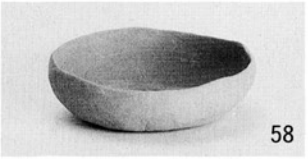

50

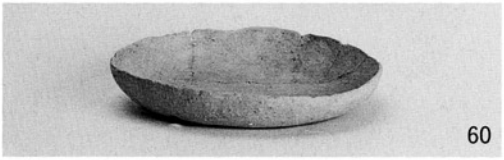

52

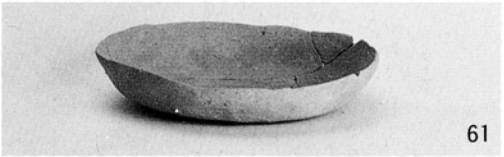

53

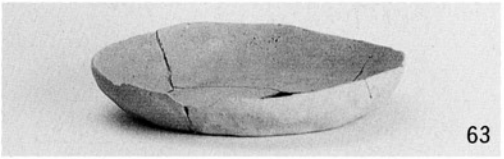

54

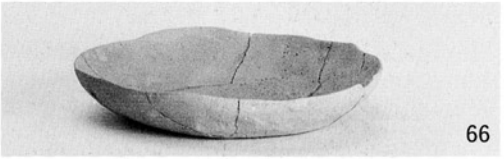
55

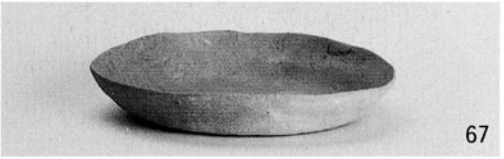

58

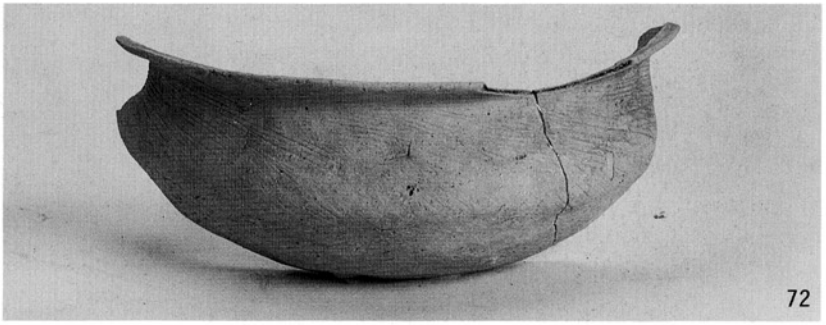

60

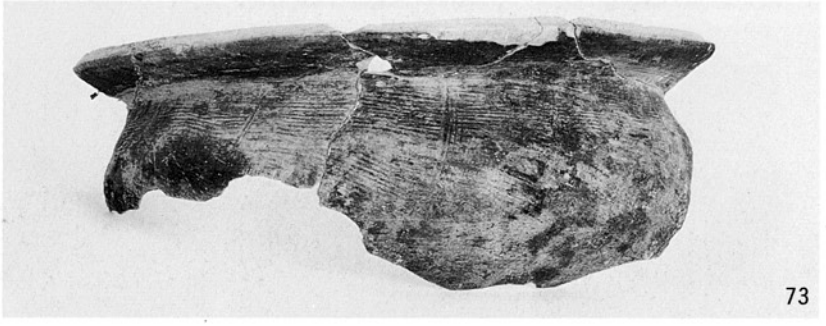

61


63

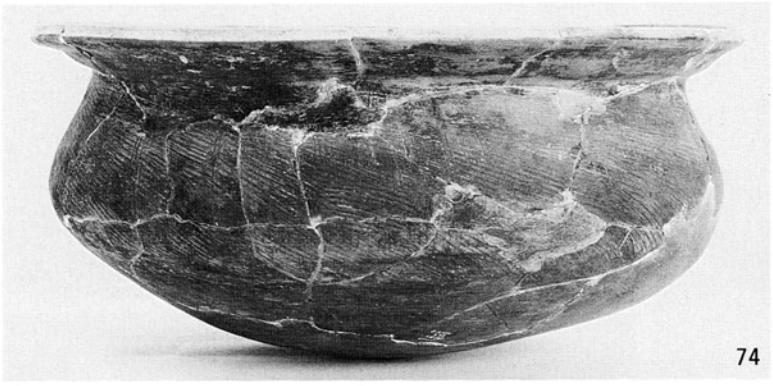

66

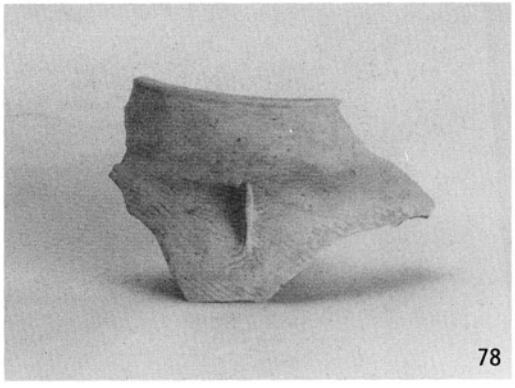

67

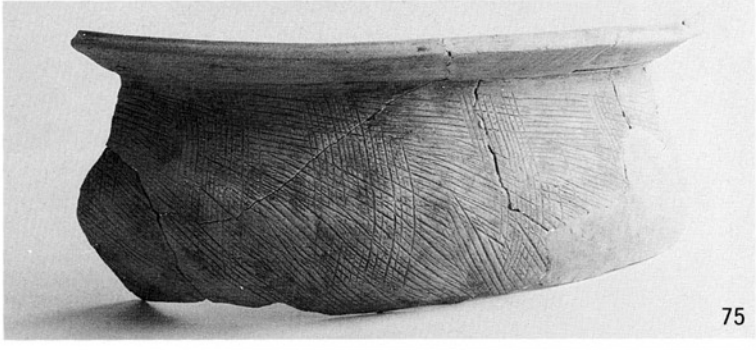

72

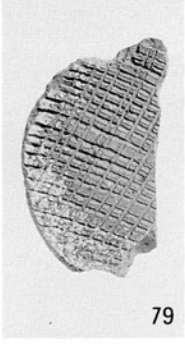

73

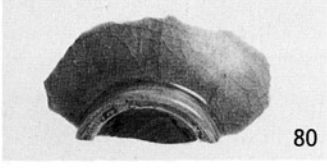
出土遺物（1:3）

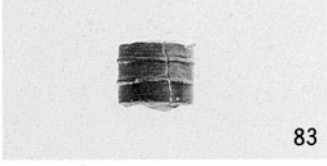


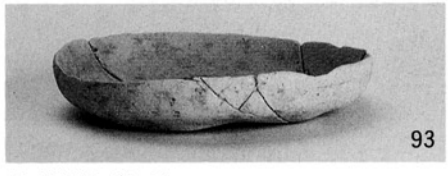






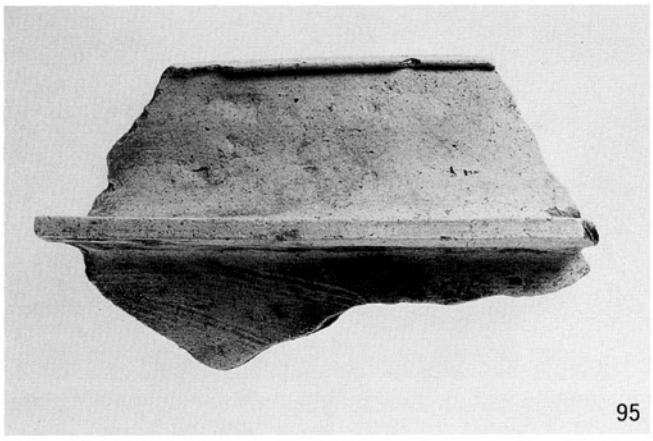




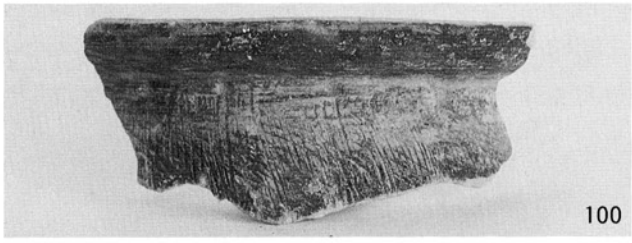


出土遺物（1:3）

図版13


95

99


100

102

104

105

106

108

109

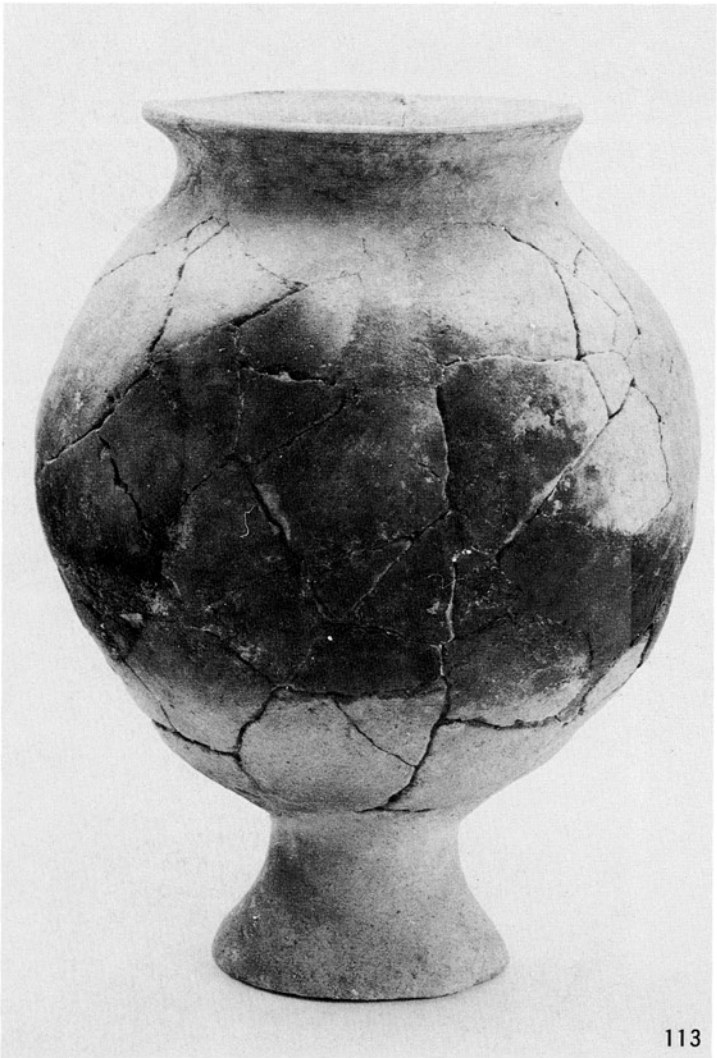
143

144

出土遺物（1:3）

112

115


113

116

117

出土遺物（1:3）

図版15

119

123

120

124

121

125

122

126

出土遺物（1:3）

127

131

128

132

129

133

130

134

出土遺物（1:3）

図版17

135

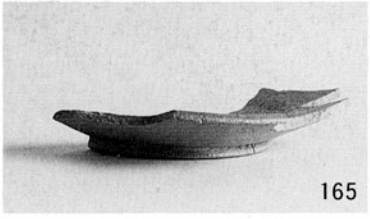
136

148

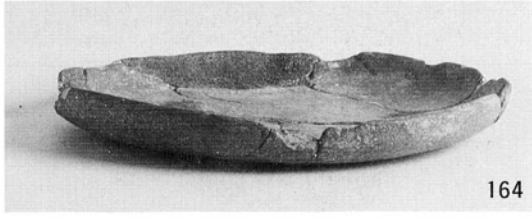
149

150

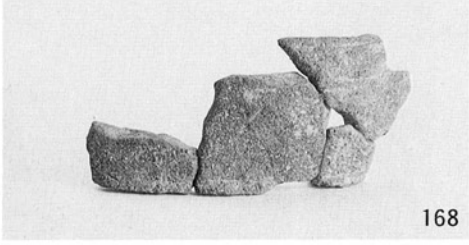
163

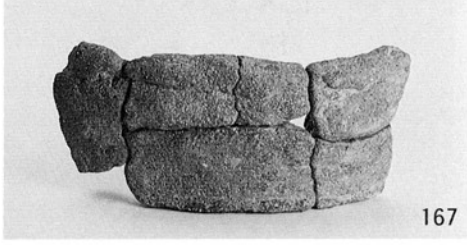

165

166

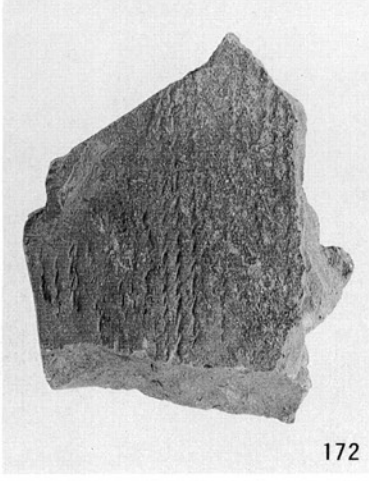

164

169


168


167

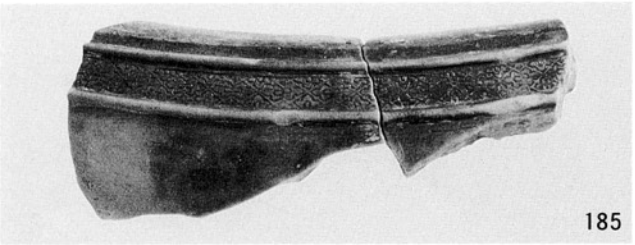
171

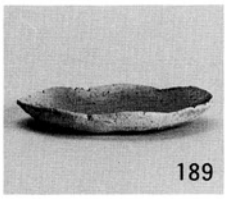

172

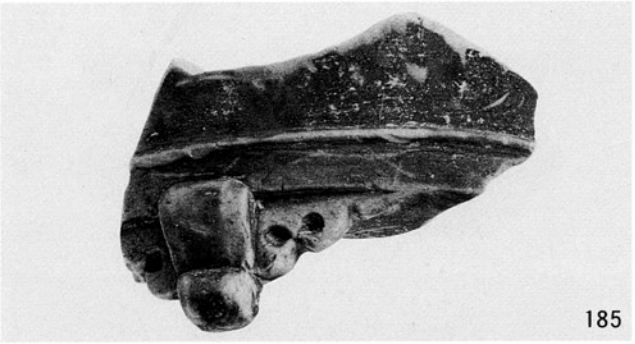
174

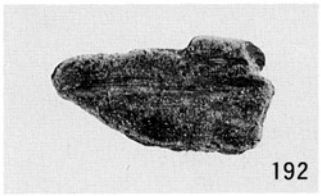
184

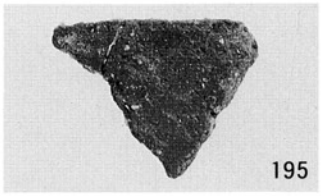
出土遺物（1:3）

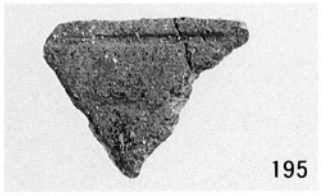


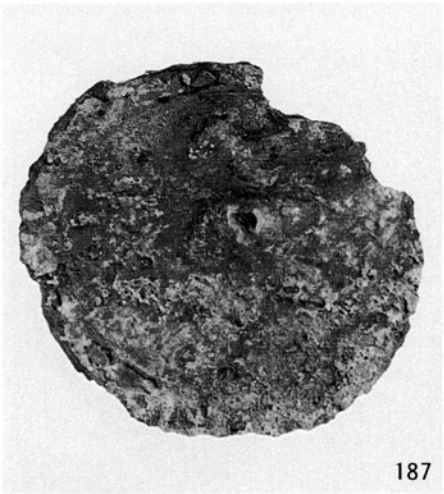








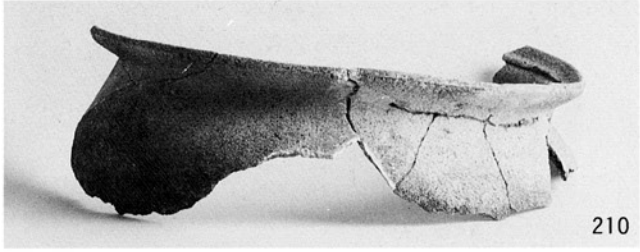


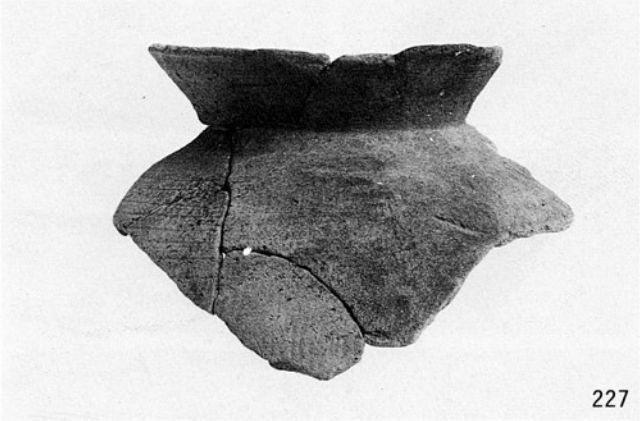


出土遺物（1:3,187は1:1）

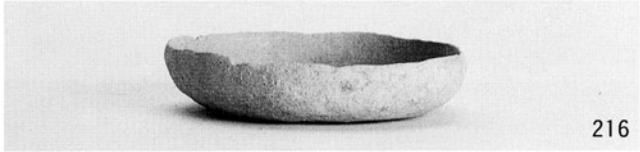
図版19

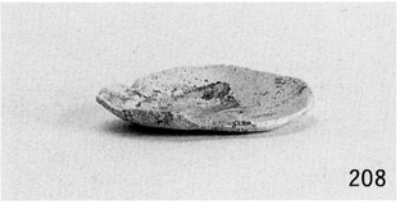
204


210

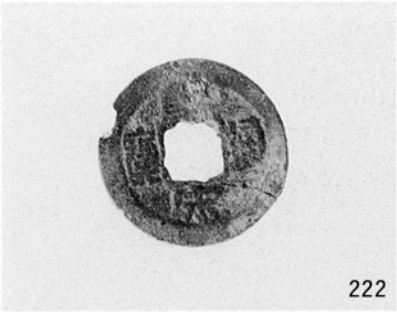

227

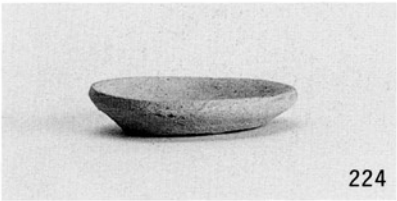
211

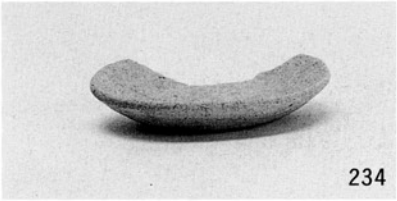

216

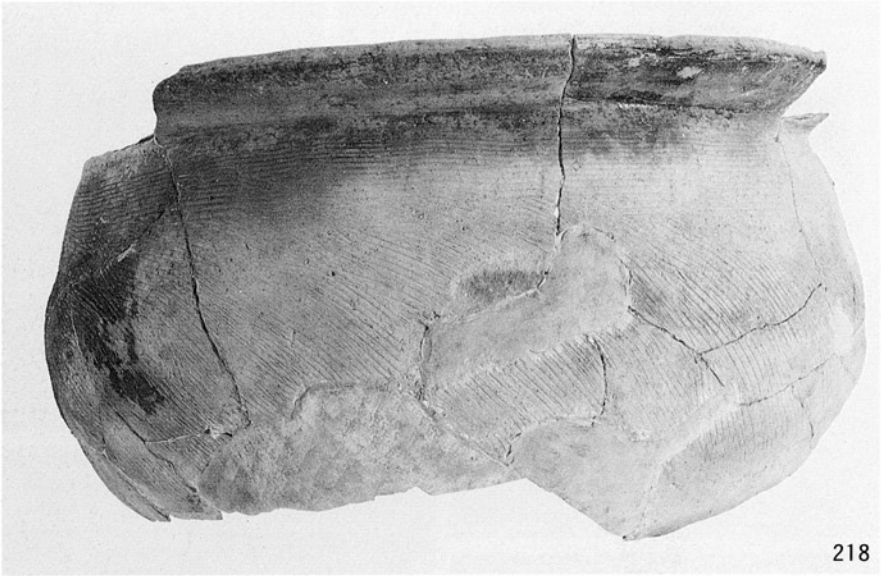

208

220


222


224


234


218

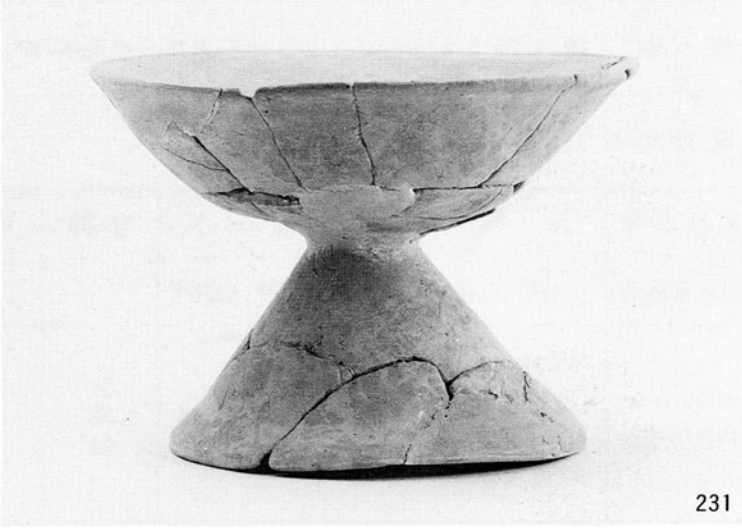
219

出土遺物（1:3,222は1:1）

221

225

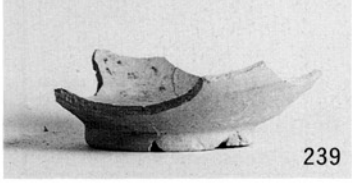
230

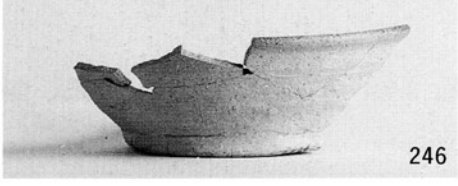

231

232

235

237


239


246

248

出土遺物（1:3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかのぼういせきはっくつちょうさほうこく
書名	中の坊遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１４６－２
編著者名	伊藤裕之　石淵誠人
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　☎ 0596－52－1732
発行年月日	１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
なかのぼういせき 中の坊遺跡	みえけんまつさかしめだ 三重県松阪市目田 ちょうあざなかのぼう 町字中の坊	24204	346	34° 32′ 02″	136° 35′ 32″	19960819 ～ 19961122	1,300	平成８年度県営ほ場整備事業（漕代地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中の坊遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器、石器（フレイク）	
		古墳時代	竪穴住居、土坑、ピット	土師器、須恵器、韓式系土器、土錘	一辺8.5mの大型竪穴住居跡から50余りの土師器高杯が出土。
		奈良～平安時代	土坑、溝、ピット	土師器、瓦（軒平）	
		鎌倉・室町時代	土坑、土塁、溝、井戸、ピット	土師器、陶器、磁器、瓦質土器（火鉢）、銅銭、土錘	大溝３条（うち１条には石組みの痕跡）

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告146－2

中の坊遺跡

1997（平成9年）年3月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　有限会社 第一プリント社